水戸光圀

元禄泰平記

八切止夫

元禄泰平記

全四巻

八切止夫10年ごしのライフワークで、大石内蔵介はまだ連載中ゆえ全巻揃いは春になりますが、

上製各 1,480

柳沢吉保

水戸光圀

浅野内匠頭

大石内蔵介

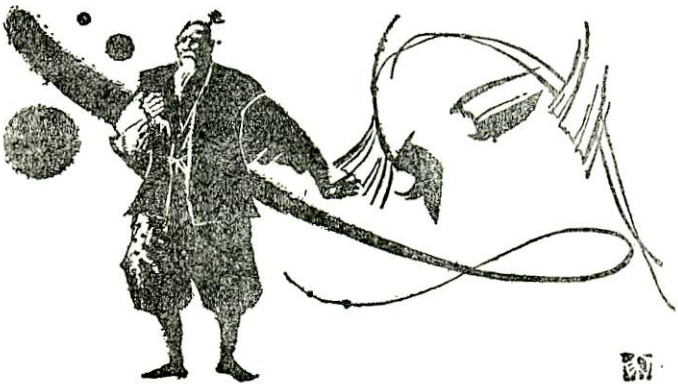
明治十二年の黙阿弥の芝居で九代目団十郎が大当りをとり柳沢弥太郎吉保は有名になったが、実際のところは何も知られていない。今日まで高松の壁画が見られるのも柳沢が保存した為だが、本書は実録とか南部史料と伝わっている物まで十年の余の歳月をかけ調べに調べあげ吉保の幼少時代から、大名として水戸家との対立まで面白く息もつかせぬ！

黄門とは、中納言の唐名というが、尾張や紀伊は五十万石以上ゆえそうだが水戸は半分で藩祖頼房から違い権中納言止まりゆえ黄門ではない。本物の光圀は寛永十九年の浅草寺境内の辻斬りが露見、父頼房に脇差や短刀まで取り上げられ三味線ばかりひいていた。が、この反骨精神はやがて綱吉や柳沢と対立…では黄門漫遊とは何かと史実で光圀の実像を！

元禄とは冷害の飢餓とインフレと暗黒な弾圧な時代だった。世直しを志す紀伊国屋文左一派と当時のキッシンジャー柳沢弥太郎吉保との苛酷な争いに、体制側吉良上野介に睨まれ巻きこまれるのは吉良おうば塩を駆逐した赤穂塩の浅野内匠頭。大正十二年関東大震災の時のごとく元禄十一年の大火からは茶湯千家弾圧に裏千家と被差別の世に変ってゆく。

反乱罪であり、内乱の罪に問われる武装突入の覚悟をきめた内蔵介は、十二月十四日討入りはラッキーにも一回で済んだが初から一回で成功すると思う訳はない。二段構え三段構えはしていなければ嘘である。儒教流行のため忠臣にされ義士にもされたが真実はそんなものではなかったのである。十年にわたって連載してきた元禄泰平記を初めて刊行！

目　次

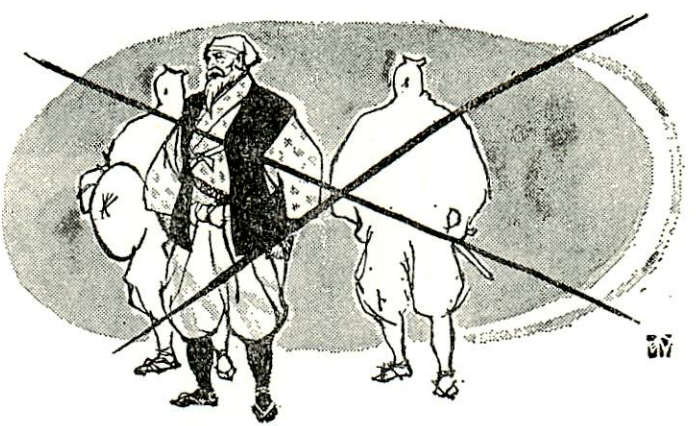


岩田専太郎画伯連載中挿絵

黄門記幼童講釈……五
下馬将軍酒井忠清……一九
光圀伝説の発生……三七
田宮坊太郎仇討……四五
湊川神社創立……六〇
士道、武士道とは……七一
助さん格さん……八三
皇室御料三萬石……九三
公儀隠密黒鍬組……一〇八
何が何でも……一一七
嗚呼忠臣楠子之墓……一三一

将軍綱吉来邸……一四三
光圀の苦慮……一五三
水戸の謀反……一六四
追い追われる者……一七五
女隠密春子……一八六
青蓮院の死闘……一九七
寛永寺の宮様……二〇八
光圀は黄門ではない……二一九
囚人駕籠……二三九
元禄十三年冬……二三六

装・中州さざ



岩田専太郎画伯連載挿絵

黄門記幼童講釈

読まれて余りびっくりされては困るから、前もってことわっておくが、この歴史考証をやわらかく判りやすくとしたような作品は、意外史元禄泰平記の〈柳沢吉保〉に続くものである。

小姓から甲府城主になった柳沢弥太郎が有名になったのは江戸時代だけでなく明治になってから河竹黙阿弥が、鳥越の中村屋の新春興行のために当時の人気役者九代目市川団十郎のため書き下したからであり、その、「柳沢騒動」と副題される「裏表柳の団扇絵」が大当りしたので、その芝居の筋書を書きうつしたのが、絵入りの読み本となって広く出まわった。これは参考にと実物の原文をそのままに援用して、いかに荒唐無稽かを詳しく前述の本にはかいておいた。

がさて、その柳沢弥太郎を向こうに廻して、

「われこそは神君家康公の第九子頼房の第三子にして、伏見生まれといわれる家光ごときとは、素性が違う歴っきとした権現さま直系なり」と水戸光圀が血統と毛並のよさで天下を狙ったものの、すでに天下泰平。

「もはや御老公が、なんのかんのと、こうるさく、つべこべ申される世ではござらぬ」

と、せっかく光圀が挑戦しても、ろくに相手にならず、その代り小石川江戸屋敷にある限りは

無位無官で放りっぱなしで柳沢は、従来の慣習を無視して冷や飯をくわせておいた。

そして皮肉にも、自発的な恰好で押しこめ隠居にして水戸へ追いやってから、ようやく中納言の下の権中納言を閉門同様な光圀へおくったくらいである。

だから江戸時代にあっては、幕末の水戸斎昭が、別に血はつながっていないけれど、

「われこそは義公（光圀）の御遺志をつぎ、おおいに天下に志をのべんとするものである」

と、担ぎ出すまでは、光圀は徳川家にとっては反体制的な人物であったゆえ文化文政の出版ブームの時でさえ、今日のような「水戸黄門漫遊記」はでていない。天保時代に「漫遊記」の版本が出たというのは誤伝であって、幕末の斎昭のときに、今でいう御用作家というか志道軒が、金をだして貰って、知り合いの版元から光圀の「仁徳録」を二百部余りだしているだけである。

では水戸黄門の仮称で光圀が、いつから世に知られるようになったかといえば、皮肉な話だが明治以降のことである。大正年間の立川文庫の一冊になったり、やがて、それが種本になって日活向島映画になるのは後述するが、広く知れわたるようになったのは、まだ半世紀前のことだが、その皮切りともいうべきものは明治六年から七年にかけての実録本流行の時である。大東亜戦争が終った途端に、「真相」とか「暴露」などといった雑誌が発行されたり、単行本で、「大本営発表はみな嘘だった」式のものが、本屋の店頭に溢れたけれど、徳川幕府瓦解後も同じような現象をみせ、素っ破ぬき的なものがおおいに世にでたのである。

つまりそれまでは好意的にはみられず徳川家から睨り去られていて、陽の目をみなかった水戸光圀も、徳川家が潰れた反動で、まず斎昭が作らせていたのに加筆され、改めて明治版の「水戸黄門仁徳録」として実録本になって広く現れてくるようになったのである。が何故に、「こうもん」といった事実無根な名をば光圀につけたかといえば、これも後述するが、（こうもんまん遊記）といったポルノものが「壇の浦合戦記」と並んで、貸し本屋の目玉商品で当時おおいに読まれていたので、そのよく売れていた名をそのまま踏襲したものであるらしい。

さて柳沢騒動をかいてゆく上に、どうしても出てくるのがそのライバルの水戸光圀だが、どう扱ってよいか判らず、井伊直興が元禄十年から大老だったのに目をつけた河竹黙阿弥は、幕末に桜田門外で殺され有名な井伊大老を舞台にだし、柳沢やその一味を退治する役割りにかいた。

しかし、やはり相手の光圀も芝居にしたかったのだろう。

「春本のこうもんさまでは困るが、実録本の黄門仁徳録の方なら扱えよう」と考えた。

しかしである。仁徳録をよんでいる向きより、前からまん遊記の貸本をみている客の方が多かろうと考えた河竹黙阿弥は、そこで当りさわりのないようにと、

（いくら好色のひひ親爺のごとく伝わっている黄門さまでも、幼ない頃はうぶだった）と、

「黄門記幼童講釈」の題をつけ、明治十年十二月の新富座の年忘れ興行にかけようとした。

しかし座元の市太夫が難色をしめして、「黄門といやあ白髪白髯の爺さまと、お客が決めて掛

っている。それを子供の黄門さまがよちよち出てきては絵になりませんぜ」と、まっ向こうからこれに大反対をした。

河竹黙阿弥は縁あって、水戸の旧家から流れでた蔵書を読ませて貰い、（光圀が幼少のみぎり、今日では切利支丹一揆とされ局地解決にされている島原の乱は、まったく政事目的の虚構な発表であると看破し、智恵伊豆と当時よばれた松平信綱をやりこめたことがある……）

とする意想外な事実をつかんでいたので、これならゆけると腹案をたてていたのだが、「困る……」と座主からいわれては書けもしなかった。そこで一夜づけみたいに実録本から、そっくり筋書を拝借して書きあげたものをばこしらえ、これを舞台にかけた。

ところが役者が当時の粒揃いで、九代目団十郎が水戸黄門のふけ役と、白塗り立て役の稲葉美濃守の二役。三世尾上菊五郎が赤塗りの河童の吉蔵に本悪の藤井紋太夫。前々代の市川左団次が織田越後守と魚屋久五郎と、それぞれ二役をつとめた。この顔ぶれで当らぬ筈はないから、大入満員の札止めとなった。もちろん内容はいい加減なもので、当時の上演筋書の荒筋では、

「綱吉将軍が生類憐愍のお触れを出した時、浅草三筋町の魚屋久五郎は誤って犬を殺して死罪に問われたのを、久五郎の許婚の芸者小富は、将来の夫のために心ならずも水戸の家老藤井紋太夫に身を任せて命乞い。また父按摩の玄碩もやはり倅可愛さに水戸黄門に直訴を企てて久五郎の命を助ける。さて時の勘定奉行の赤岩佐渡守は河童の吉蔵を手先にして水戸家の安宅丸の船底に潜

らせて夜な夜な不思議な啼声を立てさせて調べさせてみると、船を取毀して私腹を肥やさんとしている悪人共がいるのが発覚した。藤井紋太夫もその連類なることが発覚したので、赤岩佐渡守は水戸家の大事であると、かくかくしかじかの訳であると黄門に告げた。そこで黄門公は能楽の催しに事よせて、藤井を鏡の間に呼び入れて人知れずその罪を責め、秘蔵の面を打割ったと称して一刀の下に成敗してのける」というのがその梗概である。

市川右太衛門主演や片岡千恵蔵の映画にも、そっくりそのまま百年前の筋立てが使用され、それで可なりとされていたようだから、紋太夫も気の毒なものである。なにしろこのひとの娘は柳沢邸で死んでいるし、光圀が手討ちにしたのは、彼が貞享四年から睨まれだした河原者上りゆえである。芝居は幕末までは新地の弾左衛門取締り下だったゆえ、いくら黙阿弥でも十年前に改元とは、とても怖ろしくて真相は書けなかったし世変りしていなくて筋立であるといえよう。

とはいうものの今日ではテレビの大河ドラマあたりが「歴史」と誤られみられているらしい。が柳沢弥太郎にしろ水戸光圀にしろ、今日の一般の常識とされる歴史観は、歴史家ではなく河竹黙阿弥あたりによって作ってしまわれたものといえる。といって彼を責めるのではない。

日本人というのはエンターテメントでさえ、小説を小説として読まず芝居を芝居としてみない国民性がある。つまり「切腹作法」のごとき本ときたら舞台の内匠頭切腹の場そのままの書き写しで通っている。また幕末の新徴組あたりでさえも、

「刀は打ち合い数合で殆んど折れ曲るものゆえ不意打ちを食った際の切り払いだけに致し、連日の武術の鍛練は、きっと槍を主にすべし」と、稽古の取り決めをしていた。

なのに、明治までの芝居の舞台幅は、せいぜい五メートルあるかなしかであったゆえ、その幅のところへ槍をだしては、突き合いの尖端だけで一杯で舞台へ、とても役者が出られぬから、「雪月花」といったような殺陣（たて）が考えられ、二人でも三人でも並べる刀が立ち廻りの持ち道具になった。それから武士はさしている刀で斬り合うものみたいに誤られ、テレビでもチャンバラばかりが、絶対に折れ曲らぬジュラルミン刀で演じられている。が、岩波文庫に入っているところの、大道寺友山の「武道初心集」にも刀はすぐ折れるからと戒めてある。なのに想えば映画の見すぎで毒されて、昭和刀をもって勇躍戦地へ行ったまま帰ってこない私の友人どもは哀れである。

熊本の三角（みすみ）から雲仙岳への観光コースで、島原半島へ渡るのが近頃は流行している。が行くと今も残る島原城の遺蹟へつれてゆかれ、石段をのぼらされながら、

「ここが、かの島原の乱のあった処でして、美少年天草四郎と共にたてこもった五万からの老若男女が、イエスさまの信仰に殉じ一人残らず玉砕したのです」

すらすら説明されるからして大半の観光客は「あっ、ここがそうか」と感心し納得をする。

しかし本当は違う。寛永十四年の暴発の際にはこの島原の城は松倉勝家の城だった。

当時江戸に松倉はいたが、国許の家老岡本新兵衛、多賀主水（もんど）が代って、すぐさま深江村に集まった物価高と増税への一揆の者らへ討伐令をだした。

それでも治まらず各地に騒ぎが次々と起り、鍋島領や豊後府内（大分県）にも波及した。

そこで、同年十一月九日に江戸では松倉と豊後の城主日野吉明へ帰国を命じた。

それまでの島原城は千五百ほどの一揆勢に囲まれてはいたが、城内三百の侍と足軽や小者は、それでもひるまず三の丸や二の丸はすてたが一つになって本丸に籠城していた。

が城主の松倉がようやく士分百名を伴って戻ってきたので勇気百倍。それに引き換え一揆はやむなく攻城を断念。初めからの根拠地である島原半島の南端へ引き退がった。

さて、そこは日本では原の古城とよぶけれど、今も伝わっているところの、

『フロイス日本史』によれば、イゼズス派の教団本部とされていた「口ノ津」のことである。

つまり島原の乱とよばれる激しい攻防戦があって、同じ日本人どおしが五万も六万も殺し殺されたのは、包囲されたきりで無事に済んでしまった島原城ではなく、今は跡形もないが口ノ津の方の古城なのである。

ところが世の中は不思議なものであって、歴史家の誤りであろうとは想うが、

「その形状が出口一個所のみで、寛永に乱があった島原城に似かよっているゆえ、島原の廓と京ではいうのである」と、百科辞典の「島原遊廓」には出ているから、ますます可笑しくなる。

何故にそんな間違いを故意にしているかといえば、色々と隠さねばならぬことの為らしい。

水戸光圀はときに九歳だったが、なにしろ生来のきかん坊であったし、

「千代松」の幼名から元服し、まだ光圀とは名のらずだったが、徳亮（とくすけ）を名のり父頼房の第三子ではあったが、二年目から跡目と決まり千代田城へゆき将軍に拝謁をすませた。そして、いまの後楽園球場あたりの小石川屋敷にいたが、なにしろ俗に、三ツ子の魂は百までとはいうが、

「九州の乱は天下騒動の前兆ときくが、何故であるか」と、まだ少年なのに後年のお節介やきの兆候をもうみせ、御守役の重臣中山信吉に向かって尋ねかけたりしていた。

「初めは松倉領の百姓一揆ぐらいに、大公儀では想われていましたが、それに九州の浪人どもが加わり半島一帯が、まるで蜂の巣をつついたような、大騒ぎにござりまする」

と答えられたところ、幼くても後年の光圀である。相当にしつこい性質なので、

「それくらいの事で何故、天下大乱にあいなるのだろうか」と重ねてきいた。

「実は先年のこと上さま御入洛のみぎり小御所にて、前帝よりいきなり従来の三万石の御蔵入りでは、文武百官の堂上公卿から北面の侍どもまでを養いかねる……せめて山城一国ぐらいをと仰せられた。が、上さまには予期せぬ話ゆえ面喰われたので、はあと立会いの中院卿にいわれたそうでございます。しかし二十万石からの領地を、左様しからばと差し上げられるものではありません。それで上さまはもう京へは行かなくなられました。しかし御所では違約を責めてこられ

る。そして立腹なされ討幕の院宣を出されたようであると所司代板倉重宗から知らせが入ったあと、まるで受けて起つたごとく島原半島の一揆が勃発したのでございます」

「成程それで小西の旧臣の肥後浪人どもが、大挙して加わり王師の軍などと騒いでいるのですか……」といった意味のことをきけば、中山信吉もつい話に釣られて、

「よって現地へは板倉の弟の内膳正重昌なる者へ一万千八百五十名つけ、上使とし向けたきりでございますが、京は御所のご謀叛を防ぐために街道筋の大名に出兵させ十余万の者がひしめき、町家の娘へも悪さをします故、かしまや奈良の木津あたりの遊女をみな集め、六角に未曾有な規模の、とても大きな慰安所をこしらえたのでございました」と答えた。

これが、島原の乱のためにできた京の島原遊廓の起りだが、少年の光圀は何を慰安する場所かはまだ当時は判らずだった。が年が変って、板倉重昌が討死。

代って松平伊豆守が赴任する事になったので、御三家水戸上屋敷へ出陣の挨拶にきた。

「どうしてオランダ国の力を借りるのですか?」と、そのときも光圀は同席して尋ねた。帆船デ・ライブ号が大砲を何門もつみ、口の津へ向かっていると聞いていたからである。

というのは、中山信吉の説明では、原の古城である口の津に頑張っている者たちは、「天帝(デウス)」の耶蘇の旗や、十の字の紋章旗を掲げて戦っているから切利支丹宗徒だという。なのに同じ宗派のヨーロッパ人の、平戸商館長ニコラス・クーケバックルらが攻めにゆくのは、

（同門同宗は共に討たずという戒律なのに……可笑しい）と思ったからのせいである。

もちろん光圀の洞察は正しい。ヨーロッパではキングさえも、教会から破門をいい渡されれば、雪中にひざまづき、神の慈悲の許しを乞わねばならなかった中世のことである。

もし異国の東洋であったにしても、キリスト教徒としては同じことでオランダ人であっても、もし同じ宗派の者がたてこもる城ならば味方するべきが当然であって、それを討つことは教会から破門され、地獄へ落ちねばならぬことになるからして不審に想ったのである。それに対して、

「これは、これは……まだお若いのに聞きしにまさる御英才――びっくり致しました」

智恵伊豆とよばれた武州（埼玉）忍（おし）の城主は、にっこり優しく微笑してみせつつ、

「イゼズス派教会の者らは、彼らの神の教えをときに来ていましたが、布教の費用をひねり出すために、日本では一粒も産出せぬ火薬の硝石を持ってきていました……ですから横文字の彼らの教義も読めず説教を聞いても何も判らぬ者が、硝石ほしさにドリチェナキリストアンとだけ唱え、切支丹大名とよばれていました。さて口の津は彼らが昔から治外法権の土地としていました場所。一挨は火薬入手したさに襲撃して、倉庫番の白人やその奴隷を殺しているのです。ですからオランダのカピタンは、神の名において仕返しをするため協力したいと申してきたのです」

判りやすいように、ゆっくり屈みこんで話をした。が、それでも素直にこくりとうなづかず、

「それでも戦況をききますと一挨の者は、切支丹旗を城壁に、いっぱい並べているというではあ

りませんか」まだ話をきこうとするのか、光圀はなおも食い下がった。

伊豆は、だから持て余し気味に、にこにこしてみせつつ事もなげに、

「城内の教会に飾ってあったのを景気づけに、ひっぱがし持ち出してきて飾ったのでしょう」

といってのけ。

やがて島原へおもむいた松平伊豆守は、肥後の細川忠利を加勢に出陣させた。

光圀の父の頼房は、それをきくと、

「外様大名を片っ端からお取り潰しなさっているが治世なのに、ひとり細川は外様なのに春日局が、小倉十万石から肥後五十四万石へと五倍余の加増をあえてした。だから春日局の実父斎藤内蔵介と、丹波路の京の入口の船津桑田の二郡を天正十年六月当時領地にしていた細川とは、信長殺しの仲間ではなかったかと噂されている。よってそれを打ち消す為にも、何か大手柄をさせねば恰好が取れぬところゆえ、春日局が伊豆に命じたのであろう」

大奥どころか表の政務まで口出して、今では一切を仕きっている恰好の、春日局の専横をかねて立腹していた父は烈しく批難した。その話をきき政事とはそういうものかなと光圀は想った。

「三万五千から四万七千に及ぶ一揆の中で、首をはねられ処刑の者が一万七千。後の女や子供はみな焼き殺されて、降伏して助かったのは画師一名のみ……」と戦果を聞かされたときも、

「信仰の力とは怖しいものでございます。細川、黒田、寺沢、鍋島、有馬、松倉、立花ら九州大

名の三十万の大軍に囲まれつつ、足かけ二年も頑張りぬき、最後には女子供まで一人も助かろうとせず、みな唱名をとなえ玉砕とは聞くだに寒気がします……」

と噂を耳にしても、光圀はかねて中山信吉より色々と教えられていたので、

「……そうか」と聞き流しはしたが、その実、地獄を瞼に浮かべて肌に粟だつ想いがしていた。

寛永十六年の正月になって島原平定の功をかわれ、忍三万石から同じ埼玉県の川越六万石となった松平伊豆が、改めて御三家の水戸家へ対し、

「このたびの御加増まことに有難き仕儀」と小石川屋敷へ御礼言上にきたときのこと。

光圀はまたしゃしゃりでて同席を許されはしたが、二年前とは違っていた。だからずばりと、

「大の男の絵かきが命乞いに投降したのに、女や幼児が一人も助けを求めなんだのは……変だ、おかしいな」ときいたものである。ところが、

「おかしくてもおかみの御政道の為には、その方が良ろしいようで……」

言葉は優しかったが、伊豆も今度はびしりとばかりいってのけた。そこで光圀は脅え、

「怖いお人……」しみじみ想った。なにしろ捕えた男ども一万七千をみな叩き殺し、助けを乞い泣き叫ぶ女子供はひとまとめにして、みな焼殺したぐらいはすぐ光圀にも判ったからである。

それから歳月がたって寛文元年。第三代水戸城主となった光圀は、

「二十八万石の領地の中から三万石を、弟頼元、頼降に分封し、己れは二十五万石」と、一応の

届出をなすため千代田城へおもむき、新しく大老となった酒井忠清にあった。そして、
「島原口の津の乱は、ずっと切支丹一揆にされたままで、一般もそのように、今では固く信ぜられてますが……」
つい何気なしではあったが、かねて胸中にくすぶっていた疑惑をつい口にした。すると、
「いかにもその通り、あれは切支丹どもの一揆でござった。故に、その後は宗門改めも厳しくなり、切支丹耶蘇教は国禁となったのでござる」忠清はしかつめらしく返事をした。
そこで光圀は苦笑を浮かべ、当時の松平伊豆から詳細を聞いている旨を告げた。すると、ばつ悪そうに忠清は冷や汗を拭い、
「水戸さまにはおひとが悪い、何も彼もご存じでござらっしゃったのか」にんまりほくそ笑んでみせたものである。そして、
「あれは智恵伊豆めの才覚にて一揆とも前の後水尾法皇の院宣によるとも公表はせず、宗教争いの九州の局地戦として処理をなしました。ために天下の大乱も事なく治まったのでござります。まあ御政道とは裏もあり表もあり、何も馬鹿正直に本当のことを発表せんでも、難なくすべてを済ませるを可としまする」とは口にした。が、
「昔の伊豆の打ち明け話の他にも水戸さまにはなんぞ手証……証拠があればこそ、この忠清に申されました……でござりましょうな」すくうような眼差しをみせた。

「こりゃ読みが深い、さすがは大老」光圀も悪戯がみつかった子供のように照れてみせつつ、「……三万五千からの女子供が助けを求め泣き叫んだのに焼き殺されてしまい、山田右衛門作なる男だけ画師ゆえ助命されたというのが、どうも引ッ掛りましてな」と口にした。忠清が、「さては……右衛門作が口の津城内で見て参ったと書き残せし、クルスの旗を……」ときけば、「家臣の内に物好きな者がいましてな、それを模写して参った者がしました。ところが先年、明国より参りし朱舜水なる者に見せましたところ……耶蘇と申してもカトーリコと申す旧派と、プロテスタントとかいう新派の二つに分かれ、彼らは向こうでも共に天を戴かざる仇敵どうしとかで、互いに国をあげて殺掠しあっている由。よって、いくら東洋の九州片隅であれ双方の旗をたてて、両者が力を合わせて抗戦することはあるまじといわれてござる。もちろん二度と口外せざるよう厳しく戒めましてござるが……」と声を落して、あたりをはばかるように説明をした。「切利支丹一揆であった証拠品にと、あの右衛門作めが伊豆の陣中で命惜しさに何通りも画きました旗の中に、旧派と新派とのが混り合っていたのでござるか。無知な者に証拠作りをさせたは、伊豆も不覚がござったな……」と、今度は酒井忠清の方が頭をかいた。

しかし朱舜水も水戸光圀も、徳川家のために何もいわず書き残さずだった。それゆえ今も島原の乱は古跡を誤られているだけでなく、本当は勤皇運動だったのにまったく間違われている。

しかし、この一事はまだ若いというより幼ない光圀のその後の人間形成を変えてしまった。

「世の中は何も信じられはせん……」と自暴自棄というか、すべて投げやりになった。

「……水戸家の跡目は博奕好き」と蔭口を叩かれたり、琴や三味線にこって器用に爪弾きするのを覚えたのも、この頃のことであるとされている。寛文元年八月に、頼房が亡って跡目相続するまでの光圀は、何かするとすぐ抜刀して振舞わす癖もあって、家臣たちの鼻つまみであったという。血気盛んで、辻斬りにしばしば出かけていた話は後で述べる。

下馬将軍酒井忠清

「水戸さま……今のままでは困りまするな。死んでも死にきれませぬな」と酒井忠清はいった。

諸大名は御三家といえど、千代田城へ登営する際には、大手門正面の馬出し曲輪入口の、「下馬札」の立っているところで馬をおりたものだが、この酒井忠清だけは大手口まで、堂々と馬にまたがったままで乗り入れていた。そこで世間では、将軍さまなみというのであろうか、「下馬将軍」とよばれるくらいに、権勢があったものである。

だから、その酒井忠清がこぼすのに、

「……如何にも、もっともなことであるな」と光圀も歎息するように合槌をうった。というのは三代家光のあと、四代将軍に子の家綱がなったものの、あまりにも凡愚にすぎ、どうにもこうに

もならぬから、酒井も思いあまって訴えてきたのであろうと悟ったからである。

諸大名ならば、将軍家がどうあろうともただ己の身の保全だけを考えて、

（さようしからば、ごもっともに存じまする）とか（有難き仕合せにござります）と、紋切り型の挨拶をして身を縮めてさえいたら、それで万事めでたしである。

しかし酒井忠清の立場は違う。若き日の家康を助けて苦労を共にし、徳川の家を樹立した遠州浜松の七変化部落の出身の、坂井浄賢こと、のち改めて酒井忠次の孫にあたるせいである。

家康がようやくにして遠州の引間（曳馬）城を奪取して、のちの浜松城におさまった後、

「これまで三河以東の者を率いて奮戦してくれた礼だ」と、第一番に城もちにして忠次の労をねぎらい三州吉田（豊橋）城主にされやがて姫路十五万石をつぐが、のち忠清が斥けられて跡目は他から入り、その子忠寛は元和元年になってようやく許され伊勢崎二万石をもって酒井家をたてるようになる。だが、姫路本家では系図を作り変えて忠寛の方を支家としてしまう。そこで、姫路の方は明治になっても伯爵となっているが、真実の本家の忠清の血統の末はそうはなってない。滅ぼされた者は姓だけは残るが血脈は絶やされてしまう。がこれは後の話である。

さて徳川を今日あらしめた酒井の孫と、家康の直孫の光圀が、額を集めて家綱の凡庸ぶりを歎いたのには、あまり他へ口外できぬような話の裏もあったのである。

「神君家康公の御遺命で、家光公が二十歳になられるとすぐ、二代将軍秀忠公は京へ伴われ将軍

職を譲られたが……どうも、まだ御元気だったのに、あの経緯が今になるも呑みこめませぬな」

「うん、もっともな話である……同じような感慨を実は、わしもかねて抱いているのじゃ」

同憂の士をえたように光圀もうなづき、瞼をしばたたいた。というのは十五年前に亡った三代家光の出生について、二人とも疑惑をかねて抱いていたからである。

春日局とよばれるようになった於福が、天正十年六月二日の本能寺の信長殺しの下手人斎藤内蔵介の娘なのは、隠しもできぬ周知の事実。だからまさか、その女人の腹からであるとは表向きにできず、「乳母」ということに公儀ではつくろっていた。しかし家康は、はっきりと、

「すでに他へ縁づき四人までの子をなしていたのを、わしが無理じいして京の伏見城へ召して子種をうえつけたのである。というのは於福の祖父京の蜷川道斉には関が原陣から大阪城攻めに到るまで、ひとかたならぬ力添えをうけ、その礼に、京を避け江戸に徳川の本貫（根拠地）を設けようとも、蜷川の血を立てんと誓ったためである。よって於福のうんだ子が二十歳になったならば京へ伴ってゆき、それに秀忠から征夷大将軍の位を譲らせるように取りきめてあるのだ……これは守らねばならぬ天下の大事ゆえ、諒承するように致せ」と、光圀の父の頼房が駿府へ行ったとき、じかにいわれてきたことがあるとは聞いていた。

「……てまえも、それは洩れうけたまわり居り申す。権現さまは関が原御陣の翌慶長六年五月に、京より銀座の工人をよびよせ伏見にて、金にて大判小判を鋳造なされたが、京の蜷川より苦

情をうけ、やむなく通用は関東のみと限定したもうた由と……」

「びた銭だけは東西を通じ共通だが箱根の山をもって天下の権限となしたまい、三枚橋以東では何両何朱何分の金が通貨じゃが、三島から先は九州の涯まで銀で、何十何匁と定ってしもうたのは、やはりそのせいでありしか」と、光圀も驚いたように口にすれば、

「箱根において東下りしてくる者の手持銀は金に、上方へ行く者の所持金は銀に、おかみの権限で強制換算させ、その益きわめて莫大なるをもって……春日局めは、天下の権を私せんと志して、箱根を領内にもつ小田原十万石の大久保家を失脚させ、己が他でうんできた子の一人である稲葉正則をもって、まんまと代りに領主にしたのでござる」

「稲葉正則といえば、春日のおつぼねが先夫の許でうんだ最後の末っ子じゃが、先君家光公よりは四歳上だったという。となると話がおかしくなるな……女人も子をうんでから四年もたっていては、まさか筧の水のごとく乳が、その後も出っ放しという訳もあるまいゆえ、乳母とはやはり世間をあざむく言いふらしだったらしいのう——でないと話がてんで辻つまが合わぬ」

「権現さまは一般には海外渡航を厳しく戒められましたのに……蜷川道斉のまた甥の子にあたる角倉了意一人のみには、海外通商勝手たるべしの御朱印をお与えなされていたのでござる」

「甥の子といえば春日のおつぼねは道斉の妹孫にあたるが、角倉了意こと宗鱗の妻も同じよな」

長年にわたって胸にわだかまっていても、誰に話せる性質のものではなく、ただ心の底にくす

ぶらせていた謎だったゆえ、酒井忠清の話に、すっかり光圀はのぼせ気味になった。

そこで思いきって、これまでの不審をみなぶちまけ、自分の知らなかったことは忠清にきいてみたりした。

が、どうしても切り出せなかったことは、いくら権現さまが自分が手をつけ、伏見ではらませたのだといいはっても、逆算してゆくと六十二歳のときの子に家光はなる謎であった。

（もともと春日局というのは個人名でなく、足利時代から将軍の代理やお供をしていて小御所へ参内し拝謁を賜る女人の官名であるし、権現さまが征夷大将軍となったのも、その慶長八年二月のことゆえ、京生まれで御所には詳しい於福を春日局として共に参内させ、節刀や勅を賜わったのであろうが、はたして六十二歳の男にいくら何はしても子をはらませる能力が、まだ有ったであろうか……まこと子種が残っていたろうか）

何度も口に出しかけたが、さすがにその時はどうしても忠清へは言えずだった。

父頼房でも生きていれば、それとなく聞けもしたが、亡った後ではそれもかなわず、小石川屋敷へ戻ってきてからも、すっかり考えこんでしまっていた。

なにしろ当時四十一歳だった光圀にしてみれば、すでに六十歳をとうにすぎた男の能力など、まるで想像がつかず判じものみたいで訳もわからなかった。つまり自分にしたところがその頃には、はたしてその気があっても出来るものやら、また致しえても子種があるものかと疑えた。

というのは父頼房は権現さまの九番目の男子だが、その下にもいて尾張をつがせられたのが十一男義直である。女子を入れたら倍になる。だから六十二歳の頃には、もう逆さにふっても子種など権現さまには残っていよう筈もない、と光圀には想えたのである。

それと、もう一つ、これはいくら徳川創業の功臣酒井忠次の孫でも判らぬ話だが、

（身びいきで判断するのではないが、父頼房に比べて余りに先代家光公はお粗末にすぎた）

という事である。もしも権現さまが掉尾を飾って作られた御子であるならば、もうすこし尋常であるか、それ以上でなくては可笑しいと、そんな気もしたのである。

が、とはいうものの、もしも自分の推測が当っていたら徳川宗家の血統が、飛んでもない事になるのはわきまえていた。

二代秀忠というのは、あけくれ権現さまにがみがみ言われっ放しで小心になり、その死後も遺言通りに万事をなしとげ、元和九年六月には上洛し家光へ将軍職を譲られているが、

（もし仮りに三代将軍が権現さまのお種でないとなると……せっかく辛苦の末にとった天下を、みすみす誰の血統か判らぬ者へ渡してしまったことになる——しかも春日局はそれから九年たって秀忠が亡くなると待っていましたとばかり、すぐその後で秀忠の実子駿河大納言忠長を殺し、徳川宗家の血統を根絶やしにしている）とあまりにもはっとさせられるものがあった。そして、

「千代田城に権現さま正嫡の血統が絶え、家光のあとをその子家綱づれがついでいるのは怪しか

らん……権現さま九男頼房の子である直系の孫の、この光圀が取って代わって徳川の血脈を正しくせんことには、なんともならんではないか……」と、ひとり思うこともあった。

その年の木枯のふく頃。御気嫌伺いにきた寺井玄洞へ酒をだしてやったところ、

「……千代田城で二代将軍秀忠さま御長男竹千代さまがお生まれ遊ばしましたとき、三つ子の魂百までというから、英智にすぐれし乳母をつけるべしとの神君家康公の思召しで、天下に公募なさったところ、京の所司代板倉伊賀守の許へ、立て札をみましたと名のり出た女がいた。伊賀守があってみると人品もいやしくなく、まだ子供をうんだばかりで乳も豊富。そこでこれなら良ろしかろうと旅費をもたせて江戸表へ東下りさせた。秀忠公もこの女人を一目みるなり気に入って、春日局の名を与え竹千代君の乳母にした。ところが、その後、下に国松が生まれたので将軍夫妻はそちらばかりを溺愛した。だから竹千代思いの春日局は、これではならじと駿府へかけつけた。権現さまは直ちに杖をついて千代田城へきて、長幼順を誤ってはならぬと、竹千代にのみ先に饅頭を与え、甘えて手を出し近かよった国松君を叱りつけられた。そこで三代将軍の跡目は、ここではっきり決着をつけた。翌年この時の疲れから権現さまは亡くなったが、竹千代君はやがて二十歳になるとめでたく将軍職をつがれた。そこで春日局のために二千石の化粧料と大きな屋敷をたてられた。京から蜷川新左衛門という実家の人がきて、壮大な屋敷を造作したし、春日局が病気になったときは、家光や家綱公は何度もそこを見舞っておるし、京の明正帝からもつ

きっきりのお見舞いの勅使が枕許に……きておられました」

と、よい気になって長話をする相手へ、光圀はしかめつらをしてみせ、

「もうよい……その話のしめくくりは、乳母とは申せよくせき献身的な奉公をなさば、陰徳あらば陽報ありで、必らず致れりつくせりの果報がもたらされるというのであろうが……」

あくびをかみしめつつ不快そうにいってのけた。そして、ものはついでとばかり、

「それと近頃はやっている話は……本能寺の変を起したのは、実は明智光秀であった。斎藤内蔵介というその頃では天下一番の人物を、美濃の稲葉一鉄から奪ったというので信長に訴えられ、返すように命令されたが、あのような当代まれにみる人材を手放したくないといい返し、額を叩かれ割られたのに憤慨し、ついに謀叛をなした……内蔵介は自分ゆえ起きた事だし、士は己れを知る者のために死すというゆえと、まっ先かけて勇ましく本能寺を襲ったとする忠義話じゃろ」

「……御意」それへかしこまる儒学者寺井玄桐に対し、光圀は皮肉な微笑を浮かべ、

「世の中も変るものよな、わが幼少のみぎりは、権現さまは光秀びいきゆえ御側近の天海僧正は、死んだことになっているが光秀であるとか……福知山十万石の水野の祖の勝成のごときも、権現さまより明智光秀にあやかれと、しょっちゅう訓戒されたと聞き及んでいたが春日のおつぼねが天下を掌握なされてよりはその御実父の斎藤内蔵介が、謀叛発頭人では都合が悪いとみえ、飛んだ馬鹿話が忠義せんとする輩どもに作られ、今では広まっているものよのおう……」

と、ぬるま湯で口をしめしつつ、にんまり皮肉そうに笑ってみせ、

「まあ知らずば覚えておけ……そうした作り話は、ひいきの引き倒しというものである。斎藤内蔵介というのは京で名高い蜷川道斉の妹の子であって、明智光秀が信長に仕えるよりずっと早くから美濃衆の寄親をしていた身分ある者……其方も知っている四国全土を平定した長曾我部元親の妻は内蔵介の妹で、兄弟にもなっていたくらいじゃ、それを内蔵介は光秀の家老として仕えていたなどと出鱈目を話すのは……汝の学の浅さを示すようなもの、まあ論語よみの論語知らずの例通りともならん……」厳しい口調で叱りつけ追い帰してしまった。

――この寺井玄東は光圀に遠ざけられたが、のち高松派に取り入って、その名も井上玄洞と改名し出仕し、「玄洞筆記」なるものを書き残したことになっているが、高松派に都合のよい内容で、光圀が公儀に憚られたのは、御家の恥として書かず、藤井紋太夫手討ちも、わざと隠居後のことのような誤りをあえてしている

が、そのときの光圀は、阿呆らしいとか、馬鹿々々しいといったような、そんな心地ではなかった。もっと堪えきれぬ不快な澱りが、ぶつぶつ泡をたてて噴き出しそうな想いだった。

光圀にしてみれば信長殺しなどはどうでも良かった。が、祖父家康が生涯をかけ掌握した日本全土の内で、箱根より東の関東だけを金本位といった屈辱的な取り決めさえ京の蜷川としてまで

樹立した江戸政権が、今となってははっきり判っているのは、血脈はその子秀忠までで後は、（何処の馬の骨やら判らぬ家光につがされ、今ではその子の家綱……）というのが、どうしても我慢なりかねた。なんとかせねばと、連日いらいらしきって水戸小石川屋敷で息まいていた。

それゆえ酒井忠清が久しぶりに、下腹のせりだした姿をみせ訪れたときいた時は、すっかり歓んでしまい、

「早うにここへ……いや泉水のほとりの亭がよい」と、そわそわして立ち上った。

なまじ座敷の中で話すより、見通しのきく池の畔の方が、ひとに聞かれる心配もいるまいと考えたからである。なにしろは召し抱えている寺井玄洞の口から聞かされた話、つまり、（……春日局さまというのは京で公募の立て札をみて、所司代板倉伊賀守勝重の許へ応募をして選ばれたすぐれた女人である）といったのを、念のために近習共にただしてみたところ、

「はあ、てまえも親どもより、そのように洩れ承まわっております」

と、みな異口同音に答えられて唖然とし、それから光圀は己のが近習といえど信用する気になれず、家来すらも用心するような、人間嫌いになっていたためである。

というのは、彼らが親の代から儒者の寺井のいうよう信じていると答えたものの先代家光が伏見城で生まれたにしろ千代田城で出来たにしろ、その生誕の慶長八年は、まだ京には所司代などは置かれていなかったせいでもある。当時大阪城には秀頼が内大臣としておさまっていた。

たしかに、その二年前の慶長六年七月より板倉勝重は京にいたが、慶長十年に祖父家康が秀忠に将軍職と内大臣を兼任させ、秀頼を改めて右大臣にしたとき、

「これですっかりあらゆる職を退きこの身は隠居しもうすによって、わしの子飼いの四郎右衛門めを、ただの京の町奉行でなく、もそっと恰好ように一人で所司代にしてやりたく」

と仰せあって、初めて、所司代の名称はできたのである。念のために、「寛政譜」を編している林家へ使者をたて調べさせてみたが、やはり間違いなく当時はまだ所司代はなく、「関東代官をへて小田原の土地奉行たりし板倉四郎右衛門勝重は、江戸町奉行をも兼務す。されど関が原御陣後の慶長六年九月よりは西へおもむき、米津清勝、加藤正次らの京の町奉行の補佐となり、三河領内にて六千六百十石余の知行をうく。四年のち、ようやく京の風土や言葉にも馴れしをもって、新しく設けられし京所司代役に任ぜられ、よって一万六千六百石におとりたてとあいなる」といった事実もはっきりしていた。

それゆえ、その調書を懐中に納めて席亭で待ちうけていた光圀は、こぶとりの酒井忠清が案内されてくると、懐しそうな眼ざしを向けつつ、無言でまず寛政譜の調書をみせた。

そして忠清が読み終るのを待ちかねたように、声をはずませて、

「世間ではらちもない事が、まことしやかに信ぜられ、ひろまってはいるけれど……板倉勝重が

京所司代となって一人立ちして差配するようになったのは、先代家光公が三歳になられてからの話。いくら、あの御方さまが人並よりは遅れていなさったとは申せ、普通の子供であるならば、とうに茶碗や箸をもつ年齢になって、よき乳のでる女を乳母にと遥々遠国の京で募集したりするのは、辻つまの合わぬこと……」と、にがりきって口にした。

　すると光圀がいわんとしていることは、酒井忠清もよく判るからして、大きくうなづき、

「もし京で立て札をたて乳母の募集をなしたものなら、米津清勝と加藤正次の両名が、西と東に分かれ交替に月番制をとって奉行を勤めていた頃のこと……なのにその名が出ずに三年後の板倉の頃とするは面妖な話でござりまするな」と、一礼なして調書を戻しながらいった。

「ところが一犬虚を吠えれば万犬これにならって吠えると申すが、当家への出入りの儒者までが、すこし調べれば判るような出鱈目を、ぬけぬけと、このわしに申しおるような情けない仕儀……いかにすれば己れの襟を正すごとく、天下の秩序を旧に戻せるものであろうか」

　手でも振って縋りつきたいような想いで、光圀は思いきって口にしたのである。すると、

「このたび、六十六歳の御老齢にて大儀であると、この五月に退隠なされし紀州の頼宣さまよりも、実は昨年三月にてまえが大老になった御挨拶に伺候のおり……継ぎ木はしよせん接ぎ木にすぎん。しっかりせんと葉が枯れてしまうぞと謎めいたお言葉を賜わったことがあるのでござる」

　意外なことを口走った、というより洩した。そこで光圀が唖然としていると、なおも大老酒井

忠清は、

「とかく血筋と申すは何処のお家であれ、二代目、三代目までは判然と致しおり申すが、これが四代目あたりになりますと、怪しくなってくるのが当り前とか……というて、われらの仕え奉る大樹がそうでは葉どころか、根株までがおかしゅうなりまするでのう……」と、二重顎をひいてみせた。そして、すこし間をとって、にっこり仕方なしの笑いに歯でもみせるかと思ったら、

「……水戸さまは天下だれ一人知らぬ者なき、歴っきとした権現さまの三代目――」

きっとした声をだし、それとなく左右に首をふって、他聞を用心するかのように口をとじた。

だから光圀は、酒井忠清の帰った後、ひとりになってすっかり考えこんでしまった。

（御引退なされたとはいえ、御三家の中では長老の紀州の頼宣さまさえ、お認めのことゆえ……代ってこの光圀が大樹として立たんとする気になれば、幕閣としては大老の酒井忠清が、宗家擁護のために力をかすと……わざわざ言いにきたものらしい）と思いあぐねた。

もちろん事が事である。そう容易には腰が上げられる仕儀ではない。また家臣どもを集め、

「其方らは粗忽にも世上の訛伝をふきこまれ、それを信じて怪しまずに居るやに思うが……御当代家綱公の父君の先代家光公は、政治的に発表されているような秀忠公の御子ではない。権現さまは御自身の最後の子種と思召され、よって二十歳になったら譲位せよとの御遺言をなされた。が、六十二歳だった権現さまに子種がはたして残っていただろうか、誰の子か知っているのは母

親のみならん。また、家光公は秀忠公夫人江与の方の墓所のおわす崇源廟へは、生涯お詣りもされていない。よって御生母は表向きは乳母となっていても春日局である。が……御家の血によって生み奉ったかどうかは疑わしい……されどこの光圀は紛れもなき権現さまの孫である。よって天下の不正を糺さんと想うゆえ、みえ忠義をつくせ」

と号令したところで、泰平に馴れた者どもが、はたしてみな捨身立命と意を決し、自分をおしたて一戦をも辞さぬ覚悟を、示してくれるかどうかは疑わしいと光圀は迷いに迷った。何度も決心したが実行に踏み切れずだった。

――伝説とはまるっきり違う水戸光圀の悲劇は、つまり四十一歳から亡くなるまでの不遇の一生は、そそのかしたような酒井忠清の一言によるといっても、さまで過言ではないようである。

なにしろ、家綱が早や目に死にでもすればよかったのだろう。だが、光圀が跡目をついだ寛文元年から算えて五年目に父酒井忠勝の跡をついだ忠清が大老になった後も、のんべんだらりと十五年もそれから家綱はずっと生きていた。

だから初めは気負いだっていた光圀も、ときに五十六歳になってしまっていた。それゆえ、

「さあ、いよいよ水戸さまの出馬なさる番でござりまするぞ」とは、酒井忠清とていいだしかねてか、もはやふれようとはしなかった。

そこで光圀はやむなく京より宮さまを迎えようとした。これが協力した酒井を失敗させ二万石

に落ちぶれさせる結果になるのだし、光圀の場合は、せっかくの家康三代目の直系の血がこれで途絶えさせられ、世つぎには四国高松から入ってきて養子が続き、実子はやがてみな消される。

もちろん講談の類では、光圀は側室の子とはいえ異母兄があったのに、それを高松へだし自分が水戸をついだのを、「伯夷伝」をよんで恥らい、その子綱条を迎えて水戸二十五万石を譲るというのだけれど、光圀も側室の子である。これは水戸家が光圀の血を遠ざけ綱条の四国閥でかためてから、適当に作りあげた拵えものの美談であろう。

水戸頼房にしても綱条が、はっきり吾児と確信があったら、本家をつがせたかも知れない。また側室の子は他をつがせ嫡子に家督を譲ったのが、江戸時代の大名の慣習だったのだから、「伯夷伝をよみ感服しましたゆえ、ぜひとも跡目は変更したく存じまする」と、各大名がもしもその真似を他もしたら幕閣としては、統治上とても収拾がつかなくなる。

公儀の方針なら別だが勝手にそんなことが許される筈はない。その証拠には、幕末に到るまで、どの大名でもそうした願い出をしたり、実際に相続を変更した家などないのである。俗に、「雉(きじ)もなかずば……」というけれど、光圀は自分こそ家康の正しい血をひく孫だと自己主張し、自尊心をもって振る舞ったばかりに、その血筋をもっては水戸代々をつがせられなくなった。

「水戸藩史」には伏せられているが、実際には光圀の実子三名は押しこめ隠居後から次々と高松へやられ長子兵部を始め何故か早死にしてみな絶えその血筋は消滅し伝わっていない。が血筋を

尊んだ江戸時代のことゆえ、さも光圀の血が代々伝わったように一般には信じこまされていたし辻講釈師の志道軒も、

「水戸の殿さまは、光圀さまの血をひいていたゆえ代々の名君揃いで、一人の馬鹿もいなかった」と、幕末には江戸浅草で振り扇を叩いて集めていた客に語っていたという。

だがそうはいうものの、「光圀が天下を望んだのは親譲りなし」の説も古くからある。石川箕水の著にある話で、「ある日、権現さまが度胸だめしのおつもりか、子らをば集めて二階から下へ飛び降りる者はないか……と声をかけられたところ、九番目の阿鶴が、すぐさま飛び降りようとした。そこで権現さまが、まだ幼いゆえ飛べば地べたに叩きつけられ死んでしまうだろうが、何の褒美欲しさにかときいたところ。天下にございます、たとえ一瞬でも天下とりをなした者ならば、この身は落ちて粉微塵になりましても、その名は末代に残りましょうと答えた」

という。そこで権現さまは、阿鶴を元服させ徳川頼房と名のらせてから、

「あれは天下に望みをもつ者ゆえ、変事があった際は自分が代って、将軍たらんとして千代田城へ駈けつけるであろう。よって領地の多寡よりも地の利こそ肝要ならん」と、権現さま実子としては最低の下妻十万石を江戸より至近距離の地ゆえと与えた。そして後に、やはり半日行程の水戸十五万石にかえ、のち二十八万石にしたのであるといわれる。

光圀は跡目をつぐとこの内の三万石を弟たちに分かち与えたが、といってなにも、仁徳とか仁

慈ともっともらしい形容詞をつけられるような美談的な虚像の人物ではない。

異母弟らへの配分は家督相続ゆえ当然のことなのである。

まだ戦国の余波が残っていて殺伐な時代とはいえ、正保から慶安にかけ、江戸府内で辻斬り、試し斬りが多かったが、この下手人の一人は光圀だったと史料に残っている。

つまり講談やテレビでは、徳川家光がお忍びで辻斬りにでてゆくのを、光圀が捕えて諫めるような、もっともらしい設定をしている。が、家光というのは、生れつき虚弱で無気力で、とても辻斬りに出かけるような外向型ではない。どうも事実はあべこべで、小石川より出かけて浅草から神田で、ばったばったと通行人を斬っていたのは、諫め役とされる光圀の方だったのである。

将軍が千代田の本丸から次々と厳重にかためられた大門を、五つも潜り出てやっと外へ出られるのとは違い、小石川屋敷より光圀がさあっと外へでてしまう方が容易だったろう。

光圀の御守役だった中山備前守忠吉から、側近として付けられていた小野角右衛門言員（ことかず）の書き残した、「残記」というのには、この間のことを詳しく書き記しているゆえ援用すれば、

「初め長丸とよばれ三木仁兵衛宅で育てられ城下の子らと遊んでいられたせいか千代松君の頃まで粗暴にわたらされ、すぐどなたさまであれ、大人の席へ出しゃばられる生意気をいわれる悪癖あり、ときには厩小屋へも入ってゆかれ厩仲間どもと伝法な口調にてやりとりされたり、彼ら

にまじって賭奕すらなされる。よって備前さまがてまえに仰せあるは、主君の御子と思うなかれ己が倅とみて時には叩擲するも可なりと大命を拝す。とき公十三歳寛永十八年辛己の年なり。されどいかんせん公は学習を厭い相撲や棒ふりばかりなし、賭奕も隙をみては屓中間たちの中へまじりてなさる。二年たち天海僧正なくなられし節、ご登城なされしが各大名衆えしゃくなされ頭を下げられるのに、御父君の後に隠れまったく無視なさるのは、非礼千万なりとの蔭口を供侍部屋にても耳にす。正保となりてからは、伊達模様の木綿の派手な衣裳に、びろうど黒襟をかけたる着流しにて、三味線の爪びきばかりなされ、夜ともなれば頬かむりをなされ血気の者らを従え外出なさる。浅草寺境内にて乞食を新刀の試し斬りになさるなど、仏前にてあれば許しがたきことなり。よって佩刀はいうに及ばず脇差まで取り上げられる。慶安元年の日光参拝御伴のときまでは丸腰のままにて過さるる」とでている程である。

もちろんこれには浅草寺での辻斬りの話だけで、寺社奉行から注意され父頼房に刃物一切を取り上げられた結果しか書いていないが、それまでに辻々へでて通行人を殺したのは、伝えられているような二、三人ではない。恐らく十数人は手がけているものと思われる。

まあ、それくらいな烈しい気性ゆえ、晩年の光圀は悲痛な運命に見舞われるのであろう。

だから幕末になって水戸烈公斉昭によって、為にせんとする政治的意企によって作られた所謂黄門伝説なるものぐらい、まったく好い加減なものはないといえる。

光門伝説の発生

イギリスの諺に、「ロビンフットが流行するときは大不況」というのがある。日本でも、「水戸黄門が映画や小説で持てはやされるのは、不景気の前ぶれか、戦争が起きかける時代」と決められている。またそういわれてみれば満州事変のときは山本嘉一、大東亜戦の始まる前は大河内伝次郎、ついで月形竜之介といった黄門役者すらはっきり決まっていたようである。

——御三家の一つである前の中納言が、世の正不正をただそうと志し、勇武にすぐれた助三郎、格之進の二名の若侍をボディガードにして町家や百姓の御隠居姿で諸国を巡察する。

そして民百姓を酷く扱い、むしり取るごとくカレン誅求している代官などを見つけると、「おぬしは、民や百姓らはお国の宝ということをば……知り居らぬのか」と、こらしめる。もちろん行く先々で百姓の味方ばかりしている訳ではなく、土地によっては悪家老が御家の乗っ取りを企て、忠臣の娘や幼児が迫害されているのをすすんで救ったりする。

時によっては、あまりのことに力づくで抵抗しようとする場合も極力これを押えて、「助さん、格さん……よしなされ。お手向かいはいかん。おかみの裁きをうけようではないか」いくら理不尽な取扱いをされても、役人にさからうのを避け遵法闘争にならぬ精神を発揮する。

そして牢屋へ入れられても、すこぶる神妙な光圀一行は模範囚となって、おかみに対し、
「はい、はい」と絶対に服従をする。しかし法の裁きの場では、あまりひどくなると、
「……此方におわすを何様と心得おるぞ」と格之進が口火をきり、続いて助三郎が、
「さきの水戸中納言にて、将軍公の思召しにより、諸国検分のためのお忍びであらせられる黄門さまなるぞ」と、切り札をつきだす。そうすると、格之進が、
「一同の者、頭が高い……神妙に致せ」と、大声でよばる。そこで代官や奉行が、
「……うへえッ、知らぬこととは申しながら、とんでもない御無礼ひらに御容赦を……」
高い所から白州へ飛び降りてきて平伏し、許しを乞いつつ、その不心得を反省する。
いうなれば遠山の金さんの最後の見世場と、まったく同じパターンといえよう。
なにしろ、おかみに繋っていない者が民衆の側に立てば、鼠小僧といった類になるしかない。
だから、その身は体制側にあっても、庶民の為を考えて味方になってくれる人物……というのであろうか、テレビでも人気があるのは、遠山の金さんとか大岡越前守、それに、水戸黄門ということになるのであろう。つまり、いくら辛くても堪えてまじめに働いて居さえすれば、きっとどこからか救いの神が、いつかは現われてくるゆえ辛抱せいという教訓的物語なのである。
だから水戸黄門といえば、白髯をしごきつつ、米俵にうっかり腰をかけ百姓婆に叱られても、すぐ素直に詫びるような、いつもにこにこしている好々爺像が一般化し今では常識化さえしてい

るのである。が、そうした虚像ができ上ったのは水戸斉昭が、天下を狙った己れの野心のために作ったでっち上げといわれたので、

「けしからん……慶喜の親爺のひろめたものを取締れ」と、明治になると薩長政府に睨まれた。

だから薩人川路利良が検察畑の総大将となったときから、それまでは、品よく扱われて、

「義公事蹟」「水戸義公伝」といったように、まあ硬かったものが戯作化されてしまい、

「こう門まん遊記」の名で絵入草紙として刊行された。つまり西遊記の孫呉空が、仏さまの掌で飛んだりはねたりを模倣し、こう門と女体の秘所の間を行ったりきたりして、因じゅんこそくな徳川体制を守ったもの……という今でいえばポルノ本たぐいのものとして生まれ変ったゆえ取締りの対象にもならなかった。今日でいえば可笑しいけれど、水戸人の大半は武田耕雲斎や山国兵部に率られて斉昭の死後、挙兵し幕兵と戦ったあとも斉昭の子の徳川慶喜を頼って加賀へ出た。

ところが冷酷な慶喜は、旧臣なのに只の一人も彼らを救おうとせずみな斬罪にしてしまった。

このため明治になっても、水戸人の主だった者は殺されてしまっているので、慶喜の立場にたつ者もなかった。三十年も静岡へやられっ放しで、あわれ慶喜は東京へ戻れずだった。

そんな有様ゆえ、「こう門まん遊記」なるくだらぬ絵草紙が、スケ平さんや、せんずりのカクさんお供の、ヒワイなものとして刊行されても、それに抗議する人士すらなかったのである。

では、それを今日の「水戸黄門漫遊記」にまで昇格させたのは誰かといえば玉田玉秀斉であ

る。といって彼が水戸の出身者で、光圀公の遺徳を慕ってというのではない。

光圀の遊行記みたいなものは文化年間に、「読み本」として一度はでているし、明治に入っても四年六月には、東京日本橋松島町の大西庄之助版で、定価一銭五厘の和とじ本が、「光圀公巡検実伝」上下二巻で、各十八枚の絵入り本として刊行されている。

だから玉秀斉の創作ではなく、それを種本として面白可笑しく作ったのが、大正デモクラシーの時流にのってもてはやされ、かつての日活映画の二枚目で当時は重役の山本嘉一が、「これなら、ふけの儲け役ゆえよかろう」というので、当時売り出し中の二枚目の河部五郎を助さんに仕立てて映画化したところ、おおいに当たって、それが今日に及んでいるのである。

なんでも日本では、劇化し初め芝居にする慣しなのに、水戸黄門の芝居だけはないのもこの所為らしい。また「黄門さま」といえば、水戸光圀のことのように誤られているが、漢和大字典でみる限りでは、まったく該当しない。参考に引用してみれば、

一、宮城の御門にて黄塗りしたもののこと。不浄門。

二、侍従の臣共が出仕する役所のことをいう。

三、妻をめとっても終生その子を作らぬ（ホモ）の男子の通称。

四、男子にあって男子にあらず黄色のものを出す身体の門にて奉公する者や宦官（かんがん）のこと。

五、中納言の唐風の異称なりという。

この内の五番目は水戸出身の東京帝国大学の文学博士内藤耻叟が初めていいだしたもので、それまでは康熙字典にも出ていない。郷土愛から内藤博士が新造語新解釈をしたものらしい。しかし軽輩上りの博士は知らなかったらしいが、大名には格式があって、拝授官位もきまっていた。御三家とはいうものの六十万石の尾張や紀伊とは違って、二十五万石の水戸では誰も中納言までにはなっていない。まことに変な話だが本当のことだから仕方がない。

しかし、立川文庫によって、「猿飛佐助」や「霧隠才蔵」と共に有名になったとはいえ、「黄門」は架空の存在でも、水戸光圀は実際にいた人物ゆえ、まことにこうなると始末が悪い。それゆえ歴史上の有名な人は片っ端から、みな一冊にしている吉川弘文館の人物叢書にも入っていないせいらしい。が、しかしである。

今になると、本当らしく、「家臣の佐々宗淳なる者がいた。この者が通称を介三郎といい、これが湊川へおもむき碑をたてたのである」といったことをかく歴史書すらもある。

つまり助さん格さんの内で一人は間違いなく実際の者だったとそれで格好をつけている。

しかし国際情報社の「画報日本歴史」でさえはっきり疑問視しているくらいゆえ疑わしい。

巷の講釈師の志道軒らが水戸斉昭の家臣から、銭をわたされたりして、

「正義を守り不義をうつ……わが水戸精神を、おおいに口舌をもってひろめるように致せ」

と、いろんな筋立てに作って貰ったのを、それぞれ面白くひきのばし釈場にかけ張り扇を叩

き、貰った手当のてまえだけはと熱演して、

「さて天神村の光右衛門と、ご自身を匿された黄門さまは、一刀流の達人の助さん、格さんの両名をばお伴につれなされ、ぶらりぶらりと道を急がれて、参りましたるは東海道は尾張の宮の渡し……ここで如何なる事件にまきこまれますかは、さて明晩のお楽しみ……」

とやっていたのが、伝説化し世に広まった起りであるのは間違いないところであろう。

さて、水戸斉昭がどうして講釈師まで動員して、光圀伝説を世にひろめたかは、それなりの訳があるのである。

水戸斉昭は御三家とはいえ、将軍家や台閣に睨まれて、紀州とは違って自分の代まで一人も、千代田城の主に入れなかったのを不満とし、京屋敷の鵜飼父子を使って密勅まで仰いでいる。そして、水戸家が江戸の徳川宗家に取って換ってや可笑しくない血脈であると宣伝するため、「徳川家康の第十一子頼房の子光圀」を、おおいに売物にしたのであろうとは想像できる。

といって、辻講釈を今日でいうPRに利用したのは、なにも斉昭が初めてではない。尾張の町奉行田宮如雲が皮切りで、斉昭はその真似だったといわれる。

「田宮坊太郎の孝子の仇討譚」の一席は、「黄門漫遊記」といった講談と同様に、大正時代になって大阪の立川文庫で共に有名になったものゆえ、昔の意企宣伝の成り立ちをよく判って貰うために、筆が横すべりするみたいだが参考に、田宮の話をさきに紹介しておきたい。なにしろ水戸

家も、光圀の代でその血統は続かず、四国讃岐の高松から入ってきた綱条の子孫から斉昭の代までどうにか繋るのだから、別名を、「金比羅利生記」ともいわれ各地の金比羅さんの布教宣伝にも利用されるようになった坊太郎仇討ち譚は、同じ四国讃岐の血をひく斉昭や水戸の重臣の耳には早く入っていて、それゆえ、「……天に代りて不義をうつ」式の副将軍さまの人助け美談はそれを模倣して作られたらしいとは、立川文庫の執筆陣の子孫が書いたものにもみられるところである。

結果的には、徳川家をつぶしてしまうことになるが、斉昭の子の慶喜が衆望をになって、「第十五代さま」に迎えられ、水戸からとしては最初にしてまた最後の将軍になれたのも、田宮講談の真似によって生まれた水戸黄門伝説が、おおいに広められた結果とみられぬこともない。

それに田宮坊太郎こと弥太郎如雲と、水戸とは妙な因縁がまだあるのである。

今では近藤勇を立てるために、敵役にされている芹沢鴨は、水戸の芹沢村出身の郷士で本名を木村継次。その兄の木村三穂之介は水戸文武館の師範代を勤め、水戸斉昭側近の大場一心斉の用心棒をも勤め可愛がられていた。それゆえ松平主殿之介が浪士隊を編成して、江戸から送り出すとき、水戸の分家で前駿河奉行鵜殿民部少輔の口ききで、木村継次が平間重助以下七名を伴って参加をした。水戸家が京で活躍するための足場ごしらえの別動隊設立の為である。

それゆえ他の隊士たちは解散し引きあげても、木村継次こと芹沢鴨らは水戸屋敷より資金を貰って残留し、江戸へ戻っても何の当てもなくやはり居残っていた近藤勇らの面倒もみていた。

ところが水戸の手によって浪士隊を握られるのを恐れた黒谷の会津から、金を貰った土方歳三らは、クーデターを敢行した。さて尾張徳川家の田宮如雲も、水戸派の木村継次とは面識があり、おおいに、その人物をかっていたので、木村継次こと芹沢鴨らの暗殺に対し抗議を申しこんだ。しかし土方歳三は言を左右にしてあくまで、知らぬ存ぜぬで押し通した。

さて、それから年移り、慶喜の大政奉還となった。そこで徳川家では二条城の守備警護を水戸家に命じ、慶喜は都をはなれ大阪城へ移った。

新選組は京に残留したければ水戸家に随って、二条城警備付きでも拝命するしかなかった。当時、子供を双方にうませた芸妓上りの姉妹を、近藤勇は興正寺屋敷に囲っていた。だから子供の顔がみられなくなると、近藤勇は水戸京屋敷へ泣きついたが、お留居役が執政大場一心斉そのひとであったから、木村継次らの旧仇というので逢いもしなかった。

このため京に居られなくなった近藤勇はやむなく都落ちしたが、一騎がけで子供に逢いにきた帰えりに、伊東甲子太郎の残党に狙撃されて重傷をおう羽目になったのである。

そのため鳥羽伏見合戦のときには、寝たまま参加できず、代って土方歳三が指揮をとったのだが、割り当てられた陣地が皮肉なことに伏見町奉行所の一帯だった。

ところが、このとき奉行所を預かっていたのが、誰あろう尾張の田宮如雲だったのである。

「奉行所備付けの大砲をお貸し願いたい。ぜひとも御協力を賜らんことには戦はできもうさん」

土方歳三は懸命になってふるなの弁を用いた。

しかし田宮如雲は、木村継次こと芹沢鴨暗殺のことを根にもっていたので、いくら両手をついて願われても、頑として承知もせず、大砲どころか小銃さえも貸与せず、

「殿（慶勝）より、新選組に加勢せいとは聞いて居らんぎゃあ」と、あくまで突っぱねた。

ために新選組は刀槍だけで戦わざるを得ぬ羽目となり、銃弾の雨に見舞われて潰滅した。

「死せる芹沢鴨……新選組を敗走さす」とまで、このため当時はいわれたものである。

（……テレビの「新選組血風録」はきれいごとである。あんなものではなかった）

田宮坊太郎仇討

「水戸黄門」の話を広めるきっかけともなった田宮弥太郎が、四国讃岐大塚の家から田宮半兵衛の養子になったのは、文政元年（一八一八）、十二才の時である。

そして、天保三年（一八三二）、二十五の時に、義兄の半兵衛が死んで跡目相続をした。そこで食禄五百石に尾張の町奉行の御役扶持二百石をそのままひきついだ。

さて縁あって二十二の時に、めとった妻は、尾張藩国家老石川佐渡守の縁辺のもので、妙女といって五つ年下だったが、その頃には二十才になっていた。

「あなたさまお役向きは、如何でござります」心配そうに夫の身を気づかって、日ごと口ぐせのようにきくようになった。

というのは別に聞こうとしているわけではないが、出入りの者や奉公人の口から、

「まだ二十五で、御奉行職を引継ぐのは、あまりに若年すぎる」

「いくら石川さまの後押しがあったにしても、町奉行を若輩ものにさせては、城下の者たちが難渋するのではあるまいか」いろいろ取り沙汰がされているのが耳に入っていたからである。

どうも噂をまいているのは、その弟新十郎を田宮半兵衛の後釜に町奉行につけたがっていた寄合組頭で、年寄並みの格で千石取りの渡辺新左衛門らしかった。

それにそこの娘が片づいている大番頭で城代格千五百石の榊原勘解由。それと分家の大番頭格で馬廻り衆の御頭の千二百石の石川内蔵允の面々と次第に判ってくると、

（これは大変なことになりそうだ）とますます妙女は気になって、

「ご重役衆が揃って、あなたさまの町奉行引きつぎを、喜んでいられませぬそうな、大事ござりませぬか」

気づかわしそうに、できれば御役ご免を願い出たほうがよかろう、いっそ渡辺新十郎に譲った

ほうがこの際は無難ではなかろうかと、はっきりとは口に出しかねては、もじもじしながら小作りな貌を案じては、泣きそうにみせだすようになった。しかし、

「気にせんでよろしい其方が心配してくれるのは嬉しいが、大丈夫じゃ」

なるべく平然を装おって弥太郎は、妻に心配かけぬようにつとめた。しかしそれでも、

「なあ、おまえさま……」戻ってくるなり、しまいには日課のようにも、身を引くようにとすすめるようになった。そこで、

「くよくよするな。せっかくの御役扶持二百石。ここで失くしたら、いつまた取り戻せるか判らんではないか。養子の分際で、そんなほうげた真似はできるか。とろい事を申すな。わしはそれより田宮の家名を高めてやらにゃならんのだ」

とはいい返したものの、弥太郎も若いだけに、いろいろ蔭で沙汰されるのに、腹をすえかねてはいた。もちろん堪える事も、武士の道と幼時から教えこまれてきたので、辛抱はしてきたつもりだが、それでも限度が来ていた。

なにせ嫁いできて三年、いまだに夜の営みのあと始末を自分ではやれずに、夫にまかせっきりの、何につけてもまだ子供っぽい無頓着な妻が、これ程、思いつめて心配するからには、よくせき色んな噂がひろまっているらしいと肚をすえかねてきた。だから内心では、

（えい、どうしてくれしょうか……）若いだけに厭や気がさしてきて、とんと仕事にも身が入ら

なくなった。さて、そんな矢先のこと。

奉行所の非番の日に、久しぶりで釣りにでも出かけようかと、仕度をさせていると、「御免……」と、どかどかと弥太郎を心配して意見しに馴染の連中がおしかけてきた。

そして、座敷へ上りこむなり、

「おとなしく自分から御役を退いて、二百石の手当をご辞退申し、それを渡辺新十郎に廻して貰けよ。素直にすれば、五年もたって三十にでもなれば、埋め合せに他の御役を廻して貰える。そしたら若干の役扶持がまた頂けるというもの。その方が身のためだろう。そうでないと何か難癖つけられて、奉行職から落される。しくじって辞めたのでは、もはや二度とは役向きにはもうつけまいではないか」

その頃、名古屋でも流行しだした撃剣を本重町の加藤道場で、心形一刀流を共に打ち稽古していた徒士組の丹羽三郎太や中村源太郎たちだが、

「御弓奉行、御槍奉行なら、調席や道具の手入れさえよく念入りに組下の者にやらせて置けば、客をつけられたり、とかく足をひっぱられる心配もないが、町奉行では役向きが悪い。生きた人間を扱うのだから、いくら気をつけてやっても手抜かりは起きるだろう。すりゃ白洲へ囚人をひいて調べる身が、いつか針の莚に自分が坐らされることにもなろう。その裡に、収賄でも取ったと罷免されるのがまあ落ちというものだわさ。うかうかするとお殿さまが他国ものゆえ、情け容

赦なく、追放か死罪にまでされてしまうかも知れぬぞ」よってたかって意見をされた。

なにしろ尾張徳川家は、お世つぎに縁がうすい。神君家康公第九子義直さまの血脈は、四代吉通さまの御子の五代目の五郎太様が夭折されてから、吉通さまの弟君継友さまをもって後継にして六代目。

が、その方も若死されて、美濃高須三万石の支藩へ養子に行かれた宗春さまが戻られて七代目の家督を継がれたが、筆禍で押しこめ隠居にあってからは、その血統は絶たれてしまった。そこで一橋家から斉朝さま、十一代目さまには田安家から、斉温さまが入って居られる。

こういう有様なので、田安家の重臣から嫁をとっている渡辺新十郎らの勢力たるや尾張では侮り難いものである。

ひとつ間違えば、御殿さまのお声がかりで、御役取り上げも考えられるし、悪くいけば睨まれて、罪をこしらえられて死を賜ることも考えねばならぬ有様であった。

そこで意見をしにきた連中が戻ったあと、妻の妙女は、床に入ってからも、

「御食禄の五百石だけでも、切り盛りは出来ますゆえ」と、また繰返して続けた。

「そうはゆかん。養子に入ってきてる身だ。たとえ十石でも増やすのはよいが、減らしてみろ、御家中のもの笑いだ。おれは田宮の家名をあげ、お高も増やさねばならぬ身状なんだ」

暗闇の中で眼をむいて云い放ち、さてどうして切り抜けようかと思案していると、妻の指さき

がそっと、いつものごとく股ぐらをさぐるように延びてきた。

「よしてくれ。それどころではない」

ずっと堪えに堪えていた泣きだしそうな声を、弥太郎もついて洩してしまった。

なにしろ二十五才の若さで、奴凧のように胸をはって、誰にも弱味をみせずに、虚勢をはってはいたが、内心では実力を握っている渡辺一派にすっかり怯えきっていたせいである。

もし逃げ出せるものなら、妻を伴って脱藩したいような、そんな衝動にさえかられていた程である。だからして涙声にもなるのである。

天正、天文の頃なら、あけくれの合戦に槍ひと筋で手柄を立て、名ある武者をうち取ってでも、渡辺一派を追越せ立身もできようが、いまの泰平の世の中では、親代々の身分は厳然としていすぎる。いくら強がりをいって居ても、もし榊原勘解由あたりに呼び出されて、

(町奉行には若すぎると、城内で専らの噂じゃ。御役を休んで貰いたい)と言い渡されたら、

「……はあ」と両手をついて、おうけするしか致し方もないような立場なのである。

(鎧をつけ武者仕度をして、天晴れ功名をあげられたら)と思ったりすると、暗い夜の闇の中で口惜しさにふきだすように泪が溢れてくるのだった。

「堀川すじ円頓寺境内、大須万松寺境内のみにて、差しゆるされておった祭文語りに、田宮坊太

郎孝子の仇討なる物語を其方が筋がき作って教えこみ、御城下を所かまわず語りに歩かせし段、まことに尾籠のきわみ。このたびご当家十二代に、ご公儀より田安斉荘さま、お越しになるによって、前もって其方の御役儀は取り上げ、謹慎を仰せいださる」と、頭ごなしにいい渡された。

天保九年（一八三八）のことである。殿さま御他界で

（今度こそすこしは尾張の血脈をひく支藩の美濃高須三万石の松平秀之助さまがまだ十五だが、評判も御よろしいから、是非ともこの方を……御跡目に頂こう）

と骨折っていたところ、先殿さまの兄に当る方をまた田安家から養子縁組。しかも、御附人にくるのが渡辺新十郎の妻の兄に当る横井孫右衛門ときいて、その時から弥太郎は、もはや今度のことは覚悟をしていたから、

「はあ、かしこまって」と、しかた無くお請けして、そのまますたすた戻って来た。

噂を色々たてられて、旧友たちにまで心配をかけ、

（やめようか、やめまいか）自分でも迷いに迷いぬいていた歳月だった。だから否応なしにやめさせられても振返ってみると、随分とも長かったような気もするし、また飽気なかったような感じもする。が、肩の荷を卸せたような、せいせいした想いがしたことは事実だった。

「言渡し書」の中でふれられた「田宮坊太郎孝子の仇討ちの一席」というのは、

（讃岐の金比羅大明神の御加護をうけて、坊太郎とよぶ小坊主が、親の仇をめでたく討って、尾張中納言のお情けに召されて、ご家来に取り立てられる）

という他愛もない筋立だが、その卵に目はなの小坊主が、つるりとすべる青頭へ、きりっと鉢巻しめつけて、親の敵よ、逃がすまじ。待って、待って、あどけない声はりあげて決死のおもてで、追いかけるに追いかけて本懐をはたす。

ここのくだりで、みんな聞く者は哀れを催し泪をこぼしてくれたそうだという。

もともと弥太郎は田宮の家に養子に来ただけの話だが、その作中の坊太郎を田宮の姓にして、祭文語り（いまの浪花節）に唸らせたのは、苦肉の策だが思えばうまく思いの外に当った。

「田宮」「田宮」と大道で人集めしてやるものだから、いつの間にか、その、

「田宮坊太郎」と、田宮弥太郎が結びついてしまった。そして、

「十二才で親の敵をうった田宮坊太郎の子孫なら、二十五で町奉行になっても、大事あるまい」

と、みんな安心してくれたらしい。

だが田宮家の過去帖を寺で調べて貰うと、百年前の宗春侯の時代に、通称坊太郎というのが、初めて尾張に来て奉公しているのだからといって、親の仇を討ったかどうかは判らないが、そういう名の者がいたのはまんざら嘘ではない。

それに七代目の宗春さまは、紀州の吉宗侯と将軍家跡目争いをなさって敗れたと噂され、名古

屋を江戸にまけぬくらいに派手にされた殿さまで、新規のお召抱えも沢山なされたから、その頃の話だとなると、家中の者も、みな本気にして聞くようになった。そして上方まで、坊太郎の祭文がはやっているときくと、わがことのように喜んでくれた。

そして人気というのは、おそろしいもので、卵に目鼻の坊太郎のおかげで、渡辺一派も、田宮弥太郎を奉行職から、はずすことは諦めていたようにみえたが、六年たった今になってみると、なんのことはない。

その祭文の筋書を弥太郎が書き与えたことまで、当時すでに祭文語り共からちゃんと口がき書がとってあって、渡辺一派はすでに取調べずみだったようである。そこで戻ってきて、

「とうとう町奉行の御役はお召し上げになったぞ。なんせ、ほら昔の田宮坊太郎孝子仇討のお咎めが、今になって理由になったのだ」

出迎の妻に、低い声だが早速しらせてやった。すると、

「本当の訳は、松平秀之助さまをお担ぎだしの失敗にござりましたでしょう」

立ち上りざまにやはり低く囁やき返した。

「まあ、いいわさ。あれから何年も、お奉行をつづけて来たから、俺としては男の一分は立ったわけだ……」

御役ご免になったのに、ほっとしあったように、互いに顔を見合わせて、どちらからともなく

二人して微笑んだものである。

なにしろ、いつ何時、此方には身に覚えのない咎めでお呼出しか、討手の者でも来わせぬかと毎日冷えびえした気持で過して来たのだから、晴れて役向きを取り上げられると、かえって、ほっとさせられせいせいしてしまった。

「あなた様は意地を立てられて、ずっと頑張り通されたが、おかげで妾は、もう息も詰りそうに、ずうっと気病みしておりました」

「いうな。おれだって、本当のところは、やせ我慢だったわな」

ひとごとみたいに、にやっと皓い歯をみせた。しかし、その後が大変だった。

尾張徳川家の謹慎処分というのは、門に竹矢来こそ張らないが、目付の徒士が見廻りに朝夕よって調べにくるのである。

他行はおろか、邸内でも自室以外はみだりに出歩きは許されない。が坐禅をくむように端座ばかり毎日してもいられないから、十日もすると退屈してしまって、妻が、あちらこちらから借りてきた漢籍をひろげて、片っぱしから読みあさるようになった。

門に大きな桂木がそびえていたから、それからとって、桂園と自分で号をつけた。

祭文の筋書きを作るぐらいの文才があったから、独学で、詩作をこころみ一巻（『桂園詩叢』）を、この謹慎中に著作してのけた。

肩がこると、床の間の鎧櫃をあけて、田宮家伝来の黄素我の胴丸鎧の手入れを、毎日あきずに繰返した。他に気を紛らすようなことがなかったからである。

しかし先祖伝来といっても、まさか坊太郎という名の田宮家の初代が百年前に尾張藩へ仕官した時に背負ってきた筈もなかろうから、その後、古道具屋でも見て歩いて買い求めたものらしい、としか思いようがない。

だから田宮家の鎧は、清洲城下から越してきた他家の鎧と違って、戦場へ出たことがあるかないかも判らない代物だった。

が、その割りには痛みがひどく、結紐のくさってしまった威し糸を、新しい黄革の細紐に悉皆さしかえ、漆のはげた鉄板を丹念に塗り直すのにまる五ケ月もかかった程である。

それで長年、放って置かれた鎧もすっかり新しく色直しができると、櫃の中へ蔵って置くのが勿体なくて、床の間の飾り物に台木を立てて飾って置くようになった、退屈しのぎとはいえ手間暇をかけたので愛着がでた。

革紐の黄色が陽ざしによっては金色にも見えるからして、早速、

「金鉄武者」という一詩をつくってそれを鎧櫃にはりつけた。

自分が、この鎧をまとって、天晴れな武者ぶりをみせ、己れを陥入れた姦物どもに、ぬきんでて立身するという願望の詩であった。

「この泰平の世に戦国時代みたいに鎧をつけての戦があるでありましょうか」と妻は呆れ返ってひとりで鎧を付けにこにこしてる夫を、幽閉のために気がふれたのかと心配した。

弘化二年（一八四五）七月六日、尾州徳川十二代斎荘さま逝去。継いで十三代に立たれた田安斉匡の七男慶蔵も、後を追うごとく四年後の嘉永二年四月七日に病歿。

そうそうは田安家にも子種がないから、ここに初めて尾張は、御公儀からの押しつけでなく、どうにか久しぶりに尾州人の殿をもつことができた。

美濃高須の支藩から、松平秀之助慶恕。のちに（万延元年九月二十五日）慶勝と改名する殿が、本家へ迎えいれられたのである。

さて二十六才の十四代さまは城主となると田安家から出向の家臣や、それと縁を結んで城内に勢力をはっていた旧家の者を遠ざけると、かつて自分を担ぎ出そうとして失敗し幽閉中であった家臣たちを新しく側近にと迎え入れることになった。そこで、

「お召し出しである」と、昔馴染の丹羽三郎太や中村源太郎が、ようやく謹慎処分をとかれた田宮家へ迎えにきた。

「そうか……」髯ぼうぼうの弥太郎は、思わずはらはら落涙した。かつては二十才の若妻も三十才をこしていたがいそいそと側へにじりより、

「おまえさま――」と、その場へ手をつき泣き伏した。

なにしろ初めの内こそ鎧の手入れをしたり、漢籍をよんで詩作にふけって、まぎらわせてきたが、それにしても十一年は長い歳月であった。弥太郎は妻の肩へ手をやり、

「よくこれまで辛抱してくれたな」と、ねぎらいつつ共に涙にくれた。が、召し出されると、三百石が改めて加増されて、

「側御用人役として八百石」を賜ることになった。嘉永五年（一八五二）には千石に加増。城代格として、藩の執政にたずさわることになって京都屋敷出向を命ぜられた。

そこで田宮弥太郎の名では、他藩から軽く見られると上洛にさきだって、顎髯をたくわえ、名もいかめしく田宮如雲と改名した。

さて京へついてみると、弥太郎にとっては遠い昔の話だったが、慶長時代に愛宕山の勝軍地蔵が流行したように、当時は森の石松金比羅代参でも知られるように、讃岐の金比羅ばやりだったからして、

「田宮坊太郎の利験記」が向こうでは大人気で絵双紙にまでなって弘まり、当時すこぶる有名になっていた。

そこで、そそっかしい他藩の者は、

「お若い時は、人形みたいに可愛らしい小坊主どのじゃったが、髯などはやされて、いかつうなられましたな」

と、田宮坊太郎改めて如雲と、思いこんでる手合いもすくなくない有様で、一枚絵や草紙にまでなってる有名人というのであろう、堂上方のうけもよく洛中の志士もしきりに彼の許へ集まってきた。

吉田松陰などは、桂園先生と慕って、長州の若侍を伴なって何度も訪れた。だから松陰門下の桂小五郎の桂の姓のごときは、松陰が、頼んで如雲の号から貰って、それから附けさせたとまでいわれている。

さて若い者が集まれば酒である。なにしろ尾張は御三家の中でも裕福。京での家老職として田宮如雲には、自由になる交際費も充分にある。

初めの内は梅田雲浜や頼三樹三郎、そして吉田松陰を、（詩人の桂園）として、祇園、島原へ如雲は招いていたが、酒や女の欲しい脱藩浪士たちが、およばれについて来るようになった。ただ酒や女が目当で如雲をかついだ者もいたが、洛中で人気のあるところを看板にしたがって利用するのもいた。いつの間にか如雲の取巻きに長州や薩州の浪士まで、いつもついて廻るようになった。

さてその内に……

藩内の兵制を改革して、洋式銃を多量輸入する資金に、領内の木曾檜を伐採して、上方に売りひろめようとしていた矢先のことである。

安政元年四月、皇居炎上という椿事が起きた。実物見本のつもりで取り寄せあった木曾材を、

「それは大変である。すこしでも御役に立てば」と田宮如雲はすぐ献納しようとした。処が尾州家京屋敷へきていた勘定方中村弥太郎は、

「これは洋式銃買入れに当てねばならぬ用材……いくら天朝さまの御為と申せ、みな運びこんでしまっては、他から引き合いがきても見本用のもなくなるではないか」

自分が宰領して運びこんだ材木だけに惜しがって反対した。しかし如雲は頭ごなしに、

「そんな事をいうている場合ではあるまい」と加茂川へ筏で運びこんで、どんどん一本残らず納めてしまってのけた。

しかし、いざ御造営が始まると、

「御所にも使われた木曾檜」というので、これが宣伝になって、各所から見本なしで注文が殺倒し、瞬く間に一万両に近い思わぬ売上げをみた。

そこで中村弥太郎も初めとはうって変って気嫌をよくし、うまく商いができたと喜んでいると孝明天皇より献材を嘉納され、優渥（ゆうあく）なる女房奉書が、近衛右大臣よりさげわたされ、ここに田宮如雲の名は、勤王の大立物としてもすっかり評判になってしまった。

湊川神社創立

安政五年四月二十三日。井伊掃部頭直弼（かもんのかみなおすけ）が大老に就任して、十三代将軍家定の継嗣問題で尾張の慶勝、水戸の斉昭、越前の慶永らと正面衝突となった。

初め十四代に目されたのは尾張の慶勝であった。が時に三十五才。三万石の支藩から本家相続して以来、治政もおおいに上り嘱望されたが慶勝だったが、同じ御三家水戸斉昭の子で、一橋を継いでいる慶喜を自分の代りに推した。

が、井伊大老は、自分が自由に操れる紀伊の慶福を立て、六月二十一日にとうとう京都で勅裁をひそかに仰いでしまった。そして六月二十五日に、十四代将軍家茂としての披露を宣下すると、七月五日には反対した尾水越の三藩主を幽閉処分にしてしまった。

尾張では、当時、高須藩主になっていた慶勝の異母弟摂津守茂徳（のち茂栄）を、十五代の名古屋城主に立てるように井伊大老に命じられた。

そして八月八日、まず梅田源次郎雲浜らが京では捉えられた。

いわゆる安政戊午の獄が始められたのである。

田宮如雲も中立売小川町の儒者（じゅしゃ）堀内記の許から、練小路宝町西入の尾張藩邸へ戻ってきたとこ

ろを、留守居役の巽弥五六郎が待ちうけていたように、「藩命でござるによって」と、気の毒そうに上眼づかいで呼びかけ、佩刀を召しあげるとその儘、すぐに名古屋へ護送した。

しかし、白壁町の自宅へもよらせず、御器所村の倉入奉行役宅の揚げ牢へ放りこまれた。翌六年十月。頼三樹三郎は三十五。吉田松陰は三十才で、小塚原で獄門首になったのが伝わってきた。梅田雲浜はその前月十四日に拷問で殺されていた。みんな、共に酒をくんだ詩作の同輩である。それゆえ田宮も、

（これでは、おれもやはり殺されるな……）と覚悟をつけて諦めていると、翌年三月の末になって、思いがけず自宅から妻の妙女が着換えをもって迎えにきた。

三月三日に、水戸藩士が、桜田門で井伊大老を討ったので、斉昭と共に睨まれていた前藩主慶勝さまの幽閉もとかれ、それに連座した田宮如雲も、お構いなしの沙汰が下ったのだという。

さてその三月十八日に改暦されて万延元年（一八六〇）。その翌年二月十九日に改元をまたして、文久元年と変り、まこと慌しい世相となった。

「会津の容保が、越前の春岳侯に押しつけられ、この八月一日づけで京都守護職を引きうけて、十一月二十四日に上洛したが、都は不案内。ついては洛中で人気のある田宮を貸してくれぬかと

そないいって来ている。なにせあれは余の実弟である、よろしう見てやるよう」

前藩主慶勝公からいいつかって田宮如雲は千二百石に加増され、またしても京へ上ったのは、文久二年の十二月五日である。

慶勝公の実弟は会津藩主松平容保と勢州桑名十一万石の松平越中守で、みな養子に行ってるが極めて仲の良い兄弟で、桑名侯のごときは元治元年からは京都所司代の後任をかって出て容保のあと始末をひきうけているくらいである。

さて上洛した如雲は、寺田屋騒動で主だった在京藩士を失った薩州人を慰めるために、容保の会津屋敷と錦小路東洞院東の島津久光京屋敷の間を取持つように足繁く出入りし、留守居役田尻次助とも懇意になり、会藩同盟のような役割をはたした。

桜田門外の変に、水戸人だけでなく、薩摩の有村治郎左衛門が加わっていたゆえ、そのおかげで助かった如雲が好意を抱いて取もちしたのである。西郷隆盛が、如雲に兄事したのもこの頃であった。

さて会桑尾の三藩を掌中に入れたと思った松平修理太夫（久光）は、競争相手の長州をこの際蹴落そうと、そのため文久三年八月十八日に禁門守衛の任を毛利氏から奪い、七卿落ちという徹底的打撃を守護職容保の名で行なわせた。

あまりに薩州のやり口が巧妙なので、これでは、容保一人が憎まれるのではないかと、伝奏野

宮定功卿をしてときの孝明天皇さまは、

「是迄、勅命不分明の儀、これ有り候ども、去る十八日以来申出候儀は、真実の朕の存意に候間、此辺諸藩一同、心得違いあるべからず。御名御璽」

と、勅語を賜り、十月九日には、御製を二首、恐れ多くも容保へ届けられた。

「容易からざる世に武士の忠誠を喜び、よめる」と題されて、天皇自らのご親筆で、

「和らくも武き心の相生の、松の落葉の、あらず栄えん」

「武士と心合せて、巌をも貫きてまし、世々の思い出」

松平容保はこの天皇の知遇に感激した。が、会津の国家老の西郷頼母や田中土佐は、

「わが主君に、火中の栗を拾わせるような仕儀は、やめてほしい」と激烈な抗議をし、名古屋の慶勝公の許へも訴えてきた。

佐幕派の会津の国許の重臣どもは、勤皇派の田宮が松平容保をたきつけているものと誤解したのである。そこで元治元年に改って八日目の二月二十八日付で、京より田宮如雲は尾張へ呼び戻された。名目は、壬生浪士松本省庵を招いて編成した洋式銃編隊の監督という扱いであった。

この当時、如雲は、惚れぬいていた祇園の若い芸者をようやく落籍して、洛北に囲ったばかりだった。それゆえ会津の国許家老を恨んだ。

だがまさか、名古屋へは妓を共に連れ帰れない。そこで断腸の想いで手を切った。

（吾レ一生ニ一度、恋ヲ知リ、三日ニテ別ル）という「愛別ノ辞」の詩作が今も残されている。

この時の恨みをはらすべく、それゆえ後年、奥州へ進発させた尾州千賀隊には、如雲は隊長千賀信立に巳が腹心の久野長市を副長につけた。

この隊は、越後長岡城攻略後、慶勝公の実弟松平容保を攻めに会津へ一番乗りをした。

そして、薩長兵より先に廓内へ突入して、西郷頼母、田中土佐守の邸を包囲して、その娘たちを、ことごとく手足を押さえて冒し、如雲の恨みをはらしたという。耐りかねて他家の娘共も、薙刀をもって出て防戦したが、彼女ら会津娘子軍たちも、ついで殆んど嬲殺しにされている。

さて如雲が愛妓と別れて引揚げた京へ、六月二十四日に長州の福原越後が兵を率いてきた。

そこで七月十七日。薩藩の西郷吉之助が、三本木の料亭に、諸藩の重臣を召集して、

「長州勢が襲う相手は薩摩だけと諸藩は他人事のつもりで説諭など唱えとるが、尾州の田宮先生もいない今の京でいったい誰に勤まり申す。らちが明き申さん。吾ら薩州勢は実力で明日、かたを付け申すが、その時になって、おはんらの陣場貸しは、お断り申す」と恫喝した。

それでは、という訳にもゆかぬから、諸藩こぞって討伐に同意させられた。翌日が鷹司邸近くから始まる蛤御門や唐御門の戦いである。

このために七月二十三日付けで、長州討伐の勅書が江戸表へ下った。この際、長州を滅亡させ

ようという薩摩の謀略である。そこで征長総督の重任は、尾張前藩主慶勝へ、「松平大膳太夫父子追討の為め進発致されたく候。関東筋は騒々しく依って御地より、御自分で総督に成せられ、早々御出陣、ならせらる可く候」と、上意の趣きを伝えてきた。

将軍家名代ゆえ、世が世なら一端、江戸へ呼んで、節刀を渡し軍資金をもたせて出陣させるのを、名古屋から自腹を切って出陣しろというのである。なにしろ井伊大老が殺されてから七年も過ぎてるのに、まだ大老職は空位の儘という時代である。

将軍家上使の逸見甲斐守が、江戸千代田城で手渡す品々を携えて来た。神君家康公のご着用の、大和錦陣羽織。宗近作の金王丸御太刀。信家兜。それに、神君の御旗二流と、御采配。

十月七日。尾張前藩主徳川慶勝は上洛し十二日参内。十一月二十五日に尾藩と犬山藩の兵をひきい大阪表を出陣。

家老田宮如雲は黄革で威した鎧を身につけ、背に金鉄の二文字の旗を背負い、参謀として、公儀の大目付永井主水、目付戸川鉾三郎らと、同行して出陣。広島城三の丸をすぐ大本営として、ここに防長包囲の陣ばりをした。

薩藩の西郷隆盛は、あくまで長州討滅をと慶勝に進言にきた。が、この接待に同席した若井敏吉（重斉）は、薩長連合の後には薩人に口をふさぐために斬殺されている。さて、岩国藩主吉川監物は、宗家毛利敬親に代って恭順謝罪を申出てきて、十一月に入ると田宮如雲の許へ、

「私家老益田右衛門介、福原越後、国司信濃去る七月、轟下に於て騒擾之始末、深く恐れ入り候（中略）一同斬首申しつけ委細は吉川監物を以て申上候通りに御座候。まったく私父子が平常をゆるがせにした罪科は遁れがたく、寺院に蟄居して何分の御沙汰を謹みて待ち奉り候。元治甲子十一月、毛利大膳」

十一月十四日に毛利の家老土道安房守が、広島城下の国泰寺に、三家老の首級を揃えてきたから、十八日の総攻撃はひとまず中止。

山口城をこわして萩城をあけさせ、十万石を削封処分し毛利父子は永謹慎。孫の興丸を継嗣にする条件で、田宮如雲は和平を結び、翌慶応元年正月三日に大本営をひきはらい帰洛した。

田宮坊太郎の絵双紙や、祭文語りは西国すじまでも行きわたっていたから、田宮如雲の（金鉄武者）の一枚刷りさえ、そのとき大阪瓦屋町讃岐屋から版が出たほどである。

まさか、自分で繕った鎧をきて、こんな晴れがましい武者絵になるとは、思ってもいなかったから、如雲は、すっかり喜んで絵の買占めをしてくばって廻ったと伝わっている。

湊川に、水戸光圀が建てたのは、「嗚呼忠臣楠子之墓」という小さな石塔一基である。

いまの湊川神社は、慶応三年十一月八日に田宮如雲が奏請したのに対して、

「楠社造立之儀、尤に思召され候。就いては、その旨の御採用遊ばされ今度は兵庫表に同社造立

を仰出され候間、此段申達候事。四月二十八日。総裁、有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）」

と許裁を賜って、尾張藩の費用で、如雲が建てたものである。

文久までは、長州を潰しにかかっていた薩州が、途端に豹変し薩長連合をなして我が物顔に、のさばりだしたのに肚を立てた如雲が西国大名が上洛するに当って、通らねばならぬ兵庫の街道筋に、ことさら大規模にわざわざと造営したものである。

いやしくも、勤王の美名を掲げている西国者は、此処を通る行きかえりには必らず社前に額（ぬかづ）いて、恭々しく礼拝せねばならなかったし、世間では尾張の勤王事業とみていた。

だが、大正の末まで名古屋の赤塚にあった神明社内の楠公祠の記録によると、神戸の湊川神社の神殿には、光圀を始め尾張徳川家歴代の殿様の法名と田宮如雲の、金鉄武者の一枚刷りが、楠公霊と共に祀られていたそうである。施主が尾張藩で、造営一切は如雲の手で行なわれたのだから、代々の宮司も知っていても黙認したものらしい。

つまり、薩長土の連中は、兵庫を通るたびに尾州家藩主と如雲に三拝九拝していたのである。

さて鳥羽伏見合戦後に二条城を占領した徳川慶勝は、議定を辞し戊辰正月二十日帰名した。

夜半ではあったが、藩士一同うち揃ってお出迎えに登城した。すると銃隊が待ち構えていて、

「渡辺新左衛門、榊原勘解由、石川内蔵允。右三名の者、朝命により、死を賜る」

否応なしに、暗い本丸の中庭へ連れ出された。金鉄党と呼ばれている田宮如雲の腹心で中村源太郎の甥の二十六才の修之進が、血のりも拭わず、ばたばたと首を斬り落してしまった。

この三人は、如雲が、養父半兵衛の跡目をついだ時に邪魔立てをした重役共である。

が、渡辺新十郎だけは幸か不幸か十年前に病死していたから、この厄を免れた。

翌二十一日。中村修之進は如雲に京都で命令されてきた通り、また次の十一名も斬首した。

側用人兼大目付武野新右衛門。用人横井孫右衛門、同右近。沢井小左衛門。目付徒士林紋三郎。さきの御器所村倉入奉行で、今は勘定奉行になっている成瀬嘉兵衛。先々代の時に祐筆役だった安井長十郎、松原新七。同じく小姓だった馬場市右衛門、寺尾竹四郎。

この十名は、如雲の第一回の謹慎の時と、次の御器所村幽閉の時の関係者である。

「人を刑するに、その罪状を示さないのは、たとえ朝命による賜死でも、お受け致しかねます」

前明論堂督学の塚田は極力抵抗したが、中村らに滅多斬りに誅された。

「何んの罪だろう」と噂をされたが、三十五年前に塚田が、祭文語りを調べて「田宮坊太郎孝子の仇討ち」の筋書の草稿が、如雲の筆蹟と鑑定した咎だろうと、憶えてる者がいた。

この中村修之進は如雲の世話で、のち新政府に仕えて函館控訴院検事長にまで昇進している。

次の二十二日。側用人松井市兵衛以下三十余名に対して、蟄居、減禄、謹慎の処分が言いわたされた。彼らはかつて、田宮の家へきた幼時に、「貰い子」などと如雲を蔑んだ者、妻の妙女と

仲違いした者。如雲の立身を妬んで蔭口をきいた輩たちであるといわれる。

表向きの誅伐の理由は陰謀を企んだ佐幕派の一掃で、当時の事ゆえやむをえぬ事と思われた。

田宮如雲は、その粛清の間ずっと京都に止まって、京伏見の民政総裁の大役に任じていた。

鳥羽伏見の戦いがあったのはこのときで、土方歳三らが彼のために敗走したのである。

さて当時の御所の参与十九名の内では、文化五年生れの如雲の六十一がなんといっても最年長者で、西郷隆盛が四十二、木戸孝允などは三十四だった。

尾張の粛清が一段落して落着くと如雲は帰藩した。名古屋城下では、もう如雲の蔭口などは、恐ろしがっていうものはいなかった。推されて大執政。昔の一番家老に昇進した。

「あなたさま、まこと……夢のようでござりまするな」

五十七になって、びんが白くなった老妻がしみじみ薄茶を立てながら如雲にいった。

「こんな、えらいさまになるんなら、渡辺一派を生かして置けば好かった。どさくさ紛れに片っ端から処分してしもうて、これでは、豪うなっても、何んの役にも立たんではないか」

淋しそうに如雲も、白くなった光冏ばりの顎髯をしごいて溜息をついた。

「お前さまは、眼には眼、歯には歯で、昔から、心に掛っていられた徒輩は、みな討たれました。さぞ、ご満足でござりましょう」

「この世での貸借は一応はみな済せたが、まだ心残りがある。あの金鉄威しの鎧をきて思いきり

暴れ廻ってみたかったぞ。せっかく芸州くんだりまで行ったが、鉄砲の撃ち合いだけでつまらん。槍を振って思いきり武者働きがしたいもんじゃ。それが望みよ」

そこで、老軀にてその任に堪えずと大執政の任をすぐ断ったくせに、領内の北門の警備を申出て、東山道太田に北地総管の役目を設けみずから赴任した。

だが、美濃尾張の境目の太田に外敵が来ないまま二年たった。そして病気の知らせが来た。

老妻が駆けつけた時は顔が小さくなって、もう死色が出ていた。

「鎧のまま、槍を持たせて立姿で土葬しろ」死にかけてるのに、まだ威張っていた。

「天朝さまは東へ移られてますから、そっち向きに埋めましょうか」と耳許に囁やくと

「もう仇は皆とってしまったから、もはや天朝さまに用はない。それよか、敵の武者が突き込んで来そうな方向にわしを立たせて呉れよ」

子供のように駄々をこねて、大身の槍を両手で握りしめたまま、縋りつくようにして翌日の明け方に息を引取った。

明治政府の要人は、田宮如雲の功をねぎらって、すぐさま遺族に男爵の栄位を贈った。

昔、ただ酒を振まって呑ませて貰った連中の、自分らの腹をいためぬ香典でもあった。

士道、武士道とは……

今日の湊川神社をも水戸光圀のたてたものと誤り、田宮如雲の建立とは知らず、「当神門は、光圀公建立の湊川神社の物を、その改築の際に特にわけて頂き移したものである」と、有難がって立て札を掲げている播州赤穂の大石神社の例もある。

ともすれば年代的にも飛躍するようだが、田宮如雲の話を、これまで書いた人がいないので、後世の参考にまでにと思い長々と書いたのである。

またこれによって、今では誤られている芹沢鴨の実像、木村継次のことが判っていただけたら、これもチャンバラ映画や大衆小説によって誤られっ放しの人物ゆえ、さぞかし泉下で故人も喜んでいてくれようというものである。

日本では昔は講談や浪花節今ではテレビや芝居の筋そのままが、さぞかし昔の話ゆえ、「歴史」だろうぐらいにお手軽に扱われてきているので、まったくどうにもならない。

さて光圀についても同じことが云えるが、それはさておき、これまでのもの、たとえば、「大日本史」「礼義類典」「扶桑拾葉集」「新編鎌倉志」「参考源平盛衰記」「参考太平記」「参考保元物語」「参考平治物語」「常山文集」「常山連句」「常山詠草」「西山随筆等数十部」

の類にかかると偽作も多いが、みな、しかつめらしく、どれもこれも一様に、

「幼名長丸または千代松丸、字は徳亮、一の字観之、後ち子竜と改む、日新斎、常山人、率然子、梅里等の号あり、義公、世に水戸黄門、西山公と称す。家康の第十一子頼房の三子にして水戸の藩主なり」とあって、そこまでは正しいが、次に、

「寛永五年水戸城下三木仁兵衛の宅に生る、十三年七月元服をなし従四位下に叙し、十七年三月右中将に任じ、七月従三位にのぼる」と、もっともらしく、

「正保二年はじめて史記伯夷伝を読み、慨然として修史の志あり、且つ兄頼重を越えて世子たりしを悔ゆ、明暦三年二月、大日本史の編纂に着手す、寛文元年頼房亡くなるや家臣中殉死せんとする者あるを聞き、天理人道を懇諭してこれを停む。ついで八月封を襲い、二年十二月参議となる、三年十二月頼重の子頼方を立てて世子となす。けだし兄を越えて家を襲ぎたる報にずるなり、五年明の遺士朱舜水を聘して師となして道を問い、みずから弟子の礼を取り、終始怠る所なし、この年秋請うて藩に就き、十二月国内の淫祠三千八十八を毀つ、この月また出府す、十年頼方卒せるを以て、明年更に其弟綱条を世子となす。延宝五年扶桑拾葉集成る、書名は実に後西院天皇の賜う所にして、また勅撰に準ぜらる、明年これを献じて天覧に供う」とする。そして、

「元禄三年十月十四日致仕し、十五日権中納言に任ず、光圀時に致仕後の任官は贈位にひとしと称し、之を受くるを喜ばざりしが侍臣のすすめによりて堪えたりといへり、けだし将軍綱吉に忌

まれしに因るなり、十二月水戸に帰り、翌年五月久志郡太田郷西山に蟄居す、五年楠公の碑を湊川に建て、題して嗚呼忠臣楠子之墓といふ、十三年十二月六日死去、年七十、久慈郡瑞竜山に葬る、天保三年勅して従二位大納言を贈り、明治二年また従一位を贈る」

——ということになっている。しかし寛永十三年七月に元服し従四位下に任官というのは、（水戸家の家柄はそうである）というだけのことで、四年後に右中将になり従三位になったとか、跡目をついだとき、参議に任官したというのも同様である。後になって、（光圀さまだけ御隠居なさるまで、無位無官であらせられた……というのは可笑しい。これは当時の儒臣どもが何かの拍子で付け落としたせいではないか）と勝手に家臣が、（水戸家にあって嫡子は元服のとき従四位下に自動式に任官し、御世つぎの届出をした時に右中将になり従三位、そして御当主になられると参議に官位がすすまれるのが慣例ゆえ、光圀公もさだめしそうであったのだろう）と、どうせ他へは持ち出して見せるものでもないゆえ、適当に合せて作ってしまったのだろう。が、

「権中納言に致仕つまり隠居後に、ようやく任官させて貰えたのでは、死後に贈位されると同じである」と、光圀が渋ったというのだけが事実である。

しかし明歴三年二月に、「大日本史」の編さんに着手というのはどうだろうか。

昭和三年七月に、水戸義公生誕三百年記念会が、当時の茨城県知事を会長として発足。その記念出版として、索引共で十七巻で刊行され、各巻ごとに、その巻首に、

「権中納言従三位　源光圀　修
男権中納言従三位　綱条　校
玄孫権中納言従三位治保　重校」

の三行がでている。しかし本文は、水戸城三の丸に弘道館ができた後からのものである。なにしろ第一巻でさえも、幕末の文化七年十一月五日の日付けがでている。

もちろん光圀が歴史好きであったのは事実だったらしく編史の志もあったろう。しかし大名の「申付け隠居」というのを後世では誤まり、江戸小石川の屋敷をひき払い茨城へ戻って、楽隠居の身分になって儒臣を集め、そこで大日本史の編さんに取り掛ったように感違いしている。

しかし公儀から命じられた隠居処分というのは、大名がその家来へ下す閉門処分より遙かに厳しいものであった。水戸家では幕末の斎昭の代になって、やはり天下征覇を志し、「征夷の勅さえ京より頂ければ、その者が征夷大将軍となるのが古来の格式であるのならば、この斎昭とて攘夷の勅命を賜らば、それで天下の将軍家となるのであろう」と、前にものべたが水戸京屋敷の鵜飼吉兵衛らに運動させて、征夷の勅を下賜してもらったことがある。世にいう、

「水戸の密勅事件」で、この秘報を耳にして台閣の井伊大老はびっくりした。

そこで天下の将軍職が頭ごしに江戸をとびこえ、水戸の老公へ行ってはどうもならんと、斉昭の妻女の里方の有栖川宮家を弾圧し、それに繋る者を捕えて殺しだしたのが安政の大獄である。

しかし斉昭の死後も、水戸家が天下の将軍家となれば、自分らは陪臣でなく御直参になれるのだと、その遺臣の山国兵部や武田耕雲斉らは、若い者たちをたきつけて実行隊とし、元治元年に天狗党の旗上げをさせ、栃木太平山の三光神社の社務所に、

「水戸幕府」とか「水戸公儀」の二流の大看板をあげさせるようになるのだが、それは幕末になっての話。しかし水戸斉昭は、かつて有栖川家の幸仁親王を五代将軍にたてて、自分が武家側より副将軍としてたち、やがては水戸が天下の将軍家たらんともくろんだ義公こと光圀は、いうなれば水戸の精神的なテーゼみたいなものゆえ、天保三年に運動して従二位を追位して貰ったり、大日本史編さんの花も持たせたのであろう。

でないと、いくらのんびりしていた江戸時代とはいえ、その叙文に、

「先人（養父光圀）十八歳のときに『伯夷伝』をよみ、おおいに感ずるところがあって、それから人皇になってからの二千余年の歴史をここに編むようになったのである」

と、高松から入って跡目となった綱条の名で書かれているのが正徳五年、つまり一七一五年。

ところが実際は、その第一巻神武さまの巻でさえ、それより九十五年後の文化七年十一月。

光圀が死んだ元禄十三年からでは百十年後にあたり変てこである。昔のことゆえ霊界から光圀が編さんの指揮を一世紀以降も後になって、超能力でなしとげたとでもいうのだろうか。

また前にものべたが光圀十八歳の頃といえば、夜ごと忍び出ての辻斬りのためというか運わるく浅草寺境内での殺しで寺社奉行より内密に連絡があって、佩刀や脇差まで取り上げられて、ぐれきっていた年頃にあたる。だから話が出来すぎていて可笑しい。

すべてが斉昭の恰好づけのための思わくであり、御三家の一つといえ水戸家からは、斉昭の代までは、将軍家になれなかったことへの冷や飯ぐいの面当て、怨念でもあったろう。

が後世になって、明治・大正の皇国史観の根本ともなる「大日本史」編さんの晴がましい役割を、死後一世紀後に奉られたのはよいが、その生前の隠居生活はどうだったのだろうか。

公儀からの申付け隠居のひどさは、水戸家にあっては、これはどうあっても、「汚辱の歴史」であるからして、すっかり隠しこまれて何も伝わってはいない。

しかし同じ御三家でも尾張徳川家の方は、七代目の宗春がうっかり、

(神君家康公と松平元康とは別人なり)と、書いたものを刊行してしまったばっかりに、「神君のこと御家のこと、いっさいこれをみだらに筆にすべからず」とする大岡忠相の貞享の禁令にひっかけられた。そして家康第九子義直の血統は尾張から遠ざけられることとなった。

つまり将軍吉宗によって元文四年正月、申付け隠居を命じられた宗春は、

「城内にはおかれたまわず、甚目寺在の農家におしこめ竹矢来を外よりはりて、内に仕えるは女二人のみなり、筆墨の類は一切厳禁とのお仰せありければ、落し紙（トイレットペーパー）の差し入れも許されず、女どもきぬたにわらづとを涙しつつ柔かく打ち叩きおるもあわれなりと、支藩高須より跡目をつがれし但馬守義淳さまが、文字はかけぬ反古紙の柔きものを届けたり。されどこのことのちに閨東の牒者に知られたるか、大公儀の激怒をまねきたまい、義淳（宗勝）の御子の宗睦さまの御代にて絶家。改めて江戸表より第十代の当主には一橋家より、次の第十一代、第十二代、第十三代には、同じく江都の田安家より殿さまはわたらせられ相続する」とある。

つまり、尾張には、水戸斉昭のような野心家の殿さまが後世になっても現われず、

（たとえ反古の落し紙を一帖差し入れするような真似をしても、江戸表へ知れては大変である）

とするごとき家訓がひき続き、家中の戒めとされていたので、こうした徳川宗春の隠居の実際が、教訓というか心すべきこととして伝わっているのである。

（世俗に伝わっている尾張藩の土居下の者らが、どんなことがあっても殿さまを守る悲壮な使命にもえ、親子代々それを伝えていたとするのは、どうもこれでは伝説でしかないようである）

さて、将軍吉宗に憎まれて、申し付け隠居をうけた御三家の一人の宗春が、女二人だけで百姓家同然の小屋に入れられ竹矢来をはられ閉じこめられていたとする実証があることは、同じく五

代将軍綱吉に忌まれた光圀もやはり同様な扱いで、そうだったろうと想像できるといえる。

なにしろ八代将軍によって宗春が閉じこめられた元文四年と、光圀が押しこめ隠居にあった元禄三年との間は、僅か四十九年しか距りがないからである。

だから、光圀もやはり筆墨の類は禁じられていたゆえ、大日本史の編さんを始めるどころではなかったろうし、また、俗に伝わるところの、

「助さん、格さん」の二人の側近も、幕末から明治の酒落本には佐々宗淳ではなく、助は、すけべとあるし、格は、

「五本指」が丸の中にかかれている。どうも隠居後の光圀は女色を好いていても不自由して、自分の指でカクことをやむなくされていたらしいとの表現で、面白半分に誤っているようである。

が、宗春の例をみると、

「男の近習などつけておいては物騒ゆえ側近は百姓女でもつけておくべし」とされているが、そうでないにしても家中の娘の中から、しかるべきものが選ばれて奉公していたのだろう。

つまり、助さん、格さんは、テレビ映画にでてくるような意気がった若者ではなく、どうも女人でないと話の辻つまが合わないようである。それゆえ話が、あまり固くなっているのを、ときほぐす為にも、助さん格さん女人説を先に紹介しておきたい。

なにしろ今日で考えるような隠居ではなく、江戸時代の「押しこめ隠居」は、他領へやられる

配流と違うのは、ただ自領内ですませるという恰好づけだけの事であって、実際は、（信州高遠藩へ御預け）というのと、常陸太田へ隠居というのは変りない処分である。

まだ他領へ配流処分の方が、付け届けがきいたり、見廻り役人の好意も期待できた。

が、尾張宗春や水戸光圀のごとく、御三家なるがゆえに他への名聞から自領監禁というのは、家来が、かって旧臣だっただけに、便宜を計りそうに想うのは反対であって、

「もし他に疑われるようなことがあったら、自分は軽くて追放、重ければ命にかかわる」とか、「昔は昔、今は今である。すでに地位を失った以前の殿様に忠義をつくしても何も得るものはない。それよりも今の殿様に、よく勤めて見張りを厳しくするのが自己保全の士道である」

と、旧臣なるがゆえ、自領なるがゆえに、きわめて苛酷なものだったらしい。つまりこれは、「一文にもならぬ事を誰がする……」といったことが昔からいわれてきた国民性でもある。

またこれは武士というのが、昔は役人だったからとみれば納得できることかも知れぬ。

内閣改造で大臣が変ったときに、その部下の役人が、自分は前大臣に目をかけられていたからと義理立てなど考えたら、やめるしかないのである。だから前大臣と政策が変っても、

「ハイ、ハイ」と、局長も部長もみな新大臣に忠勤を示すようにし自己保全を計るのである。

講談やテレビの画面で、いくら武士の恰好したのが、さも、もっともらしく、

「士道」とか「武士道」などと口走っても、あれは武士を使う側が求めた理想である。つまり、

百姓や木こり上りの俄か武士団の新選組あたりが部下を統制してゆく必要上、今日の社訓のように云いだしたにすぎないのであるといえよう。

いつの世でも、すべて生活が、はっきりと結びついていなければ話が嘘になるのである。

「武士はくわねど高揚子」といっても、本当にくわなかったら飢死してしまうのである。

「籠城して兵糧攻めにあったとき、城内にまだ糧食豊富のごとくに見せるため、城壁の敵より見やすき所に並ばせて、さも満腹のごとく、敵よりも一見それと判るような長き揚子にて口をつつかせておけば、敵は兵糧攻めに失敗したるものと思い陣払して退却するものなり」

という「兵法雄鑑」の一節が、のちのイロハガルタになって広まったものらしいが、これは天下泰平の江戸中期の正徳年間に、今日の講演コンサルタントのごとき、兵法家というのが、さも、もっともらしく面白可笑しく、聞く者が退屈しないよう喋舌っていたもので、

「天下が治って波静かなのはよいが、権現さまの頃から、お扶持は同じことなのに物価は何十倍も上ってきて生活は苦しい。しかし、だからといって武士がベースアップの賃上げ闘争もできぬから、みんな、じっと我慢の子であれよ」宣撫用の慰めに使われたものである。

また、正徳あたりから幕末にかけては各大名家の窮乏がひどく、そのために、

「殿さまへ、一文の散財もかけぬのが忠義である」と、扇子一本でも辞退するのが士道とされだしていた時代が、ずっと続くようになるし、また、それでもやっていけなくて、

「御借上げ」と称して、物価に比例して何十分の一にも下落した扶持の中から、「天引き二割、三割」が普通になった武士生活では、それでも堪えて内職してでも表向きは飾らねばならないので、この、武士はくわねどの言葉が流行したのだろう。

なにしろ士道とか武士道を語る言葉には、生活離れした非現実的なのが多く、「武士は二君に仕えず」といったのもある。だったら水戸光圀に奉公していた水戸二十五万石の千五百人の武士は、四国高松から次の主君が入ってきたら、袂をつらねて、「……綱条さまには多くの御家来衆を伴われて、お越しのことゆえ不自由はござるまい。われらは前の御老公の臣でござれば、あえて二君には仕えまいらせず」と、みなやめてしまえばよい。

ところが、そんなことをしてやめてしまっては、失業手当の給付もない時代のことゆえ、「くってゆけんことになるから……まあ、辛抱して二君に御奉公をよくせねば」もう誰も光圀に忠義立てなどしていない。またよく間違えて、武士が百姓に戻って田畑を耕やして食してゆくように書くひともあるが、明らかにこれは明治以降になっての誤りなのである。

明治五年の壬申戸籍のできる頃までの日本は、なにしろ昔から、「豊アシ原ミズホの国」といわれていたように、草原を求めて遊牧して歩く非農耕の騎馬民族の末裔と、稲作をしてミズホを実らせていた農耕民族の二つにはっきり分かれていた。

幕末の吉村寅太郎の「天誅組旗上げ趣意書」にも、この点は、

「いくら日本中の百姓が精を出して働いても、浪人しても田畑を耕やさぬ武士のような、非農耕の者らをとても食わしてゆけぬから、武士階級をなくして、天皇さまの下に名主庄屋が直結して、すべての者が食うためには耕作するようにならねばならぬ」とでている。

武士が転業できたのは、商人と工人だけであって、百姓は各だんな寺によって人別帖に生まれた時から名を書きこまれ世襲限定職業であったから、刀をすててもやたらには握れなかった。

「君、恥しめられれば臣これに死す」と、恰好のよい士道のモットーもあるが、光圀のために誰が奮起したというのだろうか。幕末になって井伊掃部頭が水戸人に桜田門で殺された後でも、井伊の家来は誰ひとり仇討ちもしない。それどころか井伊の重臣は、水戸斉昭の好物だった近江牛の肉を船につんで、贈物に那珂湊へ届けにきて、

「どうぞ、よろしく……」と、信じられぬ話だが三拝九拝している。

『水戸党派始末』には、月日から井伊の重役の名までが書き残されている。がさて、こういう固っくるしい話はこれくらいにして、読みやすいように話は、これからなめらかに変えてゆく。

なぜ初めに、こうした鹿つめらしい論考めいたものを書いてきたかといえば、テレビや講談物の影響で、助さん格さんは、ぱりっとした二枚目の男性だったと幻想をもっているひとも多かろうと心配して、それで、その既成概念を吹きとばしてほしいための前置きなのである。

助さん格さん

「……なんじゃ」うとうとして居たが、なま温かい体温が伝わってくるのに、さすがに目ざめて声をかけたところ。相手は脅えたように、

「は――はっ……はい」三通りに返事を周章ててしてきた。そこで水戸光圀は、

「家中の者の娘であろうが、名を申せ」

と、手をのばしたはずみに、むっちりした乳袋にふれてしまった。そこで、

「……八重と申しまする」低く答えるのへ、光圀は仕方なく手もちぶさたで、

「大きいのう……むちむちしているな」

顎髯の先をしごくいつもの癖で、つい膨みの尖端を引張りながら云ってしまった。

「……生れつきでござります」すると困ったように胸のところをいじられたまま、まだ若い娘らしく恥ずかしそうに八重は喘えぎを聴かせた。

「そうした事はあるまい、ここが大きくなってきたのは、まだ数年前のことであろうが」

眼がさめてしまった無聊しのぎに、暗がりの中で若い娘をからかうようにいった。

が、聞かれた方は神妙に受けて、かしこまったように、

「はい、仰せの通りにござります……」
寝ながら答えたのでは恐れ多い、とでも思ったのだろう、床から抜けだして手を前へついて頭をたれている模様。
「これこれ、ひとの寝床を往来同様に心得て、そう勝手に入ったり出たりするではない。せっかく温まったのが冷えるではないか」
「では、そっと脇へ添い寝させて頂いても、よろしいのでござりましょうか」
「濡れぬ先こそ露をもいとえと申すが、わしの寝込みを襲って先刻まで、そのほうは横になっていたではないか。苦しゅうないぞ……」
光圀は掛け夜具を自分からめくり、暗がりの相手へ、
「風邪でもひいたら何んとする」やさしく、いたわるようにいった。
それゆえ、八重とよぶ娘もほっとしたように、
「では、お言葉に甘え……」と床の中へ入ってくるなり、今度は腰紐を自分で抜き、
「さあ、どうぞ、お用いなされませ」身体をすりつけるようにもってきた。
「うん、用いるとは……」とぼけて聞くと困ったように、無言のまま脚をすりよせてきた。
「これは良い、湯たんぽ代わりになるな。どうも足先が冷んやりして困るが、わしは保温の道具は昔から使わんことにしとるから、こりゃ助かる……唐書にでてくる肉蒲団とは、かかるのをい

うのであろうか」

むっちりした八重の肢体の上に、よじ登るごとくに這い上ると、さも満足そうに、

「まこと柔かく……しかも温くこれはまことに良ろしい」唸りながら手足を伸ばした。

そこで八重が、御意に添えたらしいとほっとして、己が胯間を開き、

「……恐れながら」と光圀を迎え入れようとした。ところが、それに対して、

「わしは寝ぞうはよい。何も栓なんかを下へかわんでも大丈夫じゃ。決して留金なんかせんでも落ちはせんぞ」と、また乳房をしごくごとく撫でまわした。

それゆえ八重は当惑してしまい、どうしようかと悩みぬき、

(これでは下になっていても仕方がない)と思ったのであろう。すうっと身体を抜くなり今度は上から覆いかぶさっていった。それゆえ光圀は厄介そうに下の方へ手をのばし、

「今度は肉の掛け蒲団ときたか……ちょぼちょぼしたのが、もっと房々して居れば、もっと温かろうにのう」などと迷惑げにとぼけて、いじりながら口にした。

しかし眼光だけは冷たく、ぎろりと暗がりで光らせていた。と云うのは、わけがある。

この元禄三年十月十四日付けで、光圀はしたくもない隠居届を出させられたのである。そして翌十五日になって初めて、それまで無官だったのに権中納言の沙汰が出された。

もともと官位は御所から賜わるものだが、今では形式だけですべて将軍家裁可になっていた。

『西山遺聞』には、「厳しきおふれの大公儀の生類憐れみの令を無視なされて光圀公は、犬の皮二十枚を剝いで柳沢家へ送りつけたのが問題になり、やむなく懇意な老中阿部豊後守が小石川の水戸屋敷へきて、隠居願いを出されるのが水戸二十五万石を安泰におく途である、と申し上げたところ、光圀公は当家は代々中納言の官位にまで昇進し、唐名でいう『黄門』となって隠居するのが、父頼房の時からの定めであると拒まれた。それゆえ幕閣では、すぐさま中納言に昇格させて隠居なされるよう願ったのである」

とあるが、水戸家の臣だった者が書いたものゆえ話に誇張がある。幕閣に睨まれ続けていた光圀は、世にあるときは無官で、隠居しても、「黄門」とよばれる中納言にはなれず、死ぬまでその下位の、権中納言でしかなかったのが本当のところである。

さて、どうして、そこまで光圀が、ときの徳川幕閣から嫌われていたかといえば、

「わしは神君家康公の孫である。自分でいうは可笑しいが、いっぱしに役立つ者である。なのに台徳院（二代秀忠）さま以降は、春日局が擁した吃りの三代さま、そのお子の出来の悪い四代さま……ずんと、この光圀の方が出来がよいとは思わぬか」と、平然といい放ってやまぬ放胆ぶり。これでは、いくら御三家の身分でも睨まれぬ方が不思議なくらい。

さて四代将軍家綱に子種がなく、誰を五代将軍に立てるかとなった際、

「いっそ京から、ご総明の世評も高い有栖川幸仁親王さまを、お迎えして五代さまに立て、この

光圀が徳川家を代表して、天下の副将軍となって補佐しよう」と、大老酒井雅楽頭と組んだのである。――これは三田村鳶魚も、その著で詳しく考証している。

しかし春日局の孫の堀田正俊や稲葉正則らが、これに真向うから対立して、

「五代さまには、家光公の御血脈を」と、四代家綱の弟に当る綱吉を立てたから破れ去った。

「下馬将軍」とまでうたわれた酒井も、この為に追われて堀田正俊が大老職となった。

光圀ももちろん睨まれたが、そこはなんといっても家康の孫ゆえ、将軍綱吉も手がつけられず放っておかれた。しかし今でいうなら光圀は反体制の立場をとった。

「生類憐れみの令」を綱吉が出して、捕えられぬように野良犬まで中野の犬屋敷へ収容しているというのに、光圀はまだ血のついた皮二十枚を、

「水戸では、悪いことをする犬は捕え、ご禁制であれ皮はぎもして居る」と、綱吉の側用人柳沢の神田橋御門の屋敷へ送りつけたりした。こうなると挑戦である。

「水戸どのは、京より親王を迎え自分が、天下の副将軍になると号していなされたが、これでは、ご自身が将軍家の御座を狙っていなさるのではないか」と大騒ぎになった。

それゆえ老中阿部豊後守らが、

「これでは水戸、尾張、紀伊のご三家を、神君家康公が残されたのが無意味になる」

と案じて、よってたかって光圀を無理に隠居させてしまったのだが、当人は、まだ元気旺盛。

「わしは江戸を離れんぞ、この小石川屋敷から一歩も動きはせぬ」といいはって、頑として居坐ってしまって動かない。だから幕閣では持て余した。

「阿部どの、おてまえが仲介の労をとって、水戸の御老公から隠居願いを出させ、権中納言の官位を授けたのに、一向にそのままで領国へ戻らぬのでは困るではありませぬか」

柳沢吉保からせっつかれた阿部豊後守は、当人の光圀に話しても埒があかぬと考え、

「お首に縄をひっかけてでも常陸にまでお連れなさるがよい。さもなくば高松のご老公の兄上より養子にとられた綱条どのの、跡目相続の儀も取り消しになるやも知れぬで……」

水戸屋敷より江戸勤めの重臣どもを呼びつけて脅かした。老中は自分に振り掛ってくる火の粉を恐れたからである。そこで水戸の家老たちも困ってしまい、

「もはやお跡目譲りをなされました後ゆえ、なにとぞ、ひとつお国許へお戻りなされて下さりましょう」と、江戸で越年させてはまずいと、十二月十日に無理やり駕籠へのせた。

しかし光圀にすれば面白かろう筈はない。それゆえ三味線堀から小塚原を抜けると、

「この寒空にあれなる蜆売りの子供をみい。しもやけで丸まっちくした手の甲を、かじかませ口で温めているのは不憫ではないか。あれなる商いの荷物をみな買うてとらせい」

大川橋を渡って河原町へでた駕籠の中から脇の供侍にいいつけた。

まさか道中で蜆貝を籠ごと求めても、味噌汁もつくれないから、供侍は銭だけを与えて済ませたが、千住大橋へもう一歩の、掃部宿町までくると、今度は道中姿の娘をみつけ、

「……何処まで行くのか聞いてつかわせ」と、また駕籠の中から命じてきた。

「はぁッ」と駈けだしていった供侍が、

「……取手まで参る由にございます」と戻ってきて報告したところ、

「松戸には下総と武蔵の境目ゆえ舟番所がある。娘の一人旅では何かとうるさく難儀をするであろう。この行列に加えてつかわせ」光圀は事もなげにいったが、供頭の者は、

「恐れながら、ご道中の人数は定まって居りますれば、町家の娘などさし加えるわけには参りませぬ」と色をなして諫言した。

「そうか、ならば小柄な娘じゃ、この中へ入れてやることにせい」といいだした。

「えッ、お駕籠の中へでございまするか？」

「如何にも……ならば人目にもふれず、数改めには員数の内にも入らないであろうが」

光圀はにこにこしていうのだが、駕籠の中は手狭である。だから伴ってはきたが、娘をどういう具合に乗せようかと迷うと、駕籠をとめた光圀は遠慮する娘へ、

「よい、よい、抱きかかえてとらせる……茶臼……という恰好じゃな」といった。

駕籠の戸を開けっ放しのままで、大声でいったものだから、それが行列に拡がり、

「……ご老公にはお気に入れられた娘を、駕籠の中へ入れられ、その中で茶臼をなされて居られるげな」と秘かに噂された。

もちろん娘は何事もなく取手の宿場でおろしてやり、そこから水戸街道を府中へでて分家の松平播磨守の城に一泊。翌日、早立ちして八里の道のりをまっすぐに水戸城へ入った。

光圀にしてみれば、いやいや国許へ引きこもらせられる道中である。

だから、これで常陸領へ入ってしまえば、生涯そこから出られず、この水戸街道を二度と通ることも公儀から許されまい、と思う心残りから、まるで子供が駄々をこねるように、あれこれ指図したにすぎない。

しかし蜆貝を買わせたのは、仁慈のお心であると取り沙汰されたが、娘の方はまずかった。

「あれでは御老中に睨まれる筈じゃ。老いて、ますます御盛んな事である」

「狭苦しい駕籠の中では、茶臼しか致しようがないかも知れぬが、それにしても、揺れる中でまでまた揺さぶられるとは豪気なことよ」やっかみ半分の者たちに蔭口を叩かれた。

それゆえ戻るとすっかり城中では大評判になった。その結果が、

「ご老公におかせられては、どうも若い女ごがお好みのようであらせられる……」

となって、よくいえば無聊を慰めるため、光圀の反骨ぶりを恐れた城内の重役共が、しかるべく人選をし、まず潜りこませてきたのが、夜這いにきた八重ということになるらしい。

しかし思惑がはずれ、八重は湯たんぽ代わりに脚を温めるだけで戻されてしまったのである。

当人の八重が恥じ入って自害をとげてしまったため、ますます事態は難かしくなってきた。それゆえ重役どもは泡をくってすぐさま評議をひらき、それぞれ、おのれの身にひき比べ、

「……若い者であるならば脇へ娘が忍びこんでくれば、据膳くわぬは男の恥と何してしまうところであるがのう……」とか、

「ご老公は茶臼好みゆえ、ああした肉の多い豊満なのは御趣味ではなかったのか？」

などと当惑しきって、額を集め相談した。すると中には、

「道中にてお好みの娘を見つけられ、取手の宿場まで駕籠の中で相い擁して来られたげな。それなる娘を見つけてきて差し出せば、御機嫌がうるわしゅうなられよう」

と口にする者も居た。なにしろ戻ってきた光圀の存在は頭痛の種であって、

「恐らく江戸家老たちは、ご老公を此方へ送りつけ、今頃は、ほっとして居ようが、吾らにすれば虎が野に放たれたも同じこと」

「世上の噂のごとく将軍家に取って替わられようと、ご謀叛など企てられたら、臣として従わぬ訳にはゆかぬし、といって巧くゆかずば自分らの命はもとより罪もない妻子へも禍が及ぶは目にみえたこと……こりゃ御老公の、かっかと逆上されているのを下からうまく放出して頂くしか

途はないかも知れぬな」

日頃は気難かしやで知られている重臣までが、切羽詰ったように苦笑して口にする有様。

「しかし取手の宿というのは、牛久一万七千石の山口筑前守の所領に接する公儀天領。そこへ娘探しに参るは如何と存じ申す。よって、この際、水戸二十五万石の御城下の娘の中より、その取手の娘によく似たのを見つけ出すしか、他に方法とてありますまい」

「左様か、選抜をするのであるか。よし、それに決め、すぐ手配するよう」

城代家老筆頭大瀬九郎太の鶴の一声で、今でいうならミス水戸の選抜コンテストが、直ちに催される事となった。

そこで各組頭や物頭の面々は、その組下の者らが住まっている当時の、官舎である御長屋へ使いを出し、娘たちを、

「十五歳より十八歳まで」と限って集めた。

しかし、その頃のことゆえ水着ひとつ、といった訳にはゆかぬから、まず容姿とか礼儀作法といった点でふるいにかけた。

そして水戸街道でお駕籠脇に随行し、取手で降ろした娘をよく見て居る供侍が、審査の吟味係に立ち会い役となって、最終選考には加わることと決まった。

皇室御料三萬石

「いずれが菖蒲か燕子花と、ご重役衆が申されて、其方と御弓組木股四郎太夫どのの娘ごとの両名が、選ばれ残ったそうであるが、まことに目出たいことではないか……」

戻ってきた父の与四郎にいわれ、好江は手をつき、

「……はあッ」とは頭を下げたが、それでもかしこまって、

「して何御用を致すのでござりましょう?」不安げに父の顔を仰ぎみて尋ねた。

「うん、何と聴かれてもわしには判らんが、忠義を尽せばよろしいのであろう」

「……忠義とは何をするのでしょうか?」

「代々に渡ってお扶持を頂いて居るゆえ、男は御主君の馬前にて屍をさらすをもって、忠義をするが、女ごの場合は、さて命がけで何を致すのであろうか……」

問い詰められて弱らされ、与四郎も首を傾げているところへ、

「……ご当家娘ご好江どのには、手廻りの品を持って、すぐさま三の丸の姉小路の局さま御部屋へ移られるよう」と使いがきた。そこで晴れの選抜に残された二名の中から、自分だけが先にお呼び出しが掛るとは、おおいに名誉であると歓んだはよいが、

「お城の姉小路さまの許へ……」と好江は心配そうに顔をくもらせた。が、与四郎は、
「お局さまは、御世子綱条さまの許へ興入れされた今出川右大臣家の姫君に付き添われ、京から下ってみえた堂上公卿の出で、人一倍何かにつけておやかましい方……くれぐれもよく気をつけどういう具合に忠義を致すか御仕込みをうけるがよかろう」と、娘の身を案じはしたが、さだめし茶湯や和歌でも教授されるのであろうと考え、おおいに励まして送りだした。
しかし好江が三の丸へ行くと、そこには一緒に残された御弓組木股の娘の、格という十六歳の娘も呼ばれてもう来ていた。それゆえ好江は、ほっとして、
「……一人では心細くて困ると内心、案じて参りましたが本当にほっと致しました」
声をかけたところ、格も嬉しそうに、よりそってきて、
「私も嬉しゅうございます。一緒に仲良うお勉強を致しましょう」と息をはずませた。
しかし姉小路の局は、きっとした頬をみせ、
「さあ二人とも早うに此方へ来なされえ」
廊下で話し合っている二人を、忙しそうに居間へ呼びこませると、きっとして、
「事は急を要しまするによって、相当にきつい想いをして貰います。よお覚悟しや」
まず初めに言い渡した。そして、ますます怖い顔をして、
「手習いは草紙から始めまするぞ」違い棚からおろさせた文筥を開けた。

二人は、手習いとか草紙というので、てっきり習字でもやらされるものと想い、
「筆をおろしまするのか……」と、持ってきた荷物を二人はそれぞれ開けようとした。
すると姉小路の局は妙な顔をして、十六歳と十七歳の若い二人へ、
「……筆おろしとは、これまで未体験の男子が生れて始めて、事に及ぶことをいいまするが、あの御方さまはとって六十三歳、まさか筆おろしということはありますまい」
能面のように濃く白塗りした顔を、可笑しそうに袖で隠してしまった。そこで、
「……飛んだ不調法を」何の意味か判らぬままに二人は揃って顔を下げた。
すると姉小路の局は、さすがに堪りかねたごとく含み笑いをしつつ、
「そもじら二人が腕によりをかけ、切れ上った小股の締めつける力にて、御方の筆おろしならぬ筆納めするよう、これから仕込みまするのじゃ」いって聞かせた。しかし二人は、これまで、(小股が切れ上ったよい女……)といった言葉を聞いたことはあったが、それは腰がだらりと下がっていない容姿の形容かと思っていたので、互いに顔を見合せあった。
「……小股で締めつけまするとは?」
若い格が、思いきったように質問をした。すると姉小路の局は己の膝を叩き、
「大股とはここじゃが、小股とはそのまん中……つまり此処ではないか」
己の裾の合せ目を指さしてみせた。そこで好江は頬を赤らめつつも、

「……切れ上って居りまする、とは……」

なんでも判らぬことは聞くようにと、初めに云われていたせいか、すぐまた尋ねた。

「京では、上わつけと優しゅうにいうが、関東では言葉が乱暴ゆえ、切れ上っているなどと申すがほれ、ここの口のことぞ」と、古代錦のはられた表紙をめくり、白く塗られた女体の下方にある赤い唇みたいな個所を指さしながら熱っぽい口調で教えた。

しかし二人は、生れて初めて、まじまじと見せつけられた異様な絵にびっくり仰天。

姉小路の言葉など耳に入っても聴くどころではなく、口中までからからにして、

「ひえーッ」と悲鳴をあげてしまった。が、十六歳の格の方はそれでも元気よく、

「なんで女ごのおしもへ……こないな味噌こねの擂り粉木みたいなものが突きこまれて居りまするのか？」素直に疑問をだした。すると姉小路は、にこにこうなづき、

「まことに当を得た質問です。核心にふれた問題です。しかし、この絵でみせていますものは結果であって、こうなるようにせねばならぬのです」と厳しくいった。

だから好江も、この擂り粉木の棒が、（……忠義というもの）かとも考えこんでしまった。

なにしろ父の与四郎が送り出すとき、しみじみと洩らした言葉、

「忠義を立てるよう……」といってくれたのを思い出して棒のように立っている絵をみて、

（……これが、てっきり立てるものらしい）と、まだ性教育など学校でもしなかった頃ゆえ、好

江が思いこんだのも無理はない。しかし姉小路の局はそれに対して、

「そもじらと同じ年恰好の男であれば、なんでもない時でも無用に張り切って居るそうなが……お相手は六十三歳の御方さまゆえ、決してこう佇立してはいなさるまい。よって、まず、こうなるような手妻使いから教えまする」と難かしい顔をしていってのけた。

だから気を呑まれてしまったように、二人は息をはずませて、

「手妻を使うとは……奇術でもやるのでございますか？」若い格がまた質問した。

「手妻を用いるとは手品の事ではない。文字でかくと、手の妻と書くのである。まだ妻女を持たぬ一人者がその手の五本の指をもって、それに代えることを申すのじゃ」

「えッ、では掌が殿方の妻女の代用になり、炊事洗たくなど一切を致しまするのか」

「そりゃ手さえあれば煮たきも洗い物も、男でもやれまする。が、手妻はその指の股を、女ごの小股に代えてしごきますのじゃ」と、なんとか判らせようとし姉小路は、しきりに己が掌で筒まで作って、しごくような真似までしてみせるのだが、格は自分も、

「……こないしまするのか」と同じように、掌を丸めてみたが、さて意味が判らぬから、

「覗き眼鏡にございまするのか」と眼のところへ当てがってしまうような有様だった。

さて、その日の夕方。

「……なんじゃ、其方ら両名は？どうして、わしのところへきたのか――」

緊張しきった面持の若い娘二人が伴って来られたのに、光圀は顎先に蓄えた髯先をしごきつつ、怪訝そうな眼差しを向けた。しかし娘達の背後から姉小路の局が、

「これなる者らは御老公のお身の廻りをと、家中四百有余の娘どもの中から、選び出しましたるよき乙女らにござります」代って光圀へ恭しく挨拶をした。

「左様であるか……」とは答えたが、水戸へ戻されたばかりで雄心勃々たる光圀のことゆえ、

（如何にして捲き返しをなし、将軍綱吉やその側近らへ、眼にものみせてくれようか）

と、そればかりに、かっかとしていた。せっかく好江や格が念入りに化粧をされてきたのへも、眼もくれぬ有様だった。そこで姉小路も、これは大変だと思った。そこで、

「よいか、忠義を尽すとは命がけのことぞ。其方ら両名は、御老公の錨のごとくなって、お取り鎮めをなすが奉公と考え、この身が教えてつかわした手妻の術や、立笛吹きの秘法をもって一命にかえても頑張るのじゃえ」二人を用部屋へつれてゆくと訓戒して、

「……下世話にも申すように、御老公を恋の虜にしてしまうのじゃ」ともつけ加えた。

そして、もしもの時の小道具にと、古代錦の表紙をつけた草紙も置いてゆき、

「御老公とても殿方ゆえ、こうした極彩色の絵巻物を、御退屈しのぎにお目にかければ、きっと、そちらのいずれかにお手をつけられるであろう」とも勇気づけて戻っていった。

しかし残された二人は復習のつもりで、その極彩色の絵草紙をめくって覗いてみたが、初めて見せられた時みたいな妖しい昂奮などもうしなかった。ただ吐息と溜息まじりで、

「……もし、こない絵のように首尾よくゆかず、忠義が出来なかったら……」

「いくらおすすめしても、女ごの道具を使って頂けなかったら、生きては戻れませぬな」

じんとしてしまい、互いに悲壮なうめきを洩らしあっていた。

そして、格のごときは父親に言い付かってきたのか、半泣きの顔になって、

「壮士ひとたび易水を渡る死すとも還らず」低い声だが詩を吟じるように唸り、

「もしも私は貴女に先を越されたり、お手が付かぬような羽目になった際は、家名を守るために、これなる懐剣にて咽喉をかき切ります所存」と、胸に手を当てて宣言した。

「私は父よりは何も云いつかって参りませなんだが、かくなる上は女の意地……もしも、貴女に敗けをとった節は、女ながらも脇差にて腹を切ってお目にかけます」

そこで好江も負けて居られず、つい対抗上すらすら口にしてしまった。が、泣いていた。

さて、その頃。

武蔵忍十万石の老中阿部豊後守正武は、江戸城御用控えの間で、柳沢吉保から、

「水戸の老公は間違いなく城中に居るであろうのう……と、上様よりの御言葉ですぞ」

呼び出され、きびしい表情で問い詰められていた。

「間違いなく水戸へ戻って三の丸に居りまするが……して、また何故に」聞き返すと、
「新年早々、年賀の勅使として、あの中院通茂卿が下向するのですよ……」
まだ三十歳の柳沢は、年長の老中へ耳打ちするように低く教えてから、
「そのために水戸の老公を隠居させ、年内に国許へ追い返したのではありませぬか」
「そうでしたか、中院卿がしっこくも江戸まで出てくるのでござるか」
絵解きするように微笑を浮かべてみせたのへ、阿部豊後守は眼を丸くして驚いた。
というのは、この元禄三年より四十六年前の寛永十一年、三代将軍家光が上洛した際、ときの後水尾帝に拝謁の折り、伝奏の中院通村とその孫の通茂だけが立ち会った。
そのとき帝より、帝室の御料高が小名なみなので、せめて山城一国をと御所望された。
それに対し家光はそこで承諾した。しかし当時の山城は、長岡二万石を永井直清、淀の十万石は永井尚政、伏見や三牧の九万三千石は徳川直領と三分されていた。
それに徳川家の方針として山城一国二十一万三千石を、皇室御用に出す筈はなかった。
それゆえ、この時から御所と徳川家の間は気まずくなった。その前年に亡った前将軍秀忠が、三年目、五年目に上洛するため沿道の各大名に、行列宿舎の普請の命令まで出していたのだが、それもこの為に、
「今後一切無用のこと……」と中止された。家光も元和九年に秀忠に伴われて上洛し、

「将軍宣下」は御所で挙式し、その後、寛永三年にも上洛し天機奉伺に参内していたが、うっかり返答してしまった為に、もう生涯、二度と上洛することはなかった。

だから、その子の家綱が四代将軍に就任する際も、これまでのように、「征夷大将軍となるのには、御所で節刀を賜わり任ぜられる」とする従来の慣習を破り、上洛せず千代田城で済ませる結果となった。

これが、のち十四代家茂のときまで続き、将軍家上洛は幕末まで途絶えた原因である。

――さて今日では想像もつかぬ事だが、皇室御料はどのくらいだったかといえば、

「足利時代には三千石だったが秀吉が勤皇の志篤く七千石に増したのを、家康公が壱万石にまでした後、二代将軍秀忠の娘の和子が中宮として御所へ入った際、化粧料として壱万石の持参金をもっていった。そして家光が三代将軍の宣下をした時、また壱万石を進上、しめて三万石であった」と、『禁裏御料沿革記』にはでているのである。

徳川家が三百万石で加賀の前田あたりでも百万石なのに比較すると、皇室御料地三万石は余りにも僅かで、そのため禁中に仕える公家百官も生活に窮し切っていた。

光圀が、有栖川幸仁親王を迎えて五代将軍にし自分が天下の副将軍を、と志したのも、山城一国の違約問題の解決策だったようである。もちろん御所でも、せっかく家光が確答したのゆえ、せめて山城半国の十万石でもと、先代の中院通村の在世中は何度も彼が、

「生き証人」として江戸へ掛け合ってきた。しかし五代将軍綱吉の代になると、もはやその話はなかった事にせんと強硬策をとった。そこで当時、接待役の稚児として席にいた通村の孫の通茂が、元禄四年の勅使として下向してくるというのだから、

（又しても掛け合いの蒸し返しであろう。となると水戸の老公が一枚かんでは厄介ゆえ）と、内密に京所司代より知らせが入り光圀は隠居させられ、年内に水戸へと追い出されたのであるが、

「……水戸光圀は間違いなく水戸城へ閉じこめてあるのだろうか」と、それでも幕閣ではまだ心配し、柳沢から阿部豊後守への諮問となったのである。

「……では念のために黒鍬組の者を、見張りかたがた警戒に飛ばせてみましょう」

それゆえ豊後守も、大事をとって、御側御用人柳沢の同意を得ると、甲賀町に組屋敷をもつ江州和田部屋より、しかるべき者を水戸城内へ潜入させるようにした。

「やや……こりゃ凄い」天井の梁木へぴったり貼りついたまま、羽目板をすこしずらして見降ろしていた弥平は、堪まりかねたように思わず声を洩らした。

そこで同じ黒鍬者として潜入してきていた八太郎が、眉をひそめあわてて腰を突いた。

が、弥平はそれでも、

「まあ覗いてみるがよい……」低いが乾いた声でいった。そこで八太郎も、脇差の鐺に付けた薄

刃の先で羽目板の端をこじ開けた。が、その途端、

「うむ、こりゃあ驚いた……」つい八太郎も唸り声をあげてしまった。

そして食い入るように眼下の光圀の寝所を見下し、己れの方が喘ぎの声をあげ、

「……あれが鶯の谷渡りというのかな」弥平も咽喉をならしながら、せつなそうな響きでうめいてしまった。そして、

「水戸光圀といえば吾らが父親なみの齢の筈じゃが……食う物が違うていなさるのか、両側へ若い娘を抱えこんで……元気な事よ」と、やっかみ半分みたいな口をきいた。

二人は老中阿部豊後守の命令で、敢死の者をと甲賀黒鍬から選ばれ送りこまれて来たのである。だから光圀がてっきり家来共を集め、何かよからぬ相談ばかりしているものと考え、

(その現場を……この眼で、しかとあい確かめてみよう)

と危険をおかして、光圀の寝所の上まで天井の棟木伝いに、秘かに忍びこんできたのである。

それなのに来てみれば予期してきたのと、まったく違った光景に唖然としてしまい、

「てっきり一味の者と夜も密かに評議でも、しているものと思ってきたが、これでは呆れて物もいえんではないか……」と、めんくらわされた。

「まったくだ……といって、まさか若い女ごを二人まで寝所へひき入れ、天井から覗かれているとは知らず、痴態の限りを尽して居なされた……とは、取って返して報告もできない。当分の間

は屋根裏に閉じ籠って、真相を見きわめるまで時たま見降して監視を続けるしかあるまい」

「うん、しかし飛んだものを見てしまった、これでは膝小僧を抱いて寝られるかどうか、まったく罪なことをなさる御老公だ……」と、八太郎と弥平はいまいましそうに唸った。

そして舌打ちしながらまた梁を伝わって、安全な物置の方へと引き返して行った。

しかし水戸光圀は、天井の羽目板をずらして覗きこまれていたのを知っていたらしい。

耳を澄まして微かな気配を追っていたが、やがて、ふうっと一と息。

「……もうよい、ご苦労であった」と、格と好江にいってのけてから、

「明かるくなるまで待っては隙間風で吹き飛んでしまうかも知れぬ……今の内に紙燭をもって畳の上に落ちている煤の痕を見つけい」と命じた。

そこで二人は、もう一息のところで止めいと水をさされ、それまでの努力が徒労になってしまった感じでがっくりきていたものの、藪から棒に、妙な指図をされたからして、

「……すす？」と互いにきょとんとして、聞き返した。すると、

「如何にもそうじゃ、よく見渡せば天井板の裏の煤が、さだめし畳の何処かに落ちていよう。その位置をつきとめて、天井のどの辺りかを確かめておくように致せ」

光圀はゆっくり二人の娘にいい聞かせた。

「……はい」と、そこで腹這って探し始めるのへ、

「畳の目にしみこんで居るやも知れぬ。よってそなたらが持ってきて使わぬ儘になっている懐紙で、隅から押さえるようにしてゆけば、白い紙ゆえ汚れが付く個所はすぐ見つけられようぞ」

とも、つけたして教えた。しかし光圀としては、天井の羽目板の何処を外して覗きこまれたにしろ、そこを厳重に釘づけにさせる気でもなかった。

「ただ一応の用心までじゃ……判り難ければ止めにしてもよいぞ」と、いたわるようにも、蚤取り眼の二人の娘へ優しくいった。そして、くるりと背を向けて寝息をたててしまった。

（どやつの指図で、わしの動静など探りに来ているのか？　城代家老筆頭大瀬九郎太のさし金でもあろうか……さもなくば娘らを伴ってきた姉小路とか申す女めの企てし事か）

寝ながら考えた光圀は、翌朝、

「誰か……」と近習を呼ぼうとした。が、枕許の鈴をふると昨夜の二人の娘が、

「……お呼びにござりまするのか」それぞれ懐紙をもって左右の襖を開けた。

これには光圀も笑ってしまった。が、顔を崩しっ放しにもして置れぬので、

「……男を呼ぶのじゃ」と、いかめしい声でたしなめた。すると二人の娘は怨めしそうに、

「男の方が、およろしいと云うのは……」

「では、殿には衆道の方がお好みで……」

左右から詰め寄るようによってきた。弱った光圀も二人の娘を交互にみて、

「其方らは耳年増じゃな、そないな事まで知っているのか」すっかり感心した。そして、
（江戸上屋敷で長年手許へおいて召し使ってきた近習は、一人残らず向こうへ残されてしまい、供して水戸へ来て居る者は誰もいない有様。よって呼んだところで、来るのは国許の見知らぬ若者であろう……）と考えた。
だからして光圀は、いくら家中の若侍とはいえ気心も知れぬ者を使うよりは、いっそ献身的な二人の娘をと思い直したものか、
「其方らは娘姿をやめにして、まずその頭から男髪に結い直せるか」と声をかけた。
「殿が女ごより男形の方がお好みであるならば……そのように致しまする。これまでも幼少のみぎりより父より小太刀をも習って居りますゆえ、身辺のご警護も仕まれまする」
格が直ちに、凛々しくそれに答えた。そこで好江も、
「てまえも及ばぬながら、やはり父与四郎より木刀の素振ぐらいは教わって居りまする」
その後に続けて返事をしたが、年下の格に劣らぬだけの自信はあったからである。
「よし、では其方らをわしの小姓なみの近習にして、本日より召しつかってやろう」
けなげな両名に光圀も慈愛の眼を向けた。
が、命ぜられた両名は髪をきって若衆髷に変えねばならぬし、男姿になるのでは、まさか深紅の長繻袢など着ては居られない。

そこで男物の衣服と一切を取り替えねばならぬので、夕刻までそれに掛りきった。

姉小路の局も秘かに用部屋まで来て、

「ずっと江戸屋敷にばかり居られたので、まさか男色好みであらせられるとは存ぜなんだが、其方ら両名を斥けられることなく、その儘で用いられんとするは、さだめし両名の誠心誠意が認められたからであろう」と、おおいに励ましをいった。そして、

「ししの個所でなく、ばばの処で奉公するのも、忠義に変わりはない、確かりしや」

と口にしたところ、十六歳の格は、

「じじばば……と仰せあるは、そない男の身なりになり、年ふけて見えまするので――」

厚化粧を落したのに自信を失ったのか、情けない声を出した。そこで姉小路は、これでは心許ないと思ったのであろう。持たせてよこした古代錦の絵巻物などを一切集めさせてしまい、

「衆道の絵手本までは取り揃えて居らぬが、教えこんできた通りで、なんせ場所が小指の幅までない近間のことゆえ、まあ同じようなものじゃ」改めていって聞かせた。しかし、

「……女ごの道具はいつでも迎え入れやすいように濡りがありまするが、ばば口は出すだけで入れ所ではないゆえ、そういう事はないもの。よって男髷の内側にびん付け油の塊りを、いつも塗りつけておき、御用い遊ばされんとする節には、すばやくそこへなすりつけるよう心得ませい」

それでもやはり心配なのか、しきりと注意した。

「なんじゃ……初めて覗きにきた晩は、若い女ごを両脇に抱えこんで鴛の谷渡り。さてそれが近頃では、上野の蔭間茶屋あたりから連れこんできたような色若衆を、夜ごとはべらせての狒々親爺ぶりには呆れたものだ」

「まったくだ。こうやって去年の暮から寒中の屋根裏住まいの此方にとっては、まったく目の毒というもの……せめて一晩ぐらいは、吾らとてもあやかってみたいものである」

弥平と八太郎がぶつぶついいながら、そっと身を匿していた物置から、いつもの天井板を動かして身軽によじ登った。

そして棟木を二人で四つ這いになって進みつつ、

「われら黒鍬組の者にとって、物置と老公の寝所の天井まで往復しての見張りは、楽すぎるぐらいの仕事だが……なんぞ確証を握って戻れとの御命令、これでは年は明けたが何時まで続くことか判らんなあ……」

「うん、まったくだ。いつ迄も梁上の君子で覗いてばかり居ては始まらんな」

いくら隠密を任務とする黒鍬組の者でも、正月を迎えては里心がついてきていた。

「よしッ、今夜は思い切って下へ降り、老公の寝息を窺って、手文庫の中や違い棚の戸袋の中を調べてみよう。すれば何ぞ土産として持って帰れる証拠も見つかろうやも知れぬ。思い切ってやってみるか……」となったのである。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず……というではないか。何か入手できれば、松はとれても戻ればまだ、お長屋で餅など祝えようというもの」

張りきった二人は、いつもの天井裏へ出ると、すぐ動くようになっている羽目板のところまで這ってゆき、やがて灯が消え寝鎮まった頃を見計い、

「よし、今だぞ……」と、音をさせぬように静かにそっと外した。

そして両足をひっこめ縮め身体を丸くして、音をさせぬように次々と飛び降りた。

が、まさか、最初の晩、下へうっかり落した羽目板裏の煤から見当がつけられ、畳表へいぼた蠟が塗りこめられてある……とは知らなかった。だから爪先に力をいれて伸ばし、しゃっきり立とうとしたところ、

「……あっ」と足が滑って転げてしまった。それも八太郎だけでなく弥平までが、

「しまった……」と、ずってんどうと音をさせ転げたのだから、二人は周章狼狽した。

なにしろ黒鍬組の者は幼少から、猫が高所から落ちても一回転して立つように、厳しく訓練をされてきている。だから高が天井から飛び降りて、畳の上でひっくり返るような醜態を、しでか

したのに自分らの方で泡をくった。

なのに、何処へ落ちたのか暗がりでもまるで見通しがきくように、いきなりむんずと組みついて来られたのにも面喰らわされた。しかし、こういうとき黒鍬組の者は、

（相手の急所をつかんで引っ張り、向こうを気絶させてから危機を脱する）ことになっている。

「……おのれッ」と、ばかりそこで組みつかれながら弥平も八太郎も手を延ばした。

そして取っ組み合いながら、互に相手の急所を手でまさぐった。

が、いくら股倉へ手をやり探し求めても、どうしても摑めるものがないのである。

「こんな筈はない……」「何処へ行ったのか、瑠璃玉」と、睾丸を探して握りしめようと焦って何度も手をさしこんでも空振りならぬ空摑み。

仕方がないので下腹にそって手を突きこめば、これが前門の狼、後門の虎というところか。

前の方もぬらりとして手が滑りこめば、がきっと食いつかれそうな締めつけられ方だが……後の方も、びんつけ油みたいな感触で、やはり滑りこんだ手の先を括約筋でぐいっと締めあげられる。だから悪戯をして蟹に手を挟まれた子供のように、黒鍬組の両名は、

「……助けて下されえ」とうとう切羽詰まってしまって声を張り上げた。

すると自分で火打石を叩き、紙燭をともして手に持った水戸光圀が、暗がりから浮き出るように姿を現わした。そして、

「其方らは城内の者かと思っていたが、今の悲鳴は江戸弁で、常陸訛りではないな」

佩刀を片手に、いかめしく詰問をしてきた。

さて、明るくなってみると若衆姿ゆえ、てっきり男と想っていたのがそうでなく、覗きこんでみると女体の前尻と後尻に両手をさし入れ、それが不動の金絞りのごとく固く締めつけられ、押さえこまれている己れらの醜態に、二人ともすっかり赤面していたので、

「……はあッ」と黒鍬組の者にはあるまじき態度だが仕方なく、素直に頭を下げてしまった。

「そうか。なかなか神妙であるな。さては汝らは柳沢吉保の手の者で、甲州の武川党の流れでもくむ者らであるか？」

と光閃は、武田信玄や勝頼の頃に、乱波として有名だった甲州武川の名をだした。しかし両名は、それには首をふった。そこで水戸光閃は白髯をしごきつつ、

「……では公儀隠密、黒鍬組の者らか？」まさかと云いたげな口調で尋ねかけた。

「面目次第もござりませぬ……」もう成敗されるのは覚悟の上だが、自分らの不手際を深く恥じて弥平が自嘲するごとくに、うなだれて低くそれに答えた。

「左様か……しかし柳沢からの廻し者であれば、武川党を使うわけなのに、老中直轄の黒鍬組とはちいと解せぬのう？」これには光閃もすこし首を傾けた。すると、

「……もう緩めてもよろしゅうございまするか……如何におじやります」

格はそれを合図と見誤ったのか満身の力をこめて締めつけていた股ぐらの力を前後とも抜いたもう精も根もつきはてていた好江も、それに釣られるように、

「わたくしめも……」と、やはり締めつけていた双方の門をゆるめた。

姉小路の局に受けた特訓通りに、精一杯気張って締め上げてはいたものの、両方では大変なので、さすがに前門も後門にも限度がきてしまっていたのである。

だから体力を使いはたして消耗した格と好江は、肩で荒々しく息をしていたが、やっと解放された二人の黒鍬組の男らも、その手を鼻の近くへ持ってゆくと、いまいましげに、

「かれこれ二十日あまりも禁欲して居ります者にとって、どうもこの匂いは……」

異口同音に怨めしそうに口にした。そこで水戸光圀もうなづき、

「女ごの裾風が、ぷんぷんよく匂うな」寝間着の袖で辺りを払うようにしつつ、

「どうじゃ、黒鍬組の者としては死しても、使命のことは口を割らぬがその立前であろうが、神君家康公の孫に当るこのわしへ悉皆、本当のことを打ち明けてくれぬか」

まだ放心状態の二人へ、やさしくいい、そして、

「取引きじゃ……もし本当の事を洗いざらいに口外してくれるのなら、手文庫の中から、わしが立ち会って何か盗ませてやる。すりゃ汝らは御役を無事にはたした事になり、今からでもすぐ江戸表へ戻れよう。すりゃ、そこで鰻の蒲焼の匂いを嗅ぐように、指についた女の香りで悶々とし

て居らんでも、妻女の側に戻れすぐにも用がたせようが……」

判りやすく云って聞かせた。だから八太郎が、それに合点してみせ、

「……実は、御老中阿部豊後守さまよりの、御命令が甲賀組の和田長屋へ参りましたので……」

もうこうなっては仕方がないと、洗いざらいにみなぶちまけてしまった。

「なに……」これには温厚な表情をひっこめて、光圀もきっとなった。

なにしろ三十年の長い付き合いの仲である。今回の無理やりの隠居願いの提出も、

「悪いようにはせぬ、わしに委せなされ」と口説かれてやむなく承服したのである。

それゆえ、その阿部豊後守の指図で公儀黒鍬組が、水戸城内までずっと潜入し己れを狙っていたと聞かされては、裏切られたような肚立たしさを覚えたのである。

「わしは城内を引き払う。太田の梅林に、梅見の小亭でもたてさせ、彼処へ移るぞ」

いきなり光圀から呼び出されて、頭ごなしに命ぜられた大瀬九郎太は忠義顔をし、

「彼処は手狭でございまするが……」内心では、ほっとしたけれど諫言した。しかし光圀は、

「今からすぐ移れば、梅の花に間に合おうが……散ってから行ったのでは意味がないぞ」

一旦こうと云いだしたら誰が、何んといってもきかぬ性分ゆえ首をふった。

「でも、お仕度が……」

「何を申す、光圀はどうせ世を棄てさせられた隠居の身、太田へ移ったら何でもやるつもりじゃから、なんの仕度など要るものか、構わぬ、棄ておけ」

顎髯の尖端をひっぱりつつ云ってのけた。そこで、ほくほくした大瀬九郎太は、

「かしこまって……」と一礼して退出。すぐさま姉小路の局を呼び出すと、

「おことの名案が見事に的を射ったぞ……いくら道中で茶臼までなされた色好みの隠居でも、敢死の覚悟で御側へ奉公された若い女で二人の体当りには、ほとほと手を焼かれて、都落ちならぬ城落ちを云い出されたぞ」と、手放しの喜びようでにこにこしてみせた。

「それではこの先、何者を御側へつけなされます……御老公には女色よりも男色の方が、御嗜好に当って居られますゆえ、すぐさま容姿端麗な若衆を選抜しませぬと……」

「いや、もうよい……城内に居なされて、血気な若侍共でも集められ扇動なされては、水戸二十五万石（のち二十八万石）の御家の大事であるが、太田の梅見小屋へ移られ百姓仕事でもなさろう、と云うのではそこまで気を使うこともあるまい。それに家中にそう佳き稚児ぶりの者も居らぬしのう……」と九郎太は答えた。

「ならば格と好江の両名を、あの儘でつけておやりなされませ……せっかく精魂こめて丹精して仕込みましたものゆえに……」そこで姉小路の局も、微笑した。

「そうか……二人をまたつけてやるのか。あれらは幸い男装しているゆえ何処へつけてやっても

変ではないな。まことにそりゃ妙案じゃ」

「いや一石二鳥……あれら両名は、それぞれご老公お好みの窪みを二個ずつ備えて居りますれば、二人ではしめて四個。いかな御壮健な隠居さまであれ体当りに堪えかねて城外へ脱出しようとまでなされて居られるのならば、また太田までお伴をすれば四個ゆえ、これがまことの体当りの四方攻め……よって、やがては——でござりましょう」

言葉を濁し、にっこりしてみせた。そこで大瀬九郎太も膝を叩き、

「女ごは怖ろしいと申すが、そこまで読みが深いとは恐れ入った話。いくら人一倍お盛んな御老公でも、昼は戸外仕事で疲れ、夜は四方攻めにあわれては、こりゃ長くは保つまい。そうなれば御公儀よりのご不審の眼も、もはや及んで来なくなり、われら水戸二十五万石の家中の者は、扶持離れせんと済む。そりゃ有難い願ってもない話だ」相好を崩して満足そうにうなづいた。

しかしである。太田在へ引き移って、

「西山隠士」と名のりを改めはしたが、まだまだ光圀は元気なものであった。

さて、

京より御所の思召しで、勅使として下向して江戸へ来たはよいが、

「先々代家光公が御約束なされし事にておわすゆえ、なにとぞ早々と山城一国の二十一万三千石が、もし無理ならばせめて半分、いや四分の一にても御所へ御進上なされませ、なんせ、天子さ

まが三万石にては……仕える吾ら粥とてもすすれぬ有様」

と、あくまでも、たとえ何万石でも、はっきりさせようと頑張り抜くものだから、城内の竜の口伝奏屋敷へその儘で引き留められっ放しの中院通茂卿へ、光圀は都鳥の置物を送らせ、

「都鳥あさる波間に沈むとも、やがて雲井に立ちぞ帰らむ」の一首をつけたりした。

（江戸へ来て軟禁同様の身の上におかれていなさるが、やがて京の雲へ舞い戻って帰れるだろうから、まあ辛抱なさるがよい）との慰めの意味である。それに対して通茂卿は、

「思ひきや沈む水くづを都鳥、心にかけて言とはんとは」と、隅田川の言問橋にひっかけ、天子さまの思召しを秘かに訴え返歌にしてきた。ついで光圀は太田から通茂卿の許へ、

「蒔絵の書見台に書物、それに雁三羽に清酒」を秘かに送り届けさせたりした。もちろん、これが露見しない訳はない。どうも怪しいとなって、すぐさま騒ぎになった。

そこで、はたして何者が伝奏屋敷の中院の許へ使いをだしたかが詮議がされた。

しかも番人の話では、忍んできたのはうら若い女だというのである。そこで阿部豊後守が、

「……もしや」と疑ってかかって調べた。しかし、常陸太田在の光圀の隠居所に仕えているのは、どうも若衆二名のみで女っ気はないらしいと判明したから、これは違うと認め、

「……水戸の老公の仕業ではありませぬ」と、柳沢吉保にもその旨の報告をした。

だから水戸へも何の通達もなかった。そこで光圀は、しめたと思ったらしい。

「嗚呼忠臣楠子之墓」を格をまた女姿に戻して、兵庫へ使いにやり石屋に刻ませた。

光圀としては街道すじの人目をひく、大きな石碑を建立させるつもりで、銀二百匁を持参させたのだが、格は女のことゆえ吝というか慎ましく、その辺の寺にあるような小さな墓石を作らせて建ててきたにすぎなかった。しかし、今度は女の使いでも名前入りゆえ、光圀の仕業ということが間もなく露見した。

一説によると侍女の格ではなく、儒者がおもむきその墨跡によるともいう。

そこで柳沢や阿部豊後守は、あまりな反体制ぶりに手をやき、光圀が江戸小石川屋敷に居た頃、ずっと側用人を勤めていた七百石取りの中山内膳を、千代田城桐の間番千石に、今でいうスカウトをして直参に引き抜きをした。光圀を専門に見張らせる意図だったという。

好江の許を尋ねてきたその父与四郎から、この話をきくと、光圀は苦が虫を噛み潰したような渋面をみせた。そして、むかっ肚をたて、

「まだ、まだ、わしはやるぞ」と唸った。そして翌元禄七年、今度は格の代りに年上の好江を内密に使いに出して、有栖川幸仁親王と鷹司前関白房輔卿の許へ伺候させた。

しかし水戸二十五万石の当主の頃とは違い、隠居して西山隠士になっている六十七歳の光圀に対し、江戸幕閣を恐れた親王や前関白は色よい返事などしなかったらしい。

だが挫折せず光圀は、今度は儒臣を集めて、『大日本史』の編さんに取りかかったというが本

当はどうだろうか？

が以前は水戸藩きっての美女だった格や好江も、遠くへ旅にやられたり百姓仕事で、すっかり今は陽やけし骨太になっていた。

だから新しくきた見張りの番人などは、てっきり男の近習とでも思ってしまったらしい。

「格之進」と格はよばれ、好江は、「介三郎」などといわれだした。

しかしいまいましさに、夜になっても光圀は、なかなか寝つかれもしなかった。

そこで、うさ晴しのせいか、気まぐれの冗談でもあったろう。

「すけさん、かくさん……今宵はどち、どちらに致そうか、これが本当の、まん遊記じゃな」と戯(ざ)れごとを口にすることもあった。

が、唇から洩すのとは、うらはらに、無念の口惜し涙が、乾ききった老いの眼許をいつも濡らしていた。

何がなんでも……

唐の安祿山が謀叛してならず、捕えられ放りこまれた岩窟の名を、そのままとって、「凝華洞」と称する竹矢来でかこまれた茅屋があった。

水戸光圀は隠居させられる前のことであるが、京屋敷の者に命じて、そこへ、「御染筆料」とか「御添削料」と称して、おびただしい料紙や筆墨、それに酒肴をも内密に届けていた。

というのは、そこには徳川の権勢を、ことさらに一般へ誇示するためか、「地震や火事が多いのは、その不徳のせいである」と理屈にもならぬ云いがかりで退位させてしまった伊達綱宗の従兄にあたる前帝後西院さまが幽閉されていなさったからである。つまり、「みかどであっても公儀に対して、楯をつくようなことをなされますと、こういう目にあうのである」と示威のために現在の京都御苑に、とじこめ小屋を作っておしこめられたのである。

今でも「後西帝凝華洞趾」の立て棒が、たっているから心ある者は拝みにゆくがよい。

江戸時代の閉門蟄居の象徴は竹矢来である。が、前帝を慣習通りに仙洞御所へ入れて、その廻りをぐるりと竹でかこみ、矢来をたてるのは費用がかさみ大変ゆえ、小屋を作ってそこへ御身柄

を移したてまつったのであろう。今の常識では考えられもしないがいくら謀叛容疑とはいえ恐れ多くも昔はひどいことをしたものである。が、水戸京屋敷より何かと届け物がある内は、（御三家の一つが、ああした心づかいをみせているからには、その内に何とか御放免の沙汰もあろう）と、京では期待も抱いていた。秘かに当てにしていたのである。

が、風向きはすこしも良くなりはしなかった。それどころか京所司代より、

「前帝の皇子はいかにいたされているや」と調べさえ廻ってくるようなことになったので、

「お咎が……前帝のお子たちへも及ぼう」といった取り沙汰さえされだした。それゆえ、

「うかうかしてはいきしまへんどすよって……」との騒ぎにもなった。

あわてて前帝の皇子達は、みな頭をまるめられ寺へ入られた。

が、その中のお一人である公弁法親王は、なんとかして父後西帝を救い出そうと孝心あつく、その当時、「東下り」といえば京方では恐しがられ嫌やがられたものだが、すすんで、虎穴に入られる御覚悟で雄々しくも、

「……江戸へゆく」と下向された。そして上野輪王寺へ赴任された。

のち元禄十四年の赤穂浪士の討入りに対してこれを義挙とよび、義士と称したのは林大学頭が初めてであったごとく義士録の類には出ているが、

「世その忠貞義を悦び」といった詩を、討入りの直後にすぐ作られ、これを翌元禄十五年一月五

日に日光東照宮に献納。まだ世評も定っていない内に、

「赤穂浪士の討入りは自分が栽培する牡丹の花のごとく、まこと鮮やかな壮挙であった」

とおおいに力説なされて、

「赤穂義士」といった呼称を、他にさきがけて主張したのは、この後西帝の第六皇子の公弁法親王だったのである。

さて、話は戻るが、御実父後西帝さまを幽閉の身から救出せねばと悲壮な決意にもえた親王が、上野輪王寺第三代目の院主久遠寿院を頼って、思いきって江戸へ東下りしてきたものの、

「ご附弟」といった境遇だったので、どこへどう働きかけようもなかった。

そこで江戸へは遙々きたものの、当時の親王はすっかり気落ちした。

「これでは父帝さまの御為にと勇をこして来た甲斐もない、なんとしたものであろうか」

悲歎にくれられていた。しかし、いくら法親王が地団駄をふんでも輪王寺の御附弟の身では、なんともなるものではなかった。

「……ごまめの歯ぎしりというものか」と、すっかり落胆した法親王は、

「ひとまず京へ戻ろうか」と、すっかり挫折した想いで日々悩まれていた。

すると、上州館林十万石の綱吉の許へ、京から鷹司関白房輔の姫が輿入りしてくるという噂が伝わってきて耳へ入った。

そこで法親王は、旅費も戻るには心細かったので鷹司家の嫁入りの帰りの行列に自分を加え、京へ連れ戻って欲しい旨の便りさえ、母方の方へ出されたのである。

さて嫁入りしてくる関白房輔の姫の姉が、ときの霊元帝の中宮である新上西門院だった。だから妹可愛さに、東下りにはしかるべき女官をつけてやりたいと、遠い江戸へ縁づけさせる身を案じた。霊元帝も中宮の心配が判るから、

「宮中の女官の中より誰でも良いからよき女人を選抜すべし」

とまで心配なされて仰せられた。そこで、中宮は、

「梅小路、大典侍、右衛門佐（のすけ）」の三人を、妹姫につけて東下りさせる事にした。

この内で大典侍は、後に、「北の丸どの」とよばれるようになった清閑寺権大納言の娘で、「きんちゃく局（つぼね）」といわれた右衛門佐（のすけ）と共に、綱吉に籠愛された女人である。

しかし京からきた二人が揃って美貌であるばかりでなく、今でいう名器の持主だと、何者がいいふらしたか判らぬが、すっかり巷にまで大評判になったので、それから誰いうとなく、「東男に京女」の言葉が出来たというが、生れつきの天然の名器が二人も揃うものではない。

また選んだ中宮新上西門院は女人だから、彼女にそうした女の個所を吟味できるわけはない。これは後天的に特訓させられ仕込まれた、ものとしか見る外はないだろう。

それでは誰が教育したかといえば、それはあと一人の梅小路である。

なにしろ彼女だけは四十もすぎていた。そして同行してきた理由も、（輪王寺から戻りたいと訴えてきた親王の御生母が梅小路卿の長女であり、彼女はその妹で親王には叔母にあたる）といった間柄であったからして、「せっかく東下りした第六皇子が、おめおめ戻ってくるようでは困る。今は亡き姉の為にも自分が励ましに行ってやらねば」と決意したからである。

さて、当時京では、水戸光圀や酒井雅楽頭の尽力で「有栖川宮幸仁親王」が家綱の跡目の五代をつぐ、といった噂もあったのだが、梅小路らが江戸へ出てきてみると案に相違して、そうした取り沙汰はまったく期待薄になった。

なにしろ故春日局の孫の堀田正俊や稲葉正則らが、あくまでも組んで反対し、「三代家光公の御子が……ちゃんと居なさるのに」と、上州館林十万石をついでいた綱吉を、五代将軍にやがてしてしまうといった結果になった。

有栖川宮さえ五代将軍になれば、その力で甥の悲願を叶えさせ先帝の救解をしようと、せっかく出かけてきた目論見が狂ってしまい、「どうしたものか……」と梅小路は、自分も法親王と同じように京へ戻りたくなった。

しかし、ひるむ心に鞭うって、

「幸か不幸か自分らが嫁入りの伴をしてきた姫の相手の綱吉が、今度の新将軍となったのだから、これを攻略せぬ法はあるまい」と気負いたった。

つまり将軍家御台所となったが鷹司の姫は、言うなれば床の間の飾り物のようなものゆえ、それに遠慮はいるまいと考えたのである。そこで梅小路は大典侍と右衛門佐の両名へ、

「殿方に好かれるも好かれぬも、心の引き締めようと此処の小肢の締めつけ加減でおす。しっかり気張らないけしまへんどっせ」と、言って聞かせた。

しかし口だけで教えても、はたしてどうかは判からぬ個所だけに、

「これで試してみいや」と、鯉の餌に与える棒麩を持ってこさせ教育した。

麩は乾いている内はすぐ曲がれば折れてしまうが、湿気をおびる所へおけば、どうしてもそれを吸って柔かくぐっしゃりしてくる。それゆえ、

「まあ、こんなに大きな物を……」

初めは怖れをなしていた大典侍も、濡れぬ内こそものをも想えと厭っていたがやがて柔かくなってくると、それ程ではなくなってきて、

「……駒のように長うおじゃりまするな」などと、若いだけに面白がったりしたる。

右衛門佐の方も、やはり同じで、

「固い儘なら締めて切れもしまするが、こない柔らこうては、いくら力をこめても何ともなりま

せぬえ」

むずかって笑い出す有様だった。

それでも梅小路は両側に並べた二人の娘へ、左右に握りしめた鉄を交互に深く浅く当てがいながら、

「おかみの為にはどんなお勤めかて、よおせなあかんが公家の女ごしゅの定めどっしゃろ。恥かしがったり笑うておちょくる事やおへん。精出してお気張りやっしゃ」

と、険しい表情で、必死になって梅小路は、はしゃぐ二人を叱りつけつつ、京より持参してきた枕の草紙とか源氏物語、といった乙夜の覧に供する絵草紙の類を開げてみせては、

「顔を赤うせんと、ここの草紙にでている四十八手をみな、よお覚えないけしまへんどっせ」と叱るごとく激励したものである。

なにしろ江戸時代の貧乏公卿の娘は町娘が琴三味線の遊芸を仕込まれ芸者になるように、今日のとはまったく違うポルノ本の源氏物語絵草紙や、ハウ・トウ・セックスものの枕草紙で教えこまれ、よくレッスンしてから大名や旗本の側室に送り出されていたから、

「しっかり上達せな、殿方に好いて貰へんであきしまへんどすな」

彼女らも別に抵抗感などなく、まじめに刻苦勉励して、今でいう特訓を受け、精神一倒何事かならざらんというが、ついに二人は一緒に後天的な名器の持主となったのであろう。

さて、千代田城の大奥で、新しく御台所となった鷹司家の姫につきそってきた梅小路が、足柄山の山奥ではないが日夜わかたず組み合せ、

「はっけよいや、のこった」と、大典侍と右衛門佐の二人に対して取っくみごっこをさせ、女体が如何に男を満足させるかを仕込んでいる頃。

やはり京から柳沢邸へ来ていた正親町卿の妹の町子はしょんぼりと、

「さて、なんどっしゃろな……えろう銀をたんとはずましてやって迎えて下されたんに、てんで女ごの勤めはないようやけど……さては嫌われ戻されるか、何処ぞへやられるんのと違いまっしゃろか」と、その時分はまだひとりきりきり胸を痛めていた。

なにしろ兄の許へ顔を出す細井広沢とよぶ儒者の口から、たっての所望と聞かされて下向し、柳沢家へ来たのだが、なのに主人の柳沢弥太郎ときたら一度も夜は呼んでくれないのである。

「きつい侮辱や……おへんか」

かっかとして、日ごとに持ってきた京白粉を厚く塗りたくって、これでもかこれでもかと、おつくりしても、てんで認めてくれようとしないのが、癪にさわるやら悲しくなるやらまったく言いようのない気分だった。

しかし気の強い町子のことなので、じっと泣き寝入りしているわけにもゆかず、思い切って弥

太郎を見かけると、はしたないような気はしたが、
「殿さま……一回でもなんしゃってそれでお気に召さなしようもおへん。なのに何もしなはらへんで放っとくは蛇の生ま殺しよりすかたん事やおへんか」と口惜しい涙をため、怨みごとを吐きだし叩きつけた。すると、
「……えッ」びっくりしたような弥太郎は、しげしげと町子の顔を見返し、
「何もわしは妾奉公にと……其方を代銀払って呼んだのではない」と苦笑した。
だから町子は、はぐらかされた想いで、きょとんとしたが、それでも、
「だったら、なんでお呼びやした」逆かねじをくわせて掛った。
すると弥太郎は呆気にとられたように、眼を丸くして不審そうに、
「遙か遠い京にあって見た事もない女ごを、抱くために呼び寄せる訳はなかろう。わしが細井広沢に命じて探させたのは、御守殿の染子さまの相手に、利発な京の女人を所望し、そもじがその選に入って来たまでのことだろう」
何をいうのかと、いわんばかりに言い返してきた。それゆえ引っこみがつかず、
「そうどしたか……ちいとも知らんと鈍なことを、えろ勘忍どっせ」
仕方なく詫びはしたものの、女として問題にされていないと、面と向かって言われて良い心地がする訳はなかった。そこで甘えるみたいに、

「染子さまがどないひとか教えて貰わな、いきなりぶっつけに行ったかて仕方おへんと違いまっしゃろか」と上眼づかいに尋ねた。

「うん、そこじゃ。わしも、いきなり伴って行って引き合せるのも、気難しい相手ゆえに考えていたところ。よくぞ質問してくれた。さすがに賢女である」と、弥太郎もうなづいた。

　すると町子は、にっこり微笑してみせ、ここぞとばかり、

「どうせ硬いお話やおへん……なら今宵にでも、町子をお召しやして、色んなことを教えておくれやっしゃ」と、さも仕事大切だからと言わんばかりに、律儀そうに懇願するような口ぶりで求めた。しかし弥太郎は、まさか町子に根胆があろうとは知りようもなく、

「それもそうじゃ、手が空くのは夜になってからゆえ、それでは悪いが使いをやるゆえ来てくれるか」と答えた。町子は神妙に、

「へえ、よろしゅうに……」頭を下げたが、内心ではほっとして愁眉をひらいた。

　女の身として、歌留多ではないが一回でもお手付きとなれば、それで自分の保証も得られ落着けもする。なにしろ唯たんに染子の話相手というだけでは、もし気に入られなかったらそれ迄の話。せっかく江戸まで来たのが根無し草も同じ身の上で縋がれもせず頼りにする当てもない。（殿とこの身は、男と女ごの間柄……同じ女どうしの染子どのよりは反って組みしやすいというもの）と、なんとか今宵こそは首尾をとげようと、女の打算でほっと安堵したのである。

さて、女の首尾といえば常陸太田在で、むりやり押しこめ隠居にさせられ、今では、「西山隠士」を名のる水戸光圀の側近にも娘ふたりがそうした想いにかられて悩んで居た。

そもそも光圀が隠居させられた発端は、小石川水戸屋敷の近習が秘かに柳沢邸へ潜入し、見つかって斬られたのが事の起りのようなものである。そこで重臣共も懲りていたから、また繰り返して刺客など向けられては、水戸二十五万石の存亡に関すると心配し、

「ご老公の身辺に血気にはやる近習など一切無用……といって中年者でも水戸っぽの男は気が荒いゆえ、ご側近には女人のみにせよ」

と命じた。そこで城の侍の娘の中から、格と、好江の二人が選抜され隠居所へもついて来て、光圀の身の廻りをみる任務にずっとついていたのだが、しかしそれでも、重役共は念を入れ、

「ご老公があの御齢でも血気さかんで公儀に対して刃向いなさらんとするのを、なんとか食い止めるのが、そちらの忠義というものである」とも厳しくいって聞かせてよこしたのである。

つまり二人の若さで御老公の有り余る血気を吸いとってしまい、なんとか謀叛気を無くすようにと、言いつかって送りこまれてきたのである。

だから二人の娘はどちらが先でもよいから御老公の御情けを頂戴して、無難に御守りをする事こそ水戸の御国への御奉公と想うから、夜ごと交替で寝所へ忍びこんでは、

「なにとぞ、首尾して給わりませ」つまり抱いて欲しいと、必死になって光圀へ頼みこみに行っ

ていた。が、若僧の柳沢弥太郎にまんまとしてやられた恰好で、水戸光圀は、
「隠居帰国」といえば体裁はよいが、ていのよい軟禁だから、それが厭で重役共をよび、
「年寄りゆえ身体のためにも何かしたい」と、太田村へ隠居所を建てさせ引き移りはしたが、
「なんとかして柳沢めに一と泡ふかせてやらん事には腹の虫がいえぬ」
老いの一徹というか、かっかとしていたのである。だから廻されてきた二人の娘が、
「どうぞ、首尾させて下されませ」「御情けを賜りたく」
いくら初めの内は生まれた儘の姿になって忍びこんでいっても、頑として、
「うるさい、それどころではないぞ」剣もほろほろで取りつく島もない有様だった。だが、
「はい、そうでございますか」と、いくら断わられても、二人は引き下がっては居られない。
だから困ってしまい、袖をひき合って、
「なあ、どうしたら良ろしかろ」それゆえ二人で、と話しあう日も少なくなかった。
狭い隠居所のことゆえ、光圀も二人が悲しんでいるのは判る。が、まさか重役にいい含められて
「命にかけても大切な御用。どんな事があっても相い勤めるよう」
と、二人の娘が、御家の大事と厳命されて来ているとは知らぬからして、光圀は呼んで並べると、
「お前らは年少ゆえ血気が溢れともすれば情欲に溺れたがるのであろう。しかし慎しむべきは色の道と先哲も戒めて居られる。よって二人とも百姓仕事に精出して煩悩を追え」と訓した。

嗚呼忠臣楠子之墓

数多い水戸家中の何百という妙齢の娘の中から、特に選抜されて御老公隠居所へ廻わされただけあって、格も好江も初めの内は花も恥らう美女だった。

しかし炎天下の田畑へ連日朝早くから、追い立てられるように出され、肥桶をかついで野良仕事をしていては、純白だった肌もいつか渋紙色になり、

「どうじゃな近頃は……夜ごとわしの許へ前のように這いこんでも来んところをみると、改心しまじめになったとみえるな」と、光圀よりからかわれても二人は、

「もう疲れきって、くたくたゆえ夕食を頂きますと、そのまま白河夜船にござりまする」と、答えるしかなかった。

「そうじゃろ、古来、女子と小人は閑居して不善をなす……と申す、よく働き疲れて寝てしまうのは健康によろしい。その内に、わしが良い婿でも見つけ、あの方は充分に堪能できるよう取り計らってやろう程に、まあ安心するがよいぞ」

水戸光圀はにこにこしながら、からかい半分に説教しては至極満足そうに白髯をしごいた。

もちろん光圀も管笠を冠りつつ斧を手にして二人の娘と共に雑木苅りなどをした。

が、だからといって内心に燻った憤りが、それで納まっているのではなかった。反って、光圀の胸中には柳沢吉保への憎しみが、こりかたまって噴き上げていた。

まあ言うならば、そうした憤怒をまぎらわすために、己れを打ちこむように光圀は、固い大木に向ったりして、一心に斧をふるって居たのである。だからして、

「晴耕雨読」といった陽気なものではなかった。元禄二年の春になると、

「これ格さん……青い物がたんと取れ、とてもこの隠居所だけでは食い切れぬ。おまえ済まぬが番衆にも分けてやって通して貰い、そっと城下まで持って行ってくれぬか」と命じた。

「青菜を運んで行くのなら、この好も一緒に参りましょうか」

脇から申し出たところ光圀は、

「いや、二人では人目につく。格だけの方が良かろう」と首をふり、

「青菜の束に金と書面が入れてある。だから他の所へは持ってゆかず、菜っ葉売りに化けて、わしの申す名宛人の許へ届けてくるのだぞ」と、いいつけた。

そこで格は、久しぶりに御城下へ行くのゆえ、長着でも身につけて行きたかったが、それもならず泥つきの野良着のままで、顔を手拭で包み、青菜の束を背負って太田村を出た。

かねて重役から、老公が何か変った事をするようだったら届け出るようにと、いいつかってはいたが、

（汗水たらして作られた菜っ葉を持ってゆくだけ……の事だから）と気にせず、水戸城下におもむいた。そして命ぜられた通りに御花畑へおもむいた。すると薬草小屋に居た相手は、

「えッ……ご老公御手作りの御野菜をこの拙者めに御下げたまわりますのか」

すっかり感激し受け取った。が菜束の中の書面をよむと、

「えッ……楠公のお墓を――」びっくりしたように口にした。だから格は何の事か判らず、（そういえば御老公は訓れぬ野良仕事で、ひびやあかぎれを切らされ、蛤貝に入っている軟膏をつけて居られた）と思いだしたから、青菜を届けたからそれをもらって立ち戻るのかと、

「へえ、なんこうを」と手をだした処、相手は妙な顔をして

「何じゃな……」と聞き返してきた。そこで格が思った通りのことを話すと、

「塗り薬ではなく人の名前じゃ。織田信長公の頃に、楠長安と申す者が子孫だと申し出て、ときの正親町帝に銭十貫文を奉納し、それまで足利体制下では、賊徒とされていたのを取り消して頂いた……と伝わっているが、その後は、また有耶無耶になったままの御方のことである」

と説明した。どうも相手は、昔のことをよく知っている処をみると、薬草学者か儒者のようだった。そこで格はうなづき、

「えらい間違いをしてまして、いたみ入ります」と頭を下げた。そして、

（なんで御老公には、そんな昔の楠木正成の墓など建立されるのか物好きな……）

すこしは不審に思ったが、格別どう取立ていう事でもないので、
「では、よろしゅうに」と、そこを引きあげて、明るい内に太田村へと道を急いだ。すると分けぎの二本道まできたところで、ずっと城下からつけて来たらしい深編笠の武士が、
「あいゃ、そつじながら貴女は、ご老公側近へお仕えの方ではありませぬか」
と、いきなり前へ廻わって、すかさず低いが声をかけてきた。
「えッ……」びっくりして顔の手拭を合せかけると、武士は編笠を取り、
「いや、決して怪しい者ではない。私は江戸屋敷では御老公の御側に仕えていた者で、よくお見知りおきの身分です」と打ちあけてきた。そして、
「なにしろ御隠居後は重役共の手によって、われら家臣との間も遠ざけられてしまわれ、なんとか一目なりとも御機嫌伺いたく、水戸へ戻ってきた機会にと願い出たが、お許しが出ず途方にくれていたところ、何んとか御手引きして頂けぬか。遠くから御壮健な御姿を拝するだけでも、江戸屋敷の者らへ良き土産になり申す」深々と頭を下げて頼まれた。
「ご隠居まではお連れできませぬが、野良越しに御姿が拝せる辺りまでならば、まあ一緒について来なされませ」格も相手の熱心さにほだされた。が、後先になって歩きながら、
「何処へ行って来られた」と聞かれたので、
「お花畑まで私用がありまして」と答えたところ、編笠の武士は、

「ご老公には江戸在府の頃より、水戸領内の山間僻地の無医村らの者たちのため『救民妙薬集』なる薬草早や判りの冊子を刊行され、御城下お花畑に薬草畑を作って居られます」と教えて、

「まこと天下に二人とはおわさぬ明君に、あらせられるおひとでござる……」

心酔しきっているように、それにつけたした。

「だったら何故に御城の重役衆は、御老公さまを籠の鳥のように閉じ籠めようとなさったり、おまえさまら家来衆を遠ざけようとなされますのか？」

かねて不審に想っていたから、つい格は聞いてみた。すると、

「うん、今度お跡目にたたれる綱条さまは、御老公のご実子ではなく、高松候頼重さまの御子……これは御老公が本来なら水戸をつぐべき兄頼重さまの代りに、弟の自分が御三家の一つをついだのは、父頼房の命令とはいえ申しわけないと自分のお子に高松を継がせ、向こうより綱條さまを迎えられたのが原因じゃ……とはいわたているが」と答えて、

「だから江戸上屋敷でも御老公の御隠居は、高松より伴してきた者らが幅をきかせ、こちらの御城の重役衆も、その鼻息を怖れて吾身可愛さに、色々と細工をしているのだろう」

無念そうに唇を震わせて話した。が、名も告げずに深々と頭を下げて去っていった。だから格も、城の重役から命ぜられて、御老公の側近に回わされている身も忌れたように、

「ほんに口惜しい事でござりまするな」しみじみ後姿へ相槌をうった。

が、隠居所近くまで戻ってくると、もっと腹立しい事が起きていた。

これまで、いくら親しそうにしていても、内心では競争相手といった意識が、どうしても抜けきれない好江が、

（あろう事か自分が留守したのを幸に、巧く念願の首尾をとげたものか……）とはっとした。

老公に馴々しく肌もあらわに寄り添っているのが、梅林ごしにはっきり見えてきたからである。

「……まあ」とだから格は、涙をふき出させた。女としての憤りであった。

「好さんや、好さん……」と光圀が若い娘に優しく声をかけ、抱くようにして居たのは、しかしなにも愛撫の為ではなかった。かすり傷だが肩や二の腕に血が滲んでいるのを見つけ、

「些細な傷でも放っておくと破傷風になる。軟膏を塗ってつかわそう」

と、ひびやあかぎれ用に使っていた蛤貝の薬をつけてやっていたのである。

どうして好江が怪我したかといえば格が青菜を背負って出かけた後、不意に頬冠した曲者が連れだって隠居所へ襲い掛ってきたからである。

隠居所のある太田村の入口には、警衛のため詰所があるのだが、背後から山越えに忍びこんできたものらしい。

まさか己が隠居所へ抜刀した輩が、入って来るとは光圀も予期していなかったからすっかり狼

狽した。そこで、

「これ、刀をもて……」あわてて叫んだ。いいつけられた好江は、

「はあッ……」と、刀架けから光圀の佩刀を持ってきたが、とても渡している暇はなかった。

だから彼女は、すかさず身がまえ、

「御免そうらえ」と光圀の佩刀の鯉口を切り、引き抜きざまに、

「無礼者ッ……」と近寄ってきた一人を、下から薙ぐように払った。

水戸二十五万石の光圀の佩刀だけに、さすが切れ味が抜群だった。

脇胴を斬りこまれた相手は、左手を吹っ飛ばして堂と仆れた。そこで次の曲者が、

「おのれ、女ではないか……」と、眼前の斬り合いが信ぜられなかったように叫んで、

「くそッ……」と振りかぶってきた。危わや、まっ二つとみられたので、

「……危ない」光圀も思わず叫んだ、ところがすばやく好江は返す刀で斬りつけた。だから、その時には、相い討ちのようにみえ、曲者の方もばったり前のめりにつんのめって転げた。

しかし先に仆れた好江はよろけながらもすぐ立ち上った。見れば肩から糸をひくみたいな血しか出ていなかった。

そこで三人のうち残った一人は泡をくってしまい、片腕をもがれて苦悶しているのに肩を貸しあわてて雑木林の中へ逃げこんだ。

「……追いましようか」喘えぎながら好江は聞いてきたが、
「よせよせ、深追いするでない、残された仆れている者を糾明すれば、何処から回されてきた奴か判ろう」光圀は気負いだつのを制した。
が、後から仆れた曲者は見事な、けさ掛けで心の臓まで刃先が届いたのか、もう虚空を睨んで仰向けると絶息していた。そこで、光圀は屈みこんで
「これでは問い糾しようもないな」呻めいた。それゆえ好江は恐縮しきって、
「浅手をおわせておけば良ろしかったのに」と、詫びをいれた。
「いや、よおやった……其方は太刀さばきを仕込まれているのだな」
確かと握りしめたままで返り血でかたまった恰好の刀の柄を、はがしもぎ取るごとく、とってやり感心した光圀は軟膏の蛤貝を自分で持ってくるなり恥かしがるのにも構わず、
「さあ……片肌を脱ぐのだ」と、血がたれている肩から着ているものをずらせ、
「ほう襟からよく陽にやけ黒うなったが、まだ肌の方は白絹のようじゃな」
優しくいたわるように声をかけ、傷の手当をしてやっていただけのことなのである。

さて、いたわるといえば、光圀が眼の仇にしている柳沢弥太郎吉保の方も、
「のう町子……なにしろ染子の方は、唯一人として永勤する者のなかった一の井戸番を、七年も

やったというゆえ並みの女と違う、烈しい気性の持主。だから、そこをよくわきまえ、さからわず、といって余りおもねっても巧くゆくまい、だから心して話相手を勤めてくれまいか」

しきりと優しくいって聞かせていた。なにしろ三万二千三十石の自分の禄は、どうみても、その内の三万石までが将軍家よりの染子の方の預り賃みたいなものだから、

（なんとしても上手に、機嫌をとって置かねばならぬ）と想う心からして、町子より、

「ねえ殿さまえ……」と甘えて来られても、弥太郎としては優しく、

「うん、よしなに」と、染子のお守りをさせる女ゆえ、どうしてもいうしかなかった。

それに町子は正親町卿の妹だが、染子の方も櫛笥卿の妹である。

（もし此方の都合で差し向ける話相手の町子が、同じ公卿の出どうしという事で、勝手に仲良く組まれでもしたら事である）といった危惧も弥太郎にはあった。

だからして恥しそうに町子から求められると、どうもこれまでのように、

（そんなつもりで呼んだのではない）とも言っては居られず、この女を自分の味方にする為にはと考え、

「こりゃ、やむを得ぬことである」と自分で言ってきかせた弥太郎は、

「のう町子、わしは染子の方には指一本ふれては居らぬ。よって話相手として差し出す其方と何かあっては、まずかろうと考えていたのであるが……この事かまえて二人だけの秘密にしておけ

るかや……」

と念押しをした。町子にしてみれば、なにもそうだからといって表沙汰にすることでなく、自分さえ柳沢邸に落着けるようになれば、それで充分と想っていたから、

「へえ、うちは殿さまのお言いつけ通りにしますよって、大事あらしまへんどっせ」

とすぐ誓った。そこで用心深い弥太郎も

「ならば良かろう……」と手を延ばした。そして女体を撫でしごきつつ、

「そもじは見かけによらぬ毛深か……さじゃな」などと耳朶を舐めつつ囁いた。

が、妻のさめは、まさか夫の弥太郎が御奉公大切にと心掛け、やむなく別に抱きたくもないのに、額に汗をたらして励んでいるとは知る由もない。

「……お殿さまは京よりの町子さまを寝所へ召されていなされまする」

忠義ぶって知らせにきた腰元から聞くと、そこは生身ゆえかっかとして、

「前には藤井の小娘に手を出され、また染子さま話相手にと呼んだ女人へ……なんと箸まめな浮気っぽいこと」

ひとり寝の侘びしさに、さめはじっと夜具の襟をかみしめ、こらえ泣きをしていた。

別に他の女と寝られても、夫をそれで嫉妬するのは浅ましいと思いはするが、

(己れの物であっても覗いた事もない個所だけに、夫の体の物差しで他の女鞘の具合と計られた

り比べられているのか……）と思うとかっかとした。

なにしろ自分でも判らずてんで自信のもてぬ秘めやかな個所だけに、さめとしては身の毛がよだち鳥肌がたつぐらいにいらいらするのであった。

しかし次の朝。

まるで何事もなかったように、けろりとした表情の夫弥太郎は、

「これから御守殿へおもむき、染子の方さまへ、京より参った町子を引き合せてくるぞ」

と、すこぶる自信にみちた口のきき方をされたので、

「……はあ」とは、それに返事し、やむなく慎ましやかさを装おって、

「どうぞ、およろしく」見送りはしたものの、さめとしては口惜しくてならず、

「おう亀次郎か……こっちゃおいで」と乳人をよばせた。そして前年の暮に生まれた長男を、おのれの腕に抱えとり煩ずりしながら、

「……殿さまは何だけれど、あたしには、お前というものが居りまするでのう」

と、まだ無心の赤子に話しかけた。もちろん何をいわれても幼ない子供は、きょとんとして小さな瞳をあけているきりだったが、さめにはそれでも心の支えであった。

将軍綱吉来邸

元禄四年。飛鳥山の桜が散りだした頃から陽気がよくなって、うららかな陽ざしの日が多くなってきた。

が、柳沢邸はそうではなかった。のんびりするどころか別棟の御守殿からは、

「ひいひい……」と、あけくれ子供の泣き声が、かん高く聴えてくるから落着がなかったのである。表向きは実子の亀次郎より遅れて生まれてきたのだが、それでも柳沢家では、

「長子」として届け出がしてある染子の方の生んだ吉里が、こう連日、おんおん泣かされているのが聴えてくるのでは、

「……どうしてであろうか」と、滅多に御守殿へは顔を出さぬ弥太郎も気が気でない。

妻のさめも心配して、

「なにやら染子の方さまが、ここずっと血の道があれ、それで吉里さまを目の敵にして、つねったり叩かれたりして苛めて居なされますとか……」といいにくる。町子も手をやき、

「あきしまへん、いくらお諫めしたかて……この子さえ居なくば、この身は気儘に生きてゆけるのに子持ちゆえの籠の鳥と吉里さまを憎まれはって、私どもがお匿し申しても追駈け回して来ら

れ、きつう責めせっかんをなされますんえ」と訴えてくる有様だった。

「……うん」弥太郎もすっかり当惑した。

実の子をその母親が折檻するのだからまあ一向に差支えないようなものだが、吉里はなんといっても将軍家の御種である。だから、もし怪我でもさせ、傷でも残ったら大変な事になる。

だから弥太郎としても弱りはて、どうしてよいか困ってしまい、

「なんとしたらば……染子の方の血の道が押えられ、逆上気味なのを食い止めることが出来ようか……考えはないか」

染子の話相手として御守殿へ、入れて居る町子に相談するしかなかった。

「そうでおますな……」初めはもじもじして口を開かなかった町子も、しつこく問いただされると仕方なさそうに顔を赤らめて、

「……仕方おへん。女ごの身体かて熟しすぎたらいけずどっしゃろ。そやさかい我を忘れて取り乱されて居るのでおす」恥ずかしそうに打ちあけてきた。これには弥太郎も、

「そうか、そういうものであるか」処置なしといったように歎息して考えこみ、

「俗に、といちはいちとか申す女ごの睦みがあるときく……それで紛らわすわけには参らぬか」

とも、秘かに声を低くめに尋ねた。すると町子は、

「へえ、お女中衆の中に、その嗜みのある者が居ましたゆえ、そっと寝所へ伴い、先に私めが何

して故意に喋々喃々の秘戯もしてみましたんどすが……」
「うん。もう試みてくれたのか」がっかりしたようにいえば、
「あきまへん、大奥に奉公を長年しておした女ごはんには、その傾向が多いと、よう聞いとりましたんね、そやさかい誘いの水をかけておすが、染子の方は井戸番を一人でずっとやっておした気強いおひとどす。てんで乗ってきいしまへん」と首をふられてしまった。
「あかんじゃったのか……」
「へえ、仕方おへん……誰をという訳にもゆきしまへんどすよって殿さまにお慰めして頂くしか——他に取るべき方策はあらしまへんどっしゃろな」と町子は口にした。
「馬鹿も休み休みいえ……」弥太郎は、かって御守殿へ逃げこんだばっかりに、一晩で気抜けして阿呆のようにされた水戸の刺客の顔を思い浮かべ、おじけづき烈しく首をふってみせた。
「なら、なら誰ぞ身代りをおたてやすか」町子も困惑しきったように泣きそうな顔をした。
しかし他の事とは違い代人を立て済ませられることではない。
「わしで身代りが済むくらいならば、なにも遙々と京から、話し相手の慰め役など呼ばぬわい」
「と、お言いやっても、あきしまへんどっせ……そいなら思い切って将軍さまにお願いしてみたら、どうどっしゃろな」と、途方にくれた町子はいった。
「そんなことが言えるものか……ばかも休み休みいえ……」

その場は叱りつけはしたが、他にこれといって代るべき案も浮かばない。
そこで弥太郎は登城すると、人影が他にない時を見計らって、
「恐れながら……」と将軍綱吉に思いきって近づいた。
しかし露骨に本当のことも訴えられず、染子の名は出さず、
「すこやかにお育ちの若様を、ぜひ一目なりと……」と思いきって口にしてみた。
すると綱吉もうなづいた。そしてそのうちに、翌三月の二十二日。
「今宵、そちの許へ行くぞ」といいだし、とうとう本当に千代田城から、神田橋御門の柳沢邸へ綱吉は現われた。不意のことなので弥太郎は仕度も間に合わず、おろおろしたが、
「構わぬ。すておけ」と御守殿へ通り、迎えに出た染子の方に手をとられて、そのまま姿を消してしまった将軍綱吉は、とうとう朝まで現われなかった。
だから不時の用命に備えまんじりともせず起きていた弥太郎と町子の両名は、がっかり張り合い抜けもしたが、そのくせやれやれとほっとした想いで顔を見合せ、
「余人で間に合う事柄ではないから、これは上さまに時々お越し願うしかないな」
と、低く洩らせば、町子も恥かしそうにしながら、
「ほんに……」と、それに答えた。妻のさめも、やはり一晩中ずっと起きていたらしく、
「よろしゅうございましたな」と、綱吉を送り出した後でしみじみいった。

「うん、あれで染子の方さまも、すこし落着かれ、これまでのように吉里の若君を苛められんと済むじゃろ」と、弥太郎も妻に向かって大きくうなづいた。すると、さめもやはり、
「女ごというは表むきでは慎ましやかに……と他からも教えられ、そうしつけをされて、何事も辛抱ひとすじに生きぬくものだとされてはございますが……」
じっと射すくめるような強い瞳の光をちらりと見せてきた。そこで弥太郎も心当りがありすぎるので、はっとして、
「わしも、そちが亀次郎を苛めぬよう、心せねばいかんのう」笑いにまぎらわせ口にしたが、（……町子が来てからというもの、どうも手練手くだにたけた京女の色香に迷い近頃はとんと、さめの許へは無沙汰しているゆえの厭味なのか）ぎくっとするものがありすぎた。
それゆえその夜は、抱く抱かぬは二の次にして、子供にかこつけるごとく、
「もう亀次郎は寝てしもうたか」
と、さめの居間へ弥太郎は顔をだした。すると嬉しそうに、
「よお、おこしなされました。まだ寝ついたばかりゆえ起こしましょうか」
出迎えたさめは、はずみのついた声を響かせた。弥太郎は首をふって、
「よいよい、起さんでもよろしい。それより寝顔でも見てつかわさん」と、さめに案内されるまま奥の間へ通った。そして、すでに安らかな寝息をたてて居る子供を覗きこみ、

「こうして横になったところをみると、育ちざかりとは申せ、めっぽう亀次郎も大きくなったものだな」しみじみした声を思わずかけたところ、堪えていたのが辛抱しきれなくなったように、「せっかく私めと旦那さまの間に生まれましたのに、想えばふびんな子にござりまする」さめも泣く泣く肩ふるわせて、寝顔に向かってわびるごとくもらした。

「……うん」いわれれば弥太郎も返す言葉もなかった。

黙って横になり手枕のかたちで、じっと吾子の側に寄り添ったまま眼を閉じた。

「この柳沢のお家も前のごとき二千と三十石のままでしたら、この子もれっきとした跡目になれましたでしょうものを」と、さめは愚痴るごとくにまた呟いた。

「まったくだ。先に産まれているのに亀次郎と故意に名のらせ、よって吉里の君を長男として、この子は次男に届け出ているのじゃからな」とも口にし弥太郎も溜息をつき低くうめいた。

しかし、

さめは、いくら問いつめてみても夫の弥太郎が、

「ばかも休み休みいえ……」と染子の方とは何でもないという。それゆえ産まれた子も、

「あれは、おかみの種である」と、はっきり云い切って居る。が、それに疑いをもっていた。

だから、その後から産まれたのを長子に立ててしまい、さめがお腹をいためたのは次子とし

で、別に何んの悔いもないように振舞っているのが癪だった。つまり、妻のさめとしては、

（夫があくまで云いなさることだから……）と、そう信じそう想いこまねばならぬような立場におかれてしまっている。しかし、とはいうものの、

（まだ十六になったばかりの水戸の小娘がくれば、すぐに抱いてしまわれるし、染子どのの話相手として京から呼ばれた町子とて、来て何日もたたぬ内から待ちきれず床へ招かれた夫が……染子の方とは一度もなんともなかったと、いくら云わしゃったとてなあ……）

といった想いはある。まあ世俗にいうごとく、

「女はひがみっぽい」と、かたづけてしまえばそれ迄のことだが、

「廓の格子女郎の琴薬のことも後で耳に入ったし、あれこれ洗いだてれば一緒になってからでも、夫の浮気相手は十指は越す」と、さめは、いつも考えさせられてしまう。

「染子の方だけが、夫の弥太郎と何でもなかったとは……信じられもしない」

ついひとりのときは洩しもする。そして、さめはおろおろし、なんで夫弥太郎の浮気を、連れ添う自分が厭がるのか、と勘えきれず悩む事すらあったのである。

本気でどうというのではなし、単なる浮気であるならば、そう目くじらをたてる事ではないと想いはする。が、それが耐えようもなく、いらいらさせるのは、やはり己が身体の一部にしろ自分ではよく見られもせぬ個所だけにとても気になるのだとは判る。

何しろ女どうしは顔を合せれば、器量の優劣はひと目で見比べられる、話しぐあいや身につけているもので、おつむの具合もどうかぐらいは、すぐに見抜けてしまうものである。

が、悲しいことに女としての個所だけは、己れ自身でさえ皆目なんの見当もつきかねる。だから、どんな己惚れの強いものでも、そこだけは自信が持てぬものである。だからして女が、(男に浮気をされるのを嫌うのは、見てくれだけでは判らぬところを、他の女と比較され試されるのが耐えようもなく不快だし、それに自分のものが良くないのではないか……)

といった劣等感に悩まされるからによるらしい、と、いつもながら自分によくいってきかせるが、さめにすれば、それより我慢ならぬのは、なんといっても自分の産んだ子供のことである。

「……いとしや、この児は……せっかく柳沢家の初めてのお子として生まれながら、順序を逆にされて……」と、長男なのに故意に、亀次郎と名を変えられてしまった吾が児に頬ずりしては、歎き悲しみくらした。そして時には、思い余って、

「なぁ且那さま……おまえさま、この子が可愛くはございませぬのか」

と、あまりの口惜しさに、つい取り乱して弥太郎をかきくどく事もあった。

「……うん」そのたびに、返事はそれだけで後は何もいわずの夫だった。だから口惜しさに、

「わたくしめに産ませなされた亀次郎より、染子さまがつくられた御子の方がそんなに可愛いのでございますか」と涙声で詰め寄ることもあった。しかし弥太郎は、それでも、

「……うん」と、答えるのみだった。それゆえ、さめは慎しみを忘れ、
「染子の方さまのお子は……」と、いってはならぬことさえ口走りかけた事もあった。が、
「……うん」それでも弥太郎は、やはりいうだけだった。それゆえ、さめとしては、
（まさか……）とは打ち消しつつもどうしても内心では、
（もしや）といった疑惑は、抱くまいとしても念頭を離れはしなかったのである。

が、そうした気配は弥太郎とて気付かぬわけではなかった。困ったものであると眉をひそめ、つい何かと責めてくるさめの方へは、どうしても足が遠のいてゆき、
「町子よ……」と京から東下りしてきた女の許へ訪れがちになった。
が、そこでも、染子のうんだ吉里を長子とし、己が実子を年長なのに次子にしているのが、やはり町子にも気になるものとみえ、ときには寝物語に、
「行末どないおす考えどっしゃろ」などと、さり気なく聞かれもした。

しかし、弥太郎とても、ひとの子でありひとの親である。はっきり自分が種つけして作らせた亀次郎の方が、可愛くない筈はない。が、それは私情である。士道として、
「ご懐妊中の染子の方を下賜されたということは、取りも直さず柳沢の家をその子につがせよとの御上意ではないか……」と、かねて覚悟はしているだけに、町子に聞かれても弥太郎は、

「もし将来、この家の相続争いなどの心配があるものなら、可哀そうじゃが事実は先に産まれている亀次郎の方をなんとか仕末しておかねばあいなるまいのう」と答えるしかなかった。

それに町子が眉をひそめ、さめの肩をもつように、

「むごや……そんな人の道に外れた話」と、あっけにとられても、

「武士とは命がけで奉公する勤めゆえ死ぬのも働きで忠義なのだ。芝居の寺子屋の段で、若君の身代りに吾が児の首をうって、女房喜べ倅が御役に立ったぞ、というのもそれゆえだ」

と、弥太郎は教えて眼をとじた。だから町子も、

「忠義とは怖いものどすなぁ……」それきりもうこの事に関しては何もいわぬようになった。

が、年あけて桜が咲き散りそめた三月十二日のこと。

今でいう急性盲腸炎を起し、亀次郎は手当のかいもなくあっけなく亡ったのである。

さめは、おいおい泣き暮していたが、弥太郎にすればそれどころではなかった。

綱吉が四月十日、またも微行で、染子御守殿へ訪れてきた際には、思いきって、

「てまえの倅の早死にのため、かねて長子としてお届けしてありまする若君を改めて、柳沢家正嫡としますことを、御許し下されませ」と願い出た。すると、

「……左様か」と、その時は、綱吉はそれしかいわなかった。しかし翌月の一日付けで、

「其方儀、忠勤なみなみならぬ奉公ぶりによって」と沙汰された、改めてまた、

「三萬石の御加増」がいい渡された。が、さめは嬉しがるどころが冷ややかにも聞き取れる口調で、
「あなたさまという御方は……なんたるおひとじゃ。私がお腹を痛めました亀次郎の死さえ、非情にも、まんまと上手にお使いなされましたな……」
わざと脇見をしながら、弥太郎吉保へ批判するような調子でさえいった。
「何を申す。わが子の死を喜んで加増の方策にするような親が何処に居る」とたしなめたが、
「……何処にとは白々しい。すぐ私の近くに居なされる御方と違いまするか」
にべもなく、背を向けたままいい返してきた。
「忠義なのだ。伜亀次郎めが早死にしたのも忠になるのだ。女房喜べ伜が御役に立ったぞえではないか」町子に云ったのを、さめにも聞かせてみたが、それに返事もしなかった。
「かなわん、まるでわしが亀次郎の死を嬉しがっているみたいにいいよる」
と町子の許へ行き愚痴れば、慰められるつもりが、あべこべに、
「女ごはとかく了簡の狭いものでおす……せっかくの御子をなくされ動転して居られますよって、気散じゃ思うて勘忍してあげないけしまへんどっせ」
おさめを庇う町子にかえってたしなめられた。
しかし吉里が八歳で元服すると、綱吉はまた一万石の加増をし、
「武州川越七万二千石」の城持ち大名に弥太郎は昇進させられたのである。

光圀の苦慮

僅か二千三十石だったものが、とんとん拍子に七万石になって、川越の城持ち大名にまで立身するとなると、とかく世評は、やっかみも手伝って、あれこれとうるさくなってくる。

将軍綱吉にしてみれば、己れが生ませた吉里が正式に柳沢の跡目となったのだから、五万石やろうとも七万石にしようとも、贈与税よけの分割給与みたいなものであるにすぎない。

だから適当に与えて居るだけの話だが、そこまでの親心は一般に知られていないからして、

「悪いやつほど、よく寝るというが……柳沢というのは天下の姦物である」

「いくら館林時代からの奉公とはいえ、あまりに分に過ぎた御加増ぶりである。何故ご辞退をせぬのか……不忠者めが」

「ごますりと申しても、普通の程度ではないな……なみの事では、とてもあぁまでの出世はしまいと思うが如何」

「われらのごとく真面目に働いて居る者は、生涯うだつが上らない。なのに悪い奴ほど要領よく出世するというが、あれだけ立身するからには、柳沢めは若いが余程の大悪人であろうと考えられる」

そねみや羨望の嫉妬も入っているだろうが、自分の立身はよくても他の出世は喜ばぬのが人情ゆえ、七万石の大名になれたのに、蔭口をわいわいきかれるようになった。

常陸太田村の光圀見張り警固詰所の侍たちも寄るとさわるとこの噂で持ちきりだった。

そこで話を耳にしてきた好江が、もしやといった表情をみせつつ光圀に向かい、

「先日ここへ押入りました曲者の身許は、残された遺体に何んの手掛りもなく、皆目その正体が判らぬ由でございますが、柳沢というは稀代な悪人という噂ゆえ、あの三人は事によっては御命を狙ってさし向けてきた彼の手の者ではございますまいか」ときいてきた。

「……うん」光圀も内心ではそう疑っていた処ゆえ、顎髭をつまみしごきつつ、

「そうかも知れぬ。なにしろ柳沢は一と筋縄ではゆかぬ奴、わしに対しても考えられぬ話でもないな……蔭では何を意企しくさるやも知れぬ」と不快そうに眼に角をたてた。が、

「飛んでもない詰らぬ噂をお耳に入れ申訳けございませんでした」

ご老公の不興をかったのかと、あわてて詫びごとをいう好江に、光圀は、

「いや其方を叱ったのではないぞ」といつもの優しい温顔に戻った。

そして、まだもじもじして居る好江に向かって、光圀は軽く咳払いをし、

「どうもわしの眼では……公方さまは側室の染子とやらを柳沢へ払い下げられたものの、未練が出てまた通い出されたという世上の取り沙汰は、ありゃ作り事であって、まことは柳沢めが姦計

をもって公方さまを、巧くたぶらかして居るのではあるまいか……と考えるのだ」

と教えた。しかし好江は、首を傾げてしまい、両手をついたままで、

「それはどういう事でござります」さっぱり呑みこめず聞き返しをした。

というのは訳がある。警固詰所の侍どもは低い声だが、

「公方さまと柳沢とは、染子とよぶ女を相乗りの恰好で用いられている。そこで同じ親の血をひく兄弟よりも、固い契りのまら兄弟というので、どんどん加増をされているのだ」

といった聞くも恥ずかしいような、厭やらしい話をし合っていたが、まさかそれを、そのまま自分の口から光圀へはいいかねていたので、話がわからず、こんがらかってきたせいである。

「うん、わしが睨んでいるところでは姦物の柳沢めは、自分が染子に種つけせし子を公方さまに押しつけ奉って、天下を狙うているのではないかと思う。その証拠には己が本妻に産ましたる亀次郎とかいう幼児を、染子の子を正嫡に立てたさに無惨や殺害したともいうではないか」

「まぁ……鬼のような、なんて酷いことをなす方でしょう」

好江は若い娘の単純さで、すっかり正義感にもえてしまいひと膝のり出し、

「この好が何ぞ手蔓を求めて柳沢邸へ奉公でも仕り、そっと真相を探って参りましょうか」

と口にした。が、光圀は言下に首をふって、

「いかぬ。柳沢は女癖が悪いと聞く、そこへ其方などやれるものか」と、話を斥けた。

するとそこへ太田村詰所の許可を得た栗山竹仙が、格に案内されて隠居所へ姿をみせた。が、毎月一度の今でいう健康管理の為ゆえ、診察といってもただ顔を見て挨拶をしてから、

「何処ぞ、お変りはござりませぬか」と尋ねるぐらいのところだった。

光圀ものほほんと、それに唯うなづくだけで、わずらわしそうに、

「仕事など致すものじゃから見てみい、腕などこない太くなったぞ」

厭味をいうように、おおいに元気なところを見せつけた。

「それはそれは……ご老公にはますます御盛んな有様、まこと結構なことでござりますな」

鼻白んだような口調で、やむなく栗山竹仙は祝着をのべていたが、

「前年には御老公には変った御趣向をなされましたな」と洩した。

「何の事じゃ。わしは隠居の身ゆえ公儀の許しがなくては、絶対に他領へなぞ一歩も出られぬ身。いや自領ですら重役どもがやかましく、この隠居所から山麓までの往復するきりじゃが」

さり気ない調子でいってのけた。しかし栗山も口にだしたてまえ、

「おとぼけなされても御薬草囲いの花畑の本草学者に命じられ、御自身のご染筆の墓をたてられましたは……みな周知のことにござりまするでお隠しあっても駄目でござります」と口にした。

光圀もそこまで知られて居ては、仕方がなかろうかと苦が笑いして、

「一昨年、兵庫の湊川にたてさせし楠木正成と正行の父子の墓か……ありゃ小さなもんじゃが、

えらく評判になっとる……らしいのう」と、皮肉そうに唇をまげた。

「はあッ、これまで楠木正成の何たるかも知らぬ者も多うござりましたが、あの墓に御老公の御名が刻まれましたので、水戸さまが保証なさるなら正成父子というは土豪であれ、さぞ忠臣であったろうと、もっぱら街道筋では評判されて居る由にございます」

「ああ、どうも齢をとると物忘れがひどくなるな……墓石に建立人のわしの名も刻まれていたのかな」

忘れていたふりをしつつ、光圀はにゃりとしてみせてから、

「公方さまが阿袋どのに尻を突かれ、西方極楽浄土の御教えを隆盛にしようと、白山神信仰や土俗八幡、七福神や荒神信心の者らを転向させんとし製革業者共を弾圧せんため、生類憐れみの令なる悪法を天下に公布……よって地方の小役人のごときは法の趣旨がよく判らず、革はぎの対象にならぬ魚鳥の類さえ捕獲を禁じて庶民を塗炭の苦しみに追いやっているというではないか……わしの耳にさえ入っているのじゃ。其方とてよく存じていよう」

激越な口調で激しくいってのけ、この男は戻れば、一部始終を城代へ報告するであろうと、

「君、君たらずんば臣また臣たらず……と申すが、よって柳沢のごとき姦物が君側にあって、天下を誤まらせている今日の有様。よって人心を一新させる一服の清涼剤として、その辺の寺にごろごろしているごとき小さな墓石を一基寄進してみたのだが、それが天下の評判になるとは、そ

れだけ世の中が公方さまの御政道に対して、あきたらぬ不平不満を抱いている証拠であろう……其方は典医なれど国家の脈の診断は如何であるか……」とびしっと光圀はきめつけた。

「うへっ……」と栗山は平伏した。そして、内心ぞっとして、

（お城の重役衆が、この囲地の中へ藩中の家臣衆どころか、何者たりと一人も老公に近づけぬようにして居なさるのは、まったくむべなるかなというところか）と、びっくりしてしまい、

「まぁ、本日のおみたてはこれくらいにて……」早々にそこで、退散してしまった。

それまで黙々として側にかしこまっていた格も、初めの内こそ、今でいうなら激しい反体制的な言辞に仰天していたが、いわれてみればその通りのような気がしてきたから、

「……ご老公さまの仰せつけに従って、これからの格は何事であれ身命を賭しひたむきに御奉公を仕ります」きっぱり誓うように口にした。

当初は留守居の重役の命令で廻されてきたのだが、けなげにも光圀にひかれて裏切る決意をつけたのである。

「あのなぁ……先年、兵庫の湊川へちっぽけな墓石をたてるのに薬草畑の者を使ったところが、領内に話が広まってしまった。これではどうも他を頼むわけにはゆかん……よって今度はなんとか其方ら二人の内で、どちらか旅に出て欲しいのじゃが、どちらが行ってくれる？」

いわれて二人の娘は互いに顔を見合せた。すっかり陽やけして色もますます黒くなっているが、互いに体内には熱い血潮が流れている。だからして、そこは嫉妬にかられ、

（もし自分が旅に出た後……御老公と残った者が、かねて懸案の首尾をとげてしまったら……）

と思う心があるからであった。そうなると女の意地もあって互いに、

（こりゃ、うかつに一人を残して旅になど出られはせぬ。御老公は父親より年齢は上だが、遠くて近きは男女の仲。いくら齢が距って居ても何時どうなるか判らぬ）

と心配で、二人も黙りこくってうつむいていた。だから光圀は当惑したように、

「格は先日……何事であれいう事をよくきくと申したのではないか」と口にした。

そこまでいわれてしまっては仕方がなく手をつくと、

「はい、何処へなりと……」泣きそうな声でやむなく承知をした。そこで光圀も迷った。

しかし女ながらも太刀さばきの妙を会得している好江の方が、番所や水戸領内を抜け出させ京へ使いに出すには適任かとも考えた。そこで二人の娘へ温顔をみせ、

「のう好さん格さん……旅へ出るのは代りばんこで、交替という事にしたら如何であろう」と提案した。この結果、先に好江が旅立つこととなった。こう決まってしまうとこれまでの無言の張り合いも何処へやらといった有様に変り、格は仕度を手伝い、

「やっぱり男髷に結い直して、身なりは改めて行かれるが良ろしかろう」

と道中手形のうるさくない薬屋に、化けてゆくような段取りもつけた。

さて水戸藩は太田村の入り口に詰所を設けて、老公の隠居所へ出入りの者を監視させていたが、湊川へ小さい物とはいえ堂々と、楠公の墓を作られてからは用心をして、公儀への遠慮気兼ねから、

「あさや治左衛門」とよぶ水戸街道の牛久の宿場の旅籠宿に、城代家老から差し向けの見張人を常駐させ、二段構えで油断なく見張らせていた。

そして六里離れた取手に近い秋葉権現の宿場にも、武川七騎の流れをくむ柳生家の侍共が、用心して秘かに交替で詰めていた。だからして、

「太田村の老公の隠居所から、行先は不明だが何者かが旅仕度で出かけるらしい」とは、すぐ伝わっているらしかった。そこで好江だけを送り出したものの、

「気になる……」と光圀は、心配でならず立ち上ると、

「この近くだけなら出歩いて構うまい……すこし見送ってつかわそう」

甚平胴衣をひっかけたまま菅笠を頭にちょこなんとのせ、颯々と杖をついて外へ出た。

そこで格も光圀一人を外へ出すのは心配ゆえ、すぐ自分も後を追うように、

「お伴しまする」と、佩刀を藁束にまいたのを抱えて駈けだした。

「私ごとき者の見送りに、ご老公が、お出て下さるとは恐れ多い」

好江も振返って気がつき、びっくりして遠慮したが、

「なぁに、よい天気じゃ、散策にはもって来いゆえ構わぬぞ」

まるで二人の娘を両手に花のごとくに、左右に見比べては微笑した。

しかし牛久のあさやかから、そっと物見にきていた隠し目付は、

「誰か一人のみと知らされてきたが、あの中央に杖をついているのは、まさしく光圀公。さては二名の伴をつれて諸国へおもむくところであるらしい」眼をむきびっくりしてしまった。

そこで人手を借りようと、取手の柳沢の侍詰所権現の宿坊へ急ぎ、

「とうとう隠居所に引き籠っては居られず、水戸の御老公は百姓姿で旅に出るらしいですぞ」

と急を告げた。これには柳沢の臣も互いに顔を見合せて、

「御隠居中というのは、公儀の許可がなくては外へ出歩きかなわぬのが天下の御定法。まさしく不法行為ゆえ、すぐさま水戸城代家老へこの旨を知らせて詰問すべきでござろう」

と云い出す者もいたが、一党を指揮する中山七平が、かみつくように、

「何を申して居る。そんな愚図ついて居られるか。藤代まで出られたら間道を抜けて行かれれば川越街道へ通じている。われらの殿が新しく拝領された川越城の間近ではないか」

声ふるわせて叱りつけ、すっくと立ち上ると、

「……もしも水戸の老公に川越城へでも、乗りこまれてみい、ここへ詰めている吾らの落度にな

り殿への不忠となる。かくなる上は、われらだけで御老公の一行をくいとめ、手に余らば刃にかけるも可。申し開きは腹を切れば済むことではないか」といい渡した。そこで、

「柳沢の殿の御為とあらば、水火をも辞せぬ吾ら甲州武川七騎……」急ぎ刀の寝た刃を合せに砥ぎをかけると、それぞれ七人の侍は水盃をくみ交わし、草鞋の紐を固く締め、

「わが殿を目の敵になされ、いつも意地悪ばかりなさる不倶戴天の仇敵の、水戸光圀公の白髪首をあげ、これより後の殿の御憂慮をお払い致さん」と、おうおうと武者声で、ときの声をあげ宿房から飛び出した七人は、それぞれ馬の背に飛びつき跨ると、

「それ行け、逃がすでないぞ」とばかり馬の尻に鞭うって駈けにかけた。

が、まさか、そんな強敵が狙って押し寄せてくるとは、水戸光圀は知る由もない。

藤代まで続く一本道まで出てくると、竹藪の番衆に見咎められぬよう雑木林をぬけ杖をとめ背を伸ばして、

「なあ好さん、いつ迄ついて行ってもきりがない。名残りはつきぬが、この辺で引き返すぞ」

と、いいだした。そこで好江も直ちに、

「ここまでお見送り頂けましただけでも、私めには過分の有難さ……さあ格どの、どうぞお伴して早うにお戻りなされ、御好物の熱いほうじ茶でもお入れなされて下さりませ」

今度は自分が見送る立場になった。そこで老公と格の姿が木の間に隠れ見えなくなるまで、頭

を下げて立っていたものの、ゆっくりもして居れないので、好江は藤代へ向かって埃っぽい道を急いだ。すると河原近くまで来たところで前方からの砂煙に驚いた。

「……何だろう」と眼を見張って進んで行くと、川の浅瀬を渡って近づいてきたのは、七頭の馬だった。だから馬に突き当られてはと葭草の茂みへ身をひき、やり過そうとすると、

「一人とは可笑しい……後は遅れて来るのか」先登の者が叫び声をあげ、その内の二頭だけが止まり、他の五頭はそのままで、さながら風のごとくすり抜けて走り去った。が、

「これ……其方は老公の隠居所に仕えて居る者であろうが」

二頭の馬から降りた武士が、好江をみつけ中へ挟みこむように寄ってきて、

「……女、そのほうは、これから何処へ行くところだ」

「水戸のご老公は何処へ何をしに行かれるところだったか……いえ」

「御公儀の許しがなくては、やたらに出歩けぬ隠居の身分で、いずれへ無断でおもむくのか」

「正直にいえ……隠しだてすると、為にならぬぞ」

口々に喚めきつ、一人が竹のむちをふるって、叩きのめそうと振りかぶってきた。

が、横飛びにすばやく好江はさあッと身体を避けた。

だから竹むちで殴りつけようとした者は、虚空を叩いて前につんのめり、代りに、

「おのれッ」と、もう一人の武士が、「うぬ、抜く手は見せぬ」と背後から斬りつけてきた。

「女ながらも、太刀さばきの巧みなもので、太田村から出てくる途中を待ち伏せしたが、手取りにして生捕りになさんとしたのが失敗。まんまと川の中へ飛びこまれて逃がしてしまった」

「うん、老公ともう一人は隠居所へ戻っていたが……たかが召使いふぜいの者を番衆どもの目をさけて、のこのこと出てゆき、あの老公がわざわざ見送りに杖をついて外へ出向いて行ったというのは、よくせき大事の使いを命じたものとみえるが、如何に思われるぞ」

「おかしら中山七平どのお仰せられる通り……てまえの考えでは京へ向かったものと……」

「同感じゃ、恐らく腹黒な光圀は京へ密使を出し、気脈を通じて居る公卿どもを使い、御所へ働きかけて……又しても何やら悪企みを考えられ謀叛をなさんとするのであろう」

「今日、取り逃がしましたは一名のみでござるが、この分では次々と使者を出すやも知れませぬゆえ油断はなりませぬ」

「それもそうじゃ。柳沢家のわれらが言いつかって居るのは、この取手の宿場固めゆえ、持場を放ってまで追ってもゆけぬ。よって、この一部始終を川越の城と、江戸柳沢屋敷へすぐさま報告するしかあるまい、早うにせい」

中山七平は字の書ける者に手紙を口写しに二通かかせ、至急届けさせるため馬を飛ばさせた。

さて、せっかく七万石に立身して川越城を貰ったが、なにしろ将軍家側用人の役目では江戸から離れられず、ずっと領地へは行けず神田橋屋敷に居た弥太郎は、

「なに……」と中山七平がもたらした書面へ目を通すと、びっくりして、

「これは大事である、不吉な予感がする」と顔色を変えてしまった。

そこで、すぐさま登城して老中土屋政直をよびよせると、水戸光圀の行状を話し、

「京所司代の佐渡守（小笠原長重）へ早馬をたてて、公卿どもの動静をよく見張るよう申しつけるのだな」と、今では七万石ゆえ、常陸土浦六万五千石の城主へ、てきぱきと指図してのけ、

「して水戸老公の狙いは……」と聞かれると、弥太郎は厭な顔をしてみせ、

「あの爺さまは年甲斐もなく、己れを元禄の楠木正成に見立てていなさる」とだけ口数すくなく教えた。しかし将軍綱吉には、まだ光圀が密使を出したことしか判っていないから、早とちりせぬようにと、この件では何も言上せず、

「何ぞあったら、わしへ伝達を頼む」と土屋政直へ後事を託し屋敷へさっさと戻った。

というのは千代田城で、無能な老中どもと評定するより、弥太郎は戻って才気換発で打てば響くよう答えてくれる町子に相談し、前後策をたてたかったからである。

しかし戻って、御守殿から町子を呼んでみたが、女人のことゆえ、

「すでに隠居され力をなくされはった光圀公が、京へなど働きかけられてもしょせんは仇花の悪足がきゆえ、放っておかれたかてなんという事もあらしまへんどっしゃろな」

てんで問題にもせず笑ってみせた。が、弥太郎は首をふってたしなめ、

「それは浅慮というもの……光圀の狙いは恐らくは御所より密勅を賜ることであろう。三代台徳院（家光）さま迄は御所へ参内し、征夷大将軍の任命を受ける定め通りだったが、先代さまよりは公方さまは上洛せず、勅を頂いて将軍職をついで居られる……よって、もしも光圀に対して、夷を討てといった内容の密勅でも下ってみい、ご当代綱吉さまとしては上洛し節刀を賜っての御下命ではないだけに、格は同じになってしまうのだ……」とまず教えにかかった。

しかし町子は首を傾げて艶然として微笑してみせ、

「すでに一人の征夷大将軍が居なはりますに、だぶって同じ将軍職を……そないことあらしまへんどっしゃろ」納得できぬように怪訝な顔をした。しかし、それに弥太郎は優しく、

「いや前例がある。天正十年に足利第十五代の将軍職の義昭公が備後の鞆におわしたのに、本能寺の爆発で洛中が暴動の巷と化した際、ときの正親町帝の側近は洛中の治安維持を計るため、戒厳令をしかせようとして明智光秀へ、武門最高の栄与である征夷大将軍の大命降下を、吉田兼見にもってゆかせ、光秀も仰せをかしこみ征夷大将軍を拝命した。しかし俗にいう三日天下で、四日目には殺されてしまった。だから足利義昭が後に京へ戻ってくると、一度に二人の征夷大将軍

をたてられしは怪しからんと食い下がられ、御所ではやむなく皇太后につぐ準后の位を与え慰撫したという史実もある」と判かりよいように弥太郎は、説明をしてのけ、

「……それゆえ、故事をよく調べての光圀の野望は、まったく根なし草の策謀ではないのだ」

と困惑しきったように息をのみ口をつぐんだ。

「ではもしも……光圀はんにも勅が出ましたら、一体どないならはります」

「そこだ、光圀は神君家康元十一番目の御子の頼房卿の三男さまで、いうてはなんだが御血脈の濃さは、御当代の公方さまよりはるかに権現さまに近い。だから天下が二分となって争うとなれば、水戸へ加担の大名衆も多かろうゆえ、こりゃ飛んでもない事になる」

「そうなりまっしゃろか……だったら、大変なことでおす」

心配そうに町子も睫毛をしばだたき、ひと膝すべらせて端麗な顔を、

「うちに、どないせいとおいいやすのか」と近かづけてきた。弥太郎は、

「そちの兄は堂上公卿では、その人ありと知られた正親町卿じゃ。なんとか光圀へ密勅が出ぬように、骨を折って貰いたい。もちろんどんどん運動資金は送るからひと働きして欲しいのじゃ」

「では直ぐにも京の兄に、そないいうてやるんどっしゃろか……」

「頼む。せっかく泰平の世に馴れだした万民に、また戦乱の苦汗を舐めさせるは、其方とて好まぬところであろう。なんとか治安を保ってゆくため力を貸してくれ。どうだ町子……」

「へえ、殿さまのおいいつけやったら否応はおへん……御所の中だけでなく洛中の見廻りも、心きいた者を選んで警戒させ密使をばすぐ見つけるよう、あんじょう兄にいうてやりますよって気い安うして居ておくれやっしや」

床の中で愛撫をくり返されたせいか町子は朝になると上気嫌で、てきぱきと京への手紙をば書きだした。だから弥太郎は、これで何とか京所司代との両面作戦で光圀の野望は打ちひしげようと安堵した。

しかし、柳沢党の中山七平らに追われ、取手川へ身を投じた好江は、目につかぬよう水底へくぐり川下へ泳ぎつき、ほっとして岸へはい上りはしたが、安堵どころではなかった。

「まだ街道筋へも出てはおらぬのにこの有様では……先が思いやられまするえ」

濡れ鼠になった身体を草の茂みに横たえながら、気丈なようでも若い娘のこと。

しくしく心細くなって土を抱くようにして泣けてきてしまった。

すると、それを聞きつけたのか足音が近づき、

「……どうなされたのか。足滑らせ誤まって川へ落ちられたのか」

いきなり声をかけられた。そこで、はっとし、またも追手かとあわてて、

「ひいえッ……」びっくりした好江が逃げ出そうとすると、向うも狼狽し、

「御無礼……てまえは決して怪しい者ではござらぬ。兄が光圀公の近習として奉公中に忠義を志し他家へ忍びこんで斬り死せしため、永のお暇を賜って浪々の身でござるが……先代さまが下妻から水戸へ移封の際より仕え奉った者の孫に当る筋目正しき者で、心配はいりません」

自分の素状をうちあけてきた。だから好江も安心し　自分が老公の使いとなって、これから上方へ向かうところだと説明し、河原で襲われた経緯もついで訴えるごとく物語った。

すると参次郎と名のる若者は、こっくりそれにうなづき、うちとけてきて、

「そういえば、私も河原で斬り掛られました。さては貴女の護衛とでも誤られたのでしょう。が、貴女も御老公の側近とは奇遇でございますね。よろしい、どうせなす事もない浪々の暮し、本当に貴女の用心棒となって、同じように旅の行商薬屋に身なりを作りお伴しましょう」

と、どうせ間違われついでとばかり、気軽に同行をかって出てくれた。

(若い男と二人旅では、もしかすると……)といった不安も好江にはあった。しかし、

「格の話では……老公に心酔した武士が矢竹来の辺りまで尋ねてきたというし」と思ったり、

(まぁこの男もやはり忠義者で安心だろう……)と、そんな気休めも、心細さにしたのである。

「常陸の在で閉じこめられ、身をやつし世をたぶらかし居った水戸の老公が、それでは竹矢来の外へは出られぬ定法を破り、とうとう化けの皮をはぎ動きだしたのか」

光圀側近の者が密かに脱出したのを取手川のところで見失ったとの中山七平の知せに弥太郎はきっとした。そして登城すると、白書院の間に詰めていた老中土屋政直を呼んで来させ、

「京所司代だけでなく、今切から浜松へかけての七里の者へも、すぐさま手配はしてあるか」

念押しするごとくに尋ねてみた。すると土屋はにやっとして、

「はあ、その点は大丈夫、彼処で道中の者はみな一応、足止めさせて調べ居りますれば」

おまかせなされましょうといわんばかりに扇子をぱちんと音させてとじた。

——今では、箱根の関所だけが芦の湖畔に博物館などがあるから、よく知られているけれど、実際は箱根の山よりも、大井川から天竜川へかけての浜松の七里が、江戸時代には厳しかった。つまり馬子唄で、うたわれたといわれるところの、

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」も、交通困難だけをさすのではなかった。話が脇道へそれるが、馬方は南北朝の頃には「馬借」とよばれ、大化の改新時は「鞍作り」といわれていた騎馬民族の末裔である。そして関所の、

「関守り」つまり関所役人も、番太郎とか「道案内」とよばれていた者らと同じその筋の者で、王朝時代には「しゅくの者」と藤原体制から蔑まれた被差別階級の日本原住民の子孫である。

天保以降になると関所の側には博徒が住みつき、関所を通りたいにも手形を持たない徒輩に、馬子用の駒札を賃貸してやって通行させていた。そして夕方になると、その百枚を一そくとよん

で安く払い下げしてきて、翌朝までは関所が締っていて不用だから、賭場でそれを使っていたものだが、これとても博徒と関所役人は鉢とか数字の、

「八」と俗称される同種族の原住民系だったせいである。つまり、馬子唄は、

「箱根の関所は、厳重であるといっても、馬方が関所役人へ顔がきくから、心付けさえはずめば、なあなあで通れるが、大井川以西はそうは問屋がおろさない」ということなのである。

が、その点が判らなくなった現代では、川ゆえ水かさが増えると、川人足も渡れなくなり、それで天候のせいで「川止め」になるものと思われている。

ところが「大井川問屋場帳」などみると、月に二度は川止めの記録がある。

雨の多い夏場だけでなく、乾季の冬場でも平均して川渡りは止められている。

これは徳川家が防衛上わざと大井川や天竜川には橋をかけさせず、万一の際に備えさせていたのだから、水が増しての川止めではなく、何かの必要があって交通遮断させるために、川止めは政策上なされていたものらしい。また芝居の「白浪五人男」のつらね台辞で弁天小僧が、

「生まれは遠州浜松在」というのがある。そこに弁天島があるから、弁天小僧の名の由来ぐらいに今では思われている。が、その当時の大井から今切の浜へかけては、

「お七里」とか、「お七里役」と称する役人がいた。なにしろ今では家康の出身を三河と誤まって知らされている向きが多くて、これも判らぬところだろうが江戸時代には、

「権現さまは駿府で育ったが、生まれは遠州浜松在」との伝承があった。
それゆえ浜松の者は、神君権現さま発祥の地を守るといった大義名分からか、各河川の問屋場を押え権勢を示して番所を作り、自衛団みたいに、道中の者の荷物改めをしたり、今でいう、「臨検」のように、宿屋へもずかずか入って行き、相当無理なごりおしをした。
だから佐々木覚太郎の弟の参次郎と連れだってきた好江も、青ざめ、
「お七里役の者が、身許調べに入ってきたそうですが、大丈夫でしょうか」
どうしてよいか困りはてて、動揺を隠せず声を低く震わせた。
「どうも柳沢の手が廻っているようですから、用心するにしくはないでしょう」
と、すでにとってあった蒲団の中へ、好江を押しこむように入れて、
「じっとしてなさるがよい」上から蒲団の端を押えていって聞かせた。
そして七里役の者が、十手の先で障子をあけて入ってくると、
「これは、これは……お役目ごくろうさまでござります」
おひねりにして作ってあった一朱銀を、早いところ相手の袂の中へ放りこんだ。
おかみは万一の備えに川へ橋をかけさせず七里にわたって警戒区域を設け、万一の用心をさせていたのである。が、末端の役人どもはいくらかでも役得が入って、うるおいさえすればそれで良いというのだろうか。包紙のおひねりを入れられた袂の重味をはかるようにし、

「うん、うん、この部屋は別に何の事はないらしい」と、その隣りへ行ってしまった。
「よろしゅうございましたな……どうなることやらと案じていましたのに」ほっとし、そこで、
「どうも此処までは無事に来られたものの、これから先は京へつくまで何かとありましょう、そうなると、おまえさまは今のような男姿をなさって居られるより、いっそ女に戻られて夫婦に化けてゆくのが安全でしょう」と、いい憎そうに相談してきた。
「そうおっしゃるのなら……」好江がうなづき蒲団の中から、身体を起しかけたときである。
締っていた障子がまたさあっと開けられた。そして顔をぬうっとのぞかせたのが、
「……どうも寝ているやつが怪しいと外で聞き耳たてているのも気づかず、女に化けようとか夫婦に見せつけようとは、うろん臭いやつらだ」と、かみつくように怒鳴ってきた。
一朱銀でおとなしく退散したと思った七里役が、また改めて入ってきたのである。
「……こう起きゃあがれ」と、また蒲団の中へ潜りこもうとした好江の肩へ手をかけた。
「何をなされる。あまりといえば理不尽な……」のばしてきた手を逆にとって投げたはよいが、着ているものの端をつかまれていたので、ぺろりと剝がされるみたいな恰好になった。
だから肩脱ぎのような具合になった好江は、肌襦絆の胸をかき合せつつ、
「ぐずついては居られぬ」参次郎へ眼くばせして部屋の外へ走り出そうとした。
が、この騒ぎをききつけた他の七里役の者らが、

「どこだ、ここの部屋か」と、どかどかそこへ、踏みこんできた。
「こりゃ、いかぬ。わしは斬り死にしても防いでみせます。さあその隙に貴女は逃げて下さい。ご老公の密書を早く京へお届けなさい」参次郎は、もはやこれまでと大刀をつかんだ。
「ばッきゃろ……お七里役に刃向かいやがると、張付け獄門になるぐらいは知って居よう」
と、押しこんできた連中は喚めきあげた。そして、
「うぬら、どうも怪しい野郎共だ」
「ことによってら御老中さまお指図の手配中のやつらじゃねえのかよ」
「じたばたせずに神妙に、さあお縄を頂戴しゃあがれッ」
と口々に罵りつ細引きの掛縄を飛ばせてきた。それが肩脱ぎの端に絡みついたからもはや絶対絶命とみてとったか、むしり取るように好江は肌着から腰の物まで両手で一度に脱ぎ棄てた。
陽やけした顔は男みたいでも、胸から下は白くぬめらかな女体で眩しい。だから女人とは想わず踏みこんできたお七里役の面々も、十手をかまえたままで眼をむき、あっけにとられた。
「さあ、この隙に……」好江は参次郎の手を引張り背後の手すりの油障子を腰で突き破った。
そして前向きの恰好で二人はそのまま下へ転げ落ちていった。七里役の者たちは狼狽して、
「しまった、下は底なしの沼だぞ」あわてふためき覗きこんで騒ぎたてた。

追い追われる者

京の夏は、ほうろくで人間が煎られるみたいに、厳しすぎるひどい暑熱である。塀の蔭から樹木の茂みへと縫うようにして歩いても、眩しい陽ざしは避けられない。どうしても脚を動かすたびに、零になった汗がしたたり落ちる。だから若い春子は、

「まあ、まるで、なんの時みたいで、きび悪うおすな……」

ひとりで頬を赤らめ、内股のあたりが濡れてくるのを不快がって歩いてくると、まるで影絵のように伸びた黒いのが、乾いた地面にのびてくる。

そして白い往還に、ろくろ首のような影を這わせた相手は、柳の辻の方から近かよってきた。それゆえ春子は、何かしらすれ違うのも照れくさく、やり過ごそうとして、

「ほんに暑うて、どうもならへんわ」と立ち止まり四つ折りに畳んで帯に挟んできた手拭で襟筋を押さえていると、いきなりそのとき、

「あの……その手拭の端をすこし借してくださらぬか」背後から声をかけられた。

そこで春子が、振返ると、そこには鼻緒をきらした下駄をつまみあげ、当惑げに近寄ってきた若侍がいた。怪しんで用心した影法師だったが、その正体が判ると、ほっとして、

「よろしゅうおま……借しておみゃあせ」と、それを受け取り、春子が手拭の端を口でさいた。そして鼻緒のすげ替えを、手早くやって渡すと、若侍はかしこまって、
「播州浅野内匠頭京屋敷へ奉公の、小野寺十内の跡目幸右にござる」
かたくなって、ぎこちなく影法師の若侍は挨拶した。春子は、
「なにもこれしきの事で、そう角ばったことおいいはらんでもよろしゅう」
困ったように、にっこり微笑でそれに答えた。すると幸右も頭をかき、
「まだ赤穂から出てきたばかりで都風には馴れとりませんので、辺りをついきょろきょろ眺めて歩いていたものですから……」いいわけめいた口のきき方をした。そこで春子が、
「……うちは京しか知らしまへんが、おくにの赤穂に比べ、やっぱり暑うおまっしゃろな――」
と額からたれる汗を拭きつつ微笑んでみせると、相手はきちんとした折り目正しい口調で、
「赤穂は良い所です。暑い日はやはり同じでしょうが、海からの風がいつも冷んやりと吹き通しですから――」すこし上気したような口のきき方で、それに答えてきた。だから、
「もう京見物はあらかたお済みやしたか」と、春子は気さくに尋ねかけた。
「まだ京へ出て参って半月たらずですし、前の非番の日は朝からまる一日、洗たくをしてましたから、御門外へでて参ったのは今日が初めてです」と、それに答えた。
「まあ、あんたはんが男手で、一人でじゃぶじゃぶしやはったんどすか」

「溜めてあったのを一気にやるつもりで掛ったんですが、ついでに同輩のものも洗ったものですから――」弁解するような口のききかたした。それゆえ、春子は、
「そうどすか。また鼻緒が切れたらいけしまへん、うちが案内かたがた付いておみやしたら良しゅうおすが……」暑さを忘れたみたいに笑ってしまった。あまりに小野寺幸右と名のる若者が、まじめくさって話すのが可笑しくて、つい釣りこまれてしまったのである。
しかし幸右の方は固くなったまま額に汗の粒まで浮かべながら、
「いや初めてお目もじしたばかりなのに、いろいろ御雑作をかけ、その上、京見物の案内までを、御願いしましては、あまりにいたみ入ります……」と、おおまじめである。
「まぁ……」と春子は途方にくれた。まるで幸右をからかってしまったような恰好になって困ってしまい、青く銀杏の葉ごしに月代を染めてみせる相手にうなづいてから、
「今日は暑うおすよって、ほいなら涼しい日にお供させておくれやす」
と小腰を屈めて頭を下げるなり、春子は白い陽ざしがもろに照りつけている埃っぽい道へ、まるで身投げするように急いで飛び出していった。といって小野寺幸右が都馴れぬ若者ゆえ、辺りに人影はなしあまり馴々しく口をきいて、もしや何かされでもしてはと危ぶんだのでもない。
三月まで奉公していた正親町卿のところから、ぜひとも用事が有るから来るようにといった使いを受け、それでこれから急いで行かねばならぬ道すがらだったせいである。

「何やろなぁ……」と早く急いできたが女の足では陽がまぶしくて、
「せっかく他所行きの、ええべべ着てきたんに、こう暑うてはどうもならへん」と春子は途中で息抜きして来たので、すっかり遅くなっていたのに自分でも気づき周章ていたのである。
さて、ようやく正親町卿邸の裏の築地門口まで、汗をかきかき辿りつき、
「お呼び出して参った以前御奉公のものの、春子だす」と声をかければ、
「ずっとお待ちかねじゃ、早よ上へあがらんかい」太夫の左近にせかされ、
（衣類の虫ぼしか道具類の手入れ）といった、昔よくしていた奥向きの仕事をするつもりで来た春子は、怪訝そうに何用なのか尋ねかけようとしたのだが、
「もたもたせんと足をそそぎ早うに、さあ上へあがりなさい」
肩へつけてきた砂埃を払っている春子をせかして左近は、奥の御院の間へ伴って行くと、
「春子め、唯今これに控え居ります」唐紙の外から披露したところ、内側から、
「苦しゅうない、中へ通せ」と声がすぐ、こだまするように戻ってきた。
しかし春子にしてみれば、かつて長年にわたってしていた奉公中も直接に正親町卿から、声をかけられた事など滅多になかったので、
「……へえ」とは、かしこまったものの、どきりとさせられた。そして、
（ちょっと来い——に、よか事なしというけれど、こりゃ唯のなみのことやおへん）

女としてはっとさせられるものがあって、みぞおちから下がきゅうと、搾られるようにさしこんできた。変な予感が下腹にしたのである。

（さっきの播州赤穂の小野寺幸右とかいいなされた若侍やったら……まず我慢かて出来るやろうが、いくら前の御主人さまかて、この暑いのに呼び出して、いうことをきけはむごいやないか）

すがすがしい海からの爽やかな風が吹く、ときかされた赤穂の青い海を瞼に浮かべつつ春子は顔も蒼ざめさせ、坐ったまま後退がりして、

「……いなして頂きます」と大夫の左近へいった。この唐紙の向こうへ送りこまれたら、女としての往生際と狼狽したから帰ろうとしたのである。が、

「何をいうちょる……」左近は左手で唐紙の襖をあけるなり、春子のおいどの辺りを突いた。だから転がりこむような形で居間の中へ押しこまれた春子は、てっきり床でも、すでにもうのべられているもののと覚悟して、巾帳の蔭を睨むようにして身構えた。そして、

（もう御奉公中の身やあらへん。無理往生させようとしやはっても、あの連子窓の寒竹の枠を体当りでぶっ毀し、植込みへ逃げたらええのや……）と、勝手知ったる屋敷の内部ゆえ、気の強い春子は何処をどう逃げるかの段取りをまずつけた。しかし正親町卿は、

「わざわざ呼んだのは余の儀ではない。東下りした妹の町子より其方を名ざしで、是非とも天下の大事に奉公してくれとの便りが参ったからである」と告げ、

「……これが其方への町子からの手紙。そして、これなる銀壱百匁はさし当っての褒美なのである」と、三宝にのせてあったのを前へつき出してきた。それゆえ、

「……へえ」春子は面くらって変な声で返事をした。

てっきり力づくで昔の主人を笠にきて、無体をされるものと覚悟していたのに、

(奉公中まるで妹のように、眼をかけていてくれはった町子さまより……)

というので、春子はしゅんとした。感激して涙まであふれさせた。

銀壱百匁の拝領は春子にとっては腰を抜かすような、たいまいな額だったが、それよりも、もっと胸をうたれたのはなんといっても懐かしい町子姫からの手紙であった。

「うちが……正親町卿お屋敷から暇を頂きましたんは、町子さまが東下りなされた後の侘びしさ淋しさに、よお辛抱しきれんことになった——せいやったもんなあ」

春子は控えの間にさがってから何度も、その文をくり返し読んだ。

春子に手習いさせ文字の読み書きを教えてくれたのも町子ゆえ、その水茎の跡はただ懐しいきわみだった。それゆえ春子は、何故に水戸光圀の密使なるものを自分が見つけ出し、その動静を探るのか、そこのところの事情は知らされず、さっぱり意味あいは判らなかったが、

(町子さまのお云いやすことやつたら命がけで何でもやらなあきしまへんやろ……忠義ちゅうは

そないなもんや）と、かっきりと覚悟を胸に折り畳んだ。
それゆえ春子は、帰り際に、大夫の左近の許へ挨拶しにゆき、今度はしおらしく、
「あんじょうに、お役目はたしますよって、御前ていへよしなに……申しておくれやっしゃ」
と正親町卿への取りなしをことづけ、また裏門から外へ出ると心せくまま、春子は町子のかいた手紙の中にあった東堀川筋三条上ルの柳沢京屋敷へ急いだ。
もう眩しいの暑いのといって居られる場合ではなかった。白く乾いた陽だまりの往還を、こ走りに駈けた。だから背後から見え隠れにつけてくる者に、春子は気づかずだった。
うば柳小路先の人影のない竹藪のところで、いきなり背後から飛びつかれても、
「なんや物盗りどすか」ときいたものだ。それに相手が凄みをきかせ、
「……違う」と羽交いじめにされて、いい返されると、
「いやらっさ、裾泥棒やったんか」逆に組みついている腕へ歯をたて、
「京女を甘うみたら、いけしまへん……手ごめになんぞ逢いますかいな」
がぶりとくいついた。そこで不意に襲ってきた方が狼狽して手を放し、
「痛いではないか……だしぬけに何をするか」
たまげたように悲鳴をあげた。しかし女一人に逃げることはないと思い直したのか、
「これ女、そちは正親町卿の許へゆき、江戸の柳沢の側室になっている町子よりの、何かことづ

けを云いつかって来たのであろう。ありてい正直に吐け。さもないと可哀そうじゃが覚悟せい」

別の侍が刀の柄に手をかけ詰めよってきた。そこまでいわれては春子も、

「……えッ」と、あまりに向うがよく知っているので、びっくり仰天した。

「あの正親町卿の屋敷へ江戸よりの早飛脚が入ったのは昨日の午下り。そして間もなく何処かへ彼処の使丁が行ったゆえ、今日あたりは誰ぞが呼ばれてくるものと見張っていたところ、現われてきたのは女ではあるが其方一人……よって間違いなしと眼目をつけ、かくは後をつけてきたのだ。こちらは一切合財みなよく承知ずみだから、神妙に白状しないと容赦はせぬぞ」

まず引っぱりだした大刀の柄頭で、春子のみぞおちへ突きをくれてきた。が、そこは油断なく用心していたから、そのとき春子はさっと後へ飛び退き、

「何しやはります」と、ぎょっとして腰を落し油断なく身構えた。

「そうか、まだ若い娘とみて侮ったは、こちらの不覚……あの姦物柳沢美濃守の手先になるだけあって、そちゃ仲々やるのう、小太刀でも使うのか」と相手は顎を逆か撫でしつつ、

「だが身にひとつだに寸鉄もおびて居らんではどうしようもないな。先刻背中から抱きついて調べておいたが、胸許には柔かな乳袋だけで、懐剣も持ちよらなんだは、女隠密にしては不覚の一語につきるな。さあ諦めろ」ぐっと帯の間へ手をつきだしてきて、

「何やら硬い手ごたえが有ったような気がする。神妙に出せ、さもないと裸にむき調べるぞ」

逃さがぬように先に袂を押え、ねじ伏せるように肩へ手をかけ迫ってきた。
こうなっては春子も逃げるに逃げられず、切羽つまって思わず、
「……助けて、た、誰か」と叫んだ。しかし相手は恐い顔をしてから、
「ほざくな。いくら喚めいたとて、こんな日中の暑い陽ざかりに樹蔭ひとつない、かかる場所へ通りかかる物好きが居ようか」と、せせら笑った。ところが、それでも春子が、
「た、誰か……」と、一人や二人ぐらいなら逃げられるが、こう取り囲まれていてはと、また呼ばわると、
「……おう」と答えて足音がしてきた。そして近づいたと思うと、
「白昼、何をしているか」と、どなりつけてきた男の影。
そして、いきなり大声をはりあげ、鞘ごとではあるが振りかぶって飛びこみ掛ってくると、
「播州赤穂でも、かかる狼藉者は見た事はないぞ、なんだ……この集団痴漢め」
と、春子に抱きついている男の肩先へ、まず発止とばかり叩きつけた。
鞘ごとといっても先には鉄のこじりが付いているし、中締めには鉄帯がはまっている。
だから殴られた方はたまらない。仰向けに転がり、やっと起き上ると肩を押え、
「いらざる邪魔だ……てしおって、なんじゃ覚えておけ」
捨てぜりふを残すと他の者らと共に、追われぬようてんでに藪の茂みの中へ飛びこんだ。

「すんません、おおきにさん……助かりましたえ」
礼をいいつつ相手をまじまじ見直した春子が、びっくりしたように、
「あんさんは播州赤穂の……小野寺十内さま倅どのの幸右どのとは違いまんな」
てっきり自分を助けにきたのは、そうだと思いこんでいた春子がびっくりしたように、問いかけると向こうも驚き、
「ほう小野寺のお知り合いでござったか。これは奇縁、てまえも同じ家中で不破数右エ門と申すもので……」と答えた。そして首を傾げ、
「小野寺は今日が非番で朝早く出たまま、まだ何処へ行き居ったか判らんで、朋輩のよしみで、かくは暑い陽ざかりの中を探しに参ったのであるが、何処ぞで逢われましたか」
「へえ、お目もじしましたん。だけど何処へ行きなはるか聞いては居まへんどすっせ」
「左様でござったか。なにしろ赤穂から出てきて日も浅く、京には馴染みのない男ゆえ、どこぞで迷い子になっていては不愍でござるでのう……」と、そのまま大股で、またさっさと行きかけるのへ、
「あの……」春子は後を追いかけるように呼びとめ、
「これから東堀川まで参ずるところでおすが、大事おへんかったら付いて行っておくれやっしゃ……なんや、きび悪うおすよって」

と頼みこんだ。すると不破数右ヱ門は豪快そうに、
「よッしゃ、また色気違いの馬鹿者共に飛び出して来られては難儀しよう」
アッハッハと高笑いしながら引き受けた。が、四条筋から三条へ上りかけたところまでついてくると、はっとしたように、
「あの薬売り……さいぜんの竹藪の側で見かけたのと同じ人物じゃが」
不審そうに指さして春子に教えた。
「へえ、あのおひとどすか……」春子も不気味になって立ち止って、
「さっきの乱暴しかけてきやはった侍はんも、関東もんらしゅうおしたが、あの薬屋かて筑波のがまの旗をもっていますよって、やっぱり東国もんやおへんか」と囁やくように尋ねかけた。
「うん、そう云えば何やら可笑しいな」と不破数右ヱ門が唸ったとき、
「……これ待てッ、それなる女」
はっきりした関東弁で呼びかけてきた編笠の三名の武士が追ってきて、さっと近よりざま行手をはばむようにして刀の柄に手をかけ寄ってくるなり、
「いずれの御家中の方かは存じよらぬが、そこもとは係り合いになりたくなくば、さっさと行き過ぎられるがよろしかろ」と、不破数右ヱ門へも尖った声を浴びせかけてきた。

「常陸西山に押しこめの水戸老公隠居所見張りのため、お差し向けの中山七平の報告では、取手川で取り逃がした曲者は一名のみというが、ご老中土屋さまの御状箱で所司代屋敷へ、知らされてきた浜松お七里役の調書には、うろん臭いのが二名で共にまんまと姿をくらましたる由。するとなると町子さまの使いとして当邸へくる途すがら、襲ってきた者らと申すは、その内の一名ではなかったろうかと存ずる……油断はならぬぞ」

柳沢弥太郎のいいつけで柳沢の京屋敷を預かる山田五郎作は、新参とはいえ甲州武川七騎の流れをくむだけに、きっとして眼光を鋭く光らせた。それゆえ、

「へえ、そない云われましたら、そうかも知れしまへん。だけど、この近くで囲んできやはりました編笠のお武家はんは、三人とも、相当のお歴々どっせ、お召物かて上布どしたんえ」

と、春子は初対面の山田五郎作に臆せずに告げた。そこで、

「うん、衣類を見てきたとは、さすが女人だ。しかし高価な上布など着て旅する者は居なかろうから、それならば、ことによると水戸京屋敷の連中ではあるまいか……」と口にした。すると、

「京留守居役井坂兵部は、水戸の老公が隠居する迄は目をかけられていたものときくが、今では

大公儀ご威光を怖れて小心よくよくであるときいていますが」

まさかといったように一人が、すぐ言葉を挟んだ。しかし、

「いや水戸っぽは油断がならぬ。これからは公家ばかりでなく、水戸屋敷も見張りをつけねばあいなるまい」と、断を下すように山田五郎作はいってのけ、かしこまっている春子へ、

「そもじが関東者の怪しい薬屋の面体を見ているとは、もっけの幸いである……人目につかぬ町娘の身なりにて、その者の動静をさぐれ。よく勤めれば其方を推挙なされた町子さまも、お鼻が高かろうが、もしも不首尾の節は面目を失われることになるぞ」

「へえ、判ってま……この身にかえても、気張って勤めますよって」

町子姫の名が出ると春子は素直に頭を下げて、こころよく探索方をひきうけた。

「女人ひとりで心許なくば、当屋敷よりも腕きききをつけるが、時と場合では所司代、町奉行の者も手をかすよう連絡をつけておく。だが水戸の光圀は老かい……その密使じゃ用心せいや」

町子の方のお声がかりの女だけに、五郎作も気をつかってみせた。

が、春子は、ひょんな縁で知り合った小野寺幸右や、危ういところを助けられた不破数右衛門らの赤穂の家来のことを想い出していたので、なにかしら心強い気がして、

「大丈夫でおす、ひとりでかましまへん」といいきった。すると五郎作は、

「では万一の際にそなえ、これなる懐中鉄砲を貸しておこう。当る当らぬは別にして銃声さえす

れば、人が駈けつけ役人も飛んでゆこうというもの」紫ふくさに包んだのを手渡した。
「へえ、お預りさせて頂きまっせ」と、一礼して受け取った春子は、すぐさま心せくまま外へ出た。町子の方から手紙で指図してきた前の関白の鷹司家の屋敷へと取って返した。
　というのは山田五郎作へは話してなかったが、筑波のがまの油売りが屋敷近くでうろついているのを見かけ、用心しようとしていたところを、迎えにきた山田五郎作の手の者にみつかって叮嚀に、柳沢屋敷へ連れてこられてきていたからである。
　さて戻って、欅の大木が目印みたいに青々と茂っている裏門口から、
「満代さん居らはりますか」と春子は正親町家へ奉公していた頃、仲良しだった侍女が今は関白屋敷だったのを思いだして呼んで貰った。
　そして侍女が何事かと出てくるのをつかまえて、先にみかけた薬売りのことをきくと、
「なんや、よお判らしまへん。へえ今さっき来やはったおひとはんどすか……なんや絹みたいな布地の道服たらいうべべに、銀を持ってきやはったらしゅうおすが、近頃は薬屋はんかて妙なものを売りに来るんどすな……」妙ちくりんな顔をして話しかけてくるのに、
「ふんふん」春子はうなづいて居たが、そこまで聞けば用なしだと、
「今日は忙がしいよって、また気楽なときに参じます」と、礼もそこそこに飛び出すと、とんぼ返りで東堀川筋三条上ルまで取って返した。それゆえ驚いたように山田五郎作も、

「えッ、もう戻ってきたと申すのか」呆れ顔で迎えに出たものの、
「だから誰か手練の者をつけてやろうと申したであろう……若い娘ゆえ怖しくなってすぐ立ち戻ってきたのも、判らないではないが、そんな弱腰で大切な御用がこれから勤まるか」
まず開口一番たしなめに掛った。しかし春子が、それに手をふって、
「例の関東者の薬屋が今しがた前関白の鷹司はんへ、銀の袋や絹の道服を届けはったんどっせ」
と告げたものだから、聞いた山田五郎作も仰天して、
「えッ、たったこれだけの時間に、そこまで調べてきたとは、こりゃ恐れ入った話。さすが才女の誉れ高き町子さまが、人選なされただけはあるな」
すっかり舌をまいて感心したが、
「前関白鷹司卿と隠居の水戸老公が通じあっているとなると、先に五代将軍のお跡目に酒井忠清が担ぎあげようとし失敗し、いま青蓮院へ押しこめられて居なさる有栖川幸仁親王こそ、よく見張ねばあいなるまいな」と、山田五郎作と矢並平左は互いに顔を見合せあって首を傾げた。
しかし、その頃。
上長者町宝町東入ルの水戸家京屋敷でも、御留守居役井坂兵部が、
「……ご老公の使いが秘かに入洛してござる。何用にての入京か不明であるが、もし、ご老公の不心得にて、水戸二十五万石に累を及ぼすことになっては、これぞ天下の一大事である」

と、取り乱し喚めきたてていた。なにしろ今の水戸家にとっては大変だからである。

「もし、その使いが京所司代内藤大和守の手にでも捕えられては、こりゃ由々しき結果にもなりかねまい」と、京屋敷の中で腕達者のものを、直ちに選抜させて集めると、

「おぬしらは、ご老公の使者として入洛中の者の、身辺警護をそれとなく致せ。が、守りきれなくなった節は、お家のためゆえ構わぬから、敵の手に渡すよりは、思い切って此方で仕末をせいやい」

物騒な指図を下した。もし京所司代や柳沢の手に捕えられでもしたら生き証人にされ、どんな迷惑が及ぶか判らぬと恐れたからである。そして井坂兵部は悲憤慷慨して、

「去る元禄五年に、嗚呼忠臣楠子之墓なる小っぽけな石墓を湊川へたてられた際にせよ、今回のことにしろ、この京には留守居役として不肖この身が居ることゆえ、せめて一言のお指図なりと賜わらば、かつては御側に仕えていたこの兵部ゆえ、一身を賭しても思召しにそい奉るように働きもするのに、御老公はご隠居なされてより人間不信と申すか、かつての家臣をてんで認めようとはなさらん。あまりといえばお情けないお振舞いである」

ひとりでむくれ返っていた。江戸屋敷の高松衆を恐れていたからでもある。

もちろん京屋敷の中には、水戸光圀にまだ心酔しきっていて、蔭ながらでも老公の意志にそってお手伝いしたいと、秘かに心掛ける者たちもいた。が、城でいうなら城代家老にも当たる御留

守居役の兵部から、断固たる処置を発表されてしまっては、もはやどうしようもなくなって、

「京へ潜入してきた御老公の密使とは……われらも顔見知りの者であろうか」

「いくら守護をせい、もしもの時は刺殺せよといいつかっても、顔も知らんではどうしようもないではないか」と、てんでに屋敷の侍どもは、蔭に廻りぶつぶついうだけだった。

「……柳沢の密使がどうも女人らしいゆえ、ご老公の使いも事によったら女ではあるまいか…」と気がつき、それは口にするようなのは一人もいなかった。

だから兵部も密使が何者か判らぬまま、いらいらしきって、

「一応は保護せいとは命じたが、怪しい水戸なまりの者を見つけたら、御家のためだ斬って棄てい」とまでいいだした。責任を問われまいとするわが身可愛さからである。

前の有栖川幸仁親王のおわす青蓮院の、うっそうたる杉木立の蔭で、上長者町から廻されてきていた水戸京屋敷の者らは、身をひそめ匿れていたが、まさか水戸光圀の使いが、

（……女）とは知る由もない。だから薬売り姿に変装した男女を見かけてもそれが水戸から出てきた好江と、かねて無理やりに隠居された光圀の徳を慕う参次郎の二人とも知りようもない。

そこで水戸侍どもは、覆面で顔を隠しつつかたまって、

「……ものをいやあ、水戸の者かどうかもすぐ判かるが……」とか、

「ここからではあまりよおは、判らんではないか」と囁きあっていた。
薬屋風の二人が門のところに佇んでいるのを、怪しんだのではあるがどうしようもなかった。
さて、好江の方もまたまさか木立の茂みの中に同じ水戸の家中の者が、自分らを狙って居ようとは心づかずだったゆえ、低い声で参次郎へ、
「こうして御門の前まで来たものの、親王さまに何んとお告げしたらよろしいやろ」
好江にすれば困っていた。光圀にいわれて来た、親王の御側近くにあって関東との手引き役を勤めるつもりだったのに、参次郎が探り出してきた話では難かしくなっていたせいである。
かつては光圀側近でもあった筈の、留守居役の井坂兵部の命令で、杖とも柱とも頼みたい相手の京屋敷が、高松派になったとのことなので驚いて、また引き返してきたのゆえ、
「もしも何かございましたら、上長者町へでも……」と親王さまへ申し上げてきたのを訂正にきたのだが、さすがに好江もいい出しかね門前を行きつ戻りつしていたのである。
が、最前は、そっと様子をみにきて、老公心づくしの道服や銀を献上して早々に切り上げてしまったから、やはりもう一度は、どうしても目通りし話をせぬことには役目がすまぬ。
「親王さまへ思いきって何事も申し上げなされ、そして水戸へ取って返し御老公へ有りのままを、申し上げるしか、こうなっては処置もとれますまい」と参次郎に励まされて好江も決心し、
「いい憎いことだが、では思いきって……」と耳門から中へ入ってゆくと、

「またお目もじを……」顔に見覚えのある役僧を見つけるなり声をかけた。
「はいはい、すぐ申し上げまする」案内されて御拝殿裏手の本坊まで行くと、
「また何用じゃろ」と親王も怪しんだ顔をみせ、不審がるので、
「実は、水戸の京屋敷の者らが当てにならぬことが判明しましたので、取り急ぎそのお知らせに参上しました」と訴えたところ、
「……うむ」と、かすかに一言だけ静かに親王は目をとじられたまま仰せられた。
そして後は何事もなかったように、眼をあけられ、にこにこして、
「わざわざよく知らせにきてくれた」とのみのお言葉であった。そこで、
「……はあッ」と頭を下げたままではあったが、好江はかしこまった。しかし、
（さすがに英明の噂も高い親王さま）すっかり参次郎も感じ入って、
（もしも春日局の孫どもが互いに策謀をめぐらして団結さえしなかったら、今のように故徳川家光の末子の綱吉を第五代将軍に仰ぐようなことはなく、この親王さまに東下りして頂いて将軍家になって頂けたろうに……）と、口惜し涙にむせんだ。もちろん好江も同じ想いにかられ、
（この親王さまさえ将軍家におわさば御老公が東方を代表し、天下の副将軍になられ、東西の区別や差別もなくなって統一されたであろう。さすれば箱根の山を天下の権（けん）として日本を二分し、以東は金本位制で何両何分何朱の勘定なのに、西は関東とは違う銀本位制で何匁、といった勘定

ではなく同一算用になるゆえ領収証一つ書くにしても、一銀いくらとか一金何両也、としなければならぬ庶民の煩わしさも、さだめし一掃されたろうに……）に悲憤の涙にかきくれ、

「水戸京屋敷の井坂兵部めが、体制べったりで公儀を恐れ、われらへの協力を拒もうとも、いつか時節も到来し花咲く折りもありましょう。今は押しこめ隠居にされ竹矢来の囲地へとじこめられている身でも、御所より水戸の御老公へ密勅さえ下れば、われら勤皇の志をもつ者は天下に、ごまんと居りますれば、必ずや宮さまの世になすことも不可能ではござりますまい」

とまでいい切って、まだ未練そうに掌で顔を覆ったままの好江を、参次郎が、

「さあ、ご無礼を仕つろう」と促がし御座敷を退出。役僧に導かれるままに玉砂利をしきつめた境内の石畳を渡って、耳門から外へ出かけたが、その途端であった。

「……あッ」先に表をのぞいた好江が、悲壮な声を送らせて、逆戻りしようとした。

参次郎もはっとしたけれど、邪険のようであるが、背中を押し返し、

「いかぬ……ここで踏み止ったり、境内に戻っては青蓮院へ迷惑をかけることになる。ということは取りも直さず宮さまに累を及ぼすことになるのですぞ」と背後からたしなめ、

「いいではないか、潔よく二人で斬り死するのも、宮さまの御為、水戸御老公への忠と思えば、きっと覚悟もできようというもの……」と囁くごとくにいましめた。

「はい……」好江もうなづいた。だから参次郎とつれだって肩を並べて外へ出るなり素早く耳門

の戸は脊でかたくしめ、円陣を作って二歩間隔で取り巻いている中央へ、
「斬らば斬れ」「殺さば殺せ」といったように憶せずおどり出た。
そこで、すこし呆気にとられつつも、ここで騒ぎを起してはまずかろうと、
「こりゃ、それなる両人……」
春子の注進で押っ取り刀で駆けつけてきて、包囲していた山田五郎作が、
「手間ひまは掛けぬつもりじゃ。われらと共に柳沢屋敷へ御同行を願いたい」と大声をかけて呼ばわった。
が、それを聞いて驚いたのは、前から杉木立の茂みに匿れて、ためらっていた水戸屋敷の面々である。すっかりこうなっては狼狽して、
「突如として降って湧いて現れてきた一団が、まさか柳沢の手の者とは知らなんだが……」
「こりゃ一大事じゃ。あの薬売りに化けた二人が御老公の密使であるなら、柳沢の手の者に連れ去られては、水戸二十五万石にとっては大変なことである」
「井坂兵部さまの仰せでは、所司代や柳沢に奪われては水戸へ大公儀より、何かと難癖がくるは必定ゆえ、かまわぬから斬り棄てえいとのお沙汰であったぞ」
「そうだ愚図つかんと早うに取り戻すか、どうにも手にあまらば叩っ斬らん」
もしもの時の用心に腰へ下げてきた柿渋染めの手拭で、一同は覆面すると刀の目釘を濡らし、

「それッ」とばかり木立から駆け出した。そこで山田五郎作も狼狽、
「せっかくの獲物を奪われるでない」俄かに飛び出してきた一団に対し、
「刀にかけても退くではないぞ、あの二人をつかまえぞこねては取り返しがつかん……」
自分が、まっ先になって抜刀した。だから柳沢の連中もみな殺気だち、
「近寄ってきてみい、刀の錆にせん、さあ片っ端からかたづけてやる」
いきりたって水戸侍を迎え、それぞれ大刀を振りかぶって構えた。
「……この隙である」と参次郎はすかさず好江を励ました。
しかしとはいうものの、女づれで二重の包囲を脱出できる見込みはたたない。
「私めは此処へ放っておかれ、貴方さまだけでも西山在の御老公さまへ、事の成り行きを伝えに行かれませ」と好江は唇を震わせていうのだが、
「そうはいかぬ、おてまえは御老公の使いだが、わしは一介の浪人者」
あくまでも参次郎は自分が残って好江を逃がそうとする。が、水戸派も柳沢派も共に白刃を振って激しく斬り合いをしてはいるが、互いに目ざすは二人の身柄ゆみ、とても駈け抜けようにも隙などは有りはしなかった。

青蓮院の死闘

「われら通りがかりのものでござるが、白昼の剣戟沙汰は如何でござろう」

いきなり割りこんで、供をつれた武士に飛びこんで来られたのには、

「えい、いまいましい邪魔者めッ」山田五郎作も舌打ちして唸った。

水戸侍の面々も、主家の名が出てはまずいと思ったのか、柿渋の布地で覆面のままで、顔を見られまいとして駈け去ってしまった。そしてとり残されたかたちの山田五郎作も、

「てまえ浅野家にて家老を勤めまする大石内蔵介と申すもの。これなる両名の者を預かり申す」

はっきり名をなのられ断わられてしまい、二人を連れてゆかれては追いかけもできかねた。

「鳶に油揚げをさらわれるというが、まんまと持って行かれてしもうたわい」

歯ぎしりして残った柳沢屋敷の山田五郎作は口惜しがった。しかし、このていたらくでは引揚げも出来ぬ。そこで、

「あいや当院におられる前の有栖川宮さまに、お目通りを御許し願いたい者でござる……お取次を所望する」

はっきり柳沢の家臣と名のって五郎作は申し出た。これには院の方でも、

（柳沢と申さば将軍家の御側役を勤める大名で権力のある者である。こりや疎略に扱っては後が大変である――）

とは、わきまえて居たから、面会を嫌がられる親王さまをなだめすかして、御居間へ山田五郎作を案内した。

「先刻、水戸よりの使者が薬売りに化けて、ここへ伺候して居りましたが、如何なる用向きにてござりましたろう……まこと失礼ではありますが、役儀のてまえお尋ねする次第」

両手を前へつき平身叩頭の形はとったが、激しい口調で詰るようにした。

それゆえ親王も、どきっとさせられ内心では、

（もしも水戸の隠居の思惑などを口外しては、これは大変なことになろう）と、はっとされた。

そこで用心されて、さも内緒話でもうち明けるごとくゆっくりと、

「まこと恥しいことであるが去る元禄五年十二月一日の京の大火で、身の廻りの品々まで一切の物がなくなり不自由して居るゆえ無心を申したのである」と仰せられた。

山田も御居間内の見すぼらしさには入ってきた時から内心では面喰っていたので、この話は嘘ではあるまいと考えた、そこで謹しんで、無礼をおわび申し上げてから、

「……恐れながら、なにも水戸などをお頼りにならず、われらへも御下命なされませ。主人柳沢美濃守は必らず思し召しに添うでござりましょう」と、いい残してから引きあげた。

さて、その頃。

（なんとか柳沢の手からは救われたものの、このまま播州浅野の京屋敷へ伴われて行けば、やがては水戸側へ引き渡されようやも知れぬ……）

と案じた好江は、銀杏並木のくぐつ坂まで差し掛かると身をかがめ、

「……無礼はいずれ後日」と、さあっと跳躍して銀杏の大きな樹にぶら下がった。

「赤穂の御家中の方々に御礼申す」と、参次郎もすかさず呟きざまに好江につづいて飛上り、銀杏の葉蔭に潜りこむよう匿れた。が、あっという間もない突嗟の事ではあるし、並木の道ゆえ木の葉が冠さって続き、辺り一面が薄暗い。

もちろんこのとき、大石内蔵介も二人が野猿のごとく樹に飛びついたのは知っていた。しかし見るに見かねて仲裁役をかって出たものの、どう扱ってよいか仕末に困っていたゆえ、

「如何しましょうか」と左右から聞いてくる供の者へ首を振って棄ておけと命じた。

そして大石内蔵介の一行は何事もなかったように、すたすたそのまま行ってしまった。

さて樹上で大石の一行をやり過した二人が、さっと下へ飛び降りたところ。

どうも、向い側の樹の蔭に誰かが居る気配で何か動いたようにみえた。

「はて何者であろう……」と参次郎が怪しんで近寄って行くと、まだ若い娘だった。

そこで苦笑して好江の許へ引き返そうとした。が何処かで見覚えのあるような気がした。そこ

で、まだ銀杏の樹の根方にうずくまって居る好江の許へ戻ろうとしたのをやめにして、
「あいや、そこな御女中……」と、参次郎は声をかけながら近づき、
「これ娘……其方は、このわしを見知っているのか」と問いだした。
　すると娘は脅えたように後退りしかけた。だから参次郎も、これは怪しいと思い、
「これ待て……」と逃げようとするのを、捕えようとした。
　が向こうも、気配をそれと察したか参次郎が手を伸ばした時は、さっと身軽くとびはね、さながら野兎のごとくそのまま駈け出した。
「おのれ……逃がすものか」と、後を追いかけ、くぐつ坂を下って修法寺の山門まで走ってゆくと、出逢いがしらに若い侍が、娘と参次郎の間に割って入るように飛び込んできて、
「この狼籍者め……白昼、若い女ごを捕え、手ごめにせんとは、なんたる事か」
　手にした鉄扇で打ち掛ってきた。もちろん参次郎も負けては居らず二度、三度は空を打たせて立ち合いはしたが、何しろ相手が強すぎる。
　そこで、好江のことも気になるので参次郎は引き返した。が、さて、その後で、
「てまえ播州赤穂五万三千石の御家中にて、御膳方を詰める大高源吾」
　とその若侍に名のられて、びっくりしたのは春子である。
「まぁ、貴方さまも浅野内匠頭さま御家中のお方にござりましたか」

小野寺十内の跡目の幸右と出逢った後は不破、そして今は大高と重なる奇縁に面くらい、その上、目ざす薬売りの二人を襲わせたら、やはり赤穂の武士に邪魔されてしまった妙な巡り合せに春子は眼をむいた。

「ほう浅野の家中に他にもお知り合いがござるのか……ならば、まんざら無縁の女でもない。よい具合にてまえが、通り合せたは良ろしゅうござったな」

大高源吾と名のる若侍は、微笑しながらさっさと寺の山門ぞいに曲がってしまった。だから春子としては、助けられたには違いないが、余計なお節介をされた気分になり、

（もう顔を知られてしまった上はひと想いあの薬屋に捕えられ、逆手でもってゆく手もあったのに、飛んだ邪魔に入られてしまったおかげで取り逃がしてしまった）と、くさくさせられた。

だから、ひとりで口を尖がらせ、さてこれからどうしようかと陽ざしをさけ、山門の下の鐘楼の落す影の中で休んで居ると、汗をふきふき青蓮院から出てきた山田五郎作が通りかかり、

「面目ない、せっかく取り囲んだのに逃がしてしまった」照れくさそうに声をかけてきた。

そこで春子が寄って行き、薬屋にまた出逢ってしめたと思ったら、襲われていると見誤まられ思わぬ邪魔が入った旨を、手短かに話した。

「左様であるか……あのまま二人を赤穂の京屋敷へ連れて行かれしまわれたのでは、もはや手も足も出んと思ったが……それなら、まだ引っ捕えられる機会もあろう」と、聞いて喜んだ。

しかしである。ほっとした山田五郎作に引きかえ春子はむくれきっていて、
「いくら赤穂の京屋敷が、この近くにあるからといやはっても、次々と出て来られ邪魔されたんでは、かなしまへんどっせ」と緑の翳で、だんだら染めになった顔をしかめた。
さて、その頃。
烏丸小路にある播州赤穂の京屋敷では、珍しく上洛してきて、知人の居る山科へ行って戻ってきた大石内蔵介を囲むようにして、当時はまだ奉公中だった不破数右衛門や、大高源告が、
「本日は何の因縁か存じよらぬが、次々と狼籍者に出ッくわしましたが、一天万乗のおかみのおわす王都でありながら、まったく治安がなって居ませぬな」などといい合った。
しかし大石内蔵介は、
「まあそういう事は口外するものではない。聞く者によっては、京所司代や京町奉行へのそしりとも取られよう、軽率というものであるぞよ」と、たしなめた。そして、
「江都にせよ御当地にしろ、おかみ御政道とは、なにも一般の治安などは行政上あまり問題にならぬものだ。が、それをとやかく甲すは、謀叛と同じようなものと心得るがよい」
とも口にして、教えるごとく若侍共へ注意を与えた。
「井の中の蛙は大海を知らず……と申すが、播州あたりの五万三千石の赤穂田舎大名の家来のご

ときは、まったく天下国家の大事をわきまえず、自分勝手な行動をとりおって、こちらの迷惑など意に介せぬのじゃな……」と不気嫌そうに柳沢弥太郎吉保は眉をしかめた。

京屋敷の山田五郎作から、せっかく水戸光圀の密使らしき男女を引っ捕え、はっきりとした手証を握りかけのところを、大石内蔵介なる浅野内匠頭の家来のために邪魔をされてしまい、とり逃がしたとの知らせをうけたばかりなのに、また町子からも、

「うちが幼ない時から可愛がっていた春子ちゅう娘が、天下のためと水戸の密使を必死になって、京で追いかけまして居たんどっせ……それなのに可哀そうやおへんか、大高源吾とかよぶ赤穂の侍の感違いのお節介のため、まんまとしくじってしもうた――と、こない口惜しがりを書いてきて居ますのえ」

と、飛脚便でもたらされた封書まで、突きつけられるようにされては、見せられた弥太郎としても立腹せざるを得ない。

「……ただ正義派ぶって飛び出してきて、その春子なるものや京屋敷の山田らの妨害しくさったは、なんたる愚かしき田舎侍どもであるか。まあ浅慮のそしりをここからでも怒鳴りつけてやりたいくらいものである」とも弥太郎は低く呟いた。そして、

「浅野内匠頭の本家は芸州広島の浅野。あの家柄は、祖先の浅野長政以来、弾正を名のる非仏派の血脈。じゃによって当代（綱吉）さま発布なされた生類憐れみの令も、表向きはどうであれ、

実際は非仏脈の者らが皮はぎをして利得をあげるのを弾圧するために、獣を殺すな皮をはいで商うなというのが趣旨。それゆえ獣の中では一番多くて捕えやすい犬を、みな隔離するように犬小屋へ収容し、彼らの商いの邪魔をし生計を窮乏させているのが今日の現況ゆえ、事によったら、その存念によって、御政道を怨じ故意に水戸光圀の尻押しをなし、浅野めの家来共は謀叛を企てて居るのではあるまいか」寝物語に町子に思うがままいって聞せたところ、

「そりゃ案外と本筋やおへんか……芸州侯みずからでは事が大きくなりまっしゃろ、そんで分家で火事好きと噂の内匠頭どのへ、露払いの恰好でおやりやっしゃと突いとるんどすやろな」

と答えられた。なにしろ町子のように公家育ちの者は、浅野のような非仏派を昔から人間扱いしない癖がある。それだからして頭ごなしに怪しんでかかっていたのである。

「公家」に対して「地家」とか「地下（じげ）」とよばれる存在は、ありていに云えば高松塚古墳が作られた七世紀の頃に生まれたもので、

「藤原」と書き和訓ではトウならぬ「ふじはら」と呼ばせた弁髪の一団が白村江の戦いで捕虜にした者らを先導にして、済州島づたいに渡海してきて進駐軍となった時。

それまで日本征覇をしていたクダラやコウクリ。シラギの面々が既に朝鮮半島は弁髪族に占領され、戻れる祖国もないところから帰順し、今でいう職業軍人となって彼らよりも弱い日本原住民を捕えてきて、各地の収容所へ入れたり奴婢として売買をした。後にそうした被占領民の子孫

の中には、新羅三郎とか八幡太郎とか、それらに仕え武士として出世できた者も現われてきた。

それに、もともとが半島系の帰化人よりも、更に低くみられていた日本原住民の末裔ゆえ、「従五位」より上は公家では与えず、その官名も、税金とりの〈主税〉、水くみの〈主水〉、配膳係りの〈内膳〉、掃除夫〈掃部〉、検察官の〈弾正〉と特殊に限定されていたのは前に述べた。

ところが戦国時代を迎えて騎馬民族の子孫だけに騎馬戦で名をあげ、いわゆる戦国武者となって立身し、やがて神道派の徳川家康を担いて天下泰平の世を作ったのだが、公家とすれば反対勢力を喜ぶわけはなかった。つまり正親町卿のごとき格式高い殿上公卿でもその妹の町子を銀十貫目で柳沢へ身売りさせねばならぬ、といった落はくぶりだったゆえ、家老のことを、「太夫」とよぶような、浅野のような家系を町子は忌み嫌っていたのである。

この町子の書き残した『松影日記』をみれば、どうして浅野内匠頭が睨まれていて、即日処分の重刑に処されたのかも、よってくる理由が被差別であったとはおぼろげながら判る。

なにしろ日本歴史の根底に流れていたものは、やはり公家対地家、つまり、かつての占領者と今や立場を換えた被占領者との間の烈しい憎しみ合いという事になる。

そして当時は、旗本でも小金のある者は、みな京から公卿の娘を購入して側室にしていた。

将軍綱吉にしろ正室から染子の方に到るまで、みな一人残らず公家の出である。

ということは明け暮れ彼女らから、綱吉の初め老中どもは色んな事を寝物語に吹きこまれてい

た事になる。それゆえ浅野内匠頭が殿中刃傷に及べば即日切腹といった事にもなったのだろう。

が、この時はまだそこまでは行っていない。弥太郎は、豊満な町子の肢体を抱えこみ、

「……如何すべきや」とそれゆえ営みを続けている間も、しきりに頭では考えていた。

なにしろ元禄に改元するまでは、常時一名という職制を破ってまで、寺社奉行を三名から多いときには一度に四名まで増やし、

「転白」とか「鉢ひらき」と俗称される原住民系の者らの転宗政策をとった。

が、千余年の長い血の流れがそうさせるのか失敗におわり、やむなく勢力を削ぐために彼らの利益をあげて居る製革業を弾圧せんと、憐れみの令を出したくらいのものである。それゆえ、

「……こりゃ放っておけぬし、とても一筋縄にてはゆかぬ」

覚悟をきめた弥太郎は、翌日登城すると水戸屋敷から用人を呼び、

「水戸の老公が、前の有栖川宮よりの借銀の申込みをうけられているやに聞くが、おかまい押込隠居の身分を……あまりにも軽くみられるやに想う。よって御伝えあってしかるべし」

御三家の一つゆえ言葉づかいは丁寧だが、釘をうつような云い渡しをきびしくいった。

「さてこれで……四国高松より養子にきている水戸中将付きの者らは、より厳重に光圀を見張るだろうから、まあ老公の野望もうまく納まろう」とは安心したもののやはり気になるのは日本原住系の者どもの事である。これは昭和になってもまだ続いていた問題で、

「民族融和事業会」といったものが、かつての内務省時代にも警保局にあったごとく、一つの大和民族とはいえ今でも為政者にとっては厄介なものである。

だから元禄時代の柳沢弥太郎が懊悩したのも無理はない。そこで出入りの儒学者細井広沢を呼び寄せ、何かよき対策はなかろうかと下問してみた。それに対し、

「この国のように一見は一つの民のごとく見えても、その実、薩摩と奥州では話もできぬようないろんなのが混って居ます所では、統一的な信仰が要りましょう」と答えられた。弥太郎が、

「その通りである。よって御当代さまには、仏の教えをもって同化させようとしているのだがさっぱり効果なしで困っていなされるのだ」と打ち明けたところ、細井広沢は、

「いや仏教、神道というのではなく、この国では天皇教といった信仰がござりまするで、それにそって御政治向きもなされましたと如何さまなもので」と進言された。

「左様か、水戸の隠居は密勅でも賜り己れが天下征夷大将軍ともなって、死花を咲かせんと策謀しているが、この弥太郎には天朝さまを利用するような考えはない……が、何と致すべきか」

「水戸の御老公のごとく湊川に、楠木正成の墓をたてるような姑息な事はせず、もって天下政道のため、柳沢さまでなくては出来かねるような、思いきったことをなされましては……」

「うん、如何なる方法かによって、われら幕閣の者も、天朝さまへ勤皇の至誠を捧げて居るかを世に示したいものである」と弥太郎も考えこんで、しみじみと腕組みして唸った。

寛永寺の宮様

「われらは天朝さまをもって尊しとせねばならぬのに、歴代の御陵の荒れ方がひどく、百姓どもが鍬鋤で盗掘している有様。よって、この弥太郎の私費によって、奈良朝から飛鳥朝の山陵の修覆を致さんとする……と宣言して、元禄七年から奈良、京、大阪の御陵を次々と修理して、高松塚古墳まで四年に及び一々盗掘などされぬようにしているときが、よくも続くものだのう」

他から聞きかじってきた話の受けうりで、菅野三平が苦笑しながら洩すのに、

「まこと、まこと、初めは、水戸光圀への対抗上、人気とりに始めたものと思っていたが、よくも続けて居るものよのう……殿の御勘気をこうむって不首尾となり先年御暇を賜わった不破数右エ門のごときは、ぁぁいう短気者ゆえ、柳沢めの詐りであるとまでいい居ったが、四年間にわたって御陵古墳修理を続行とは、なかなかやれぬこと。莫大な出費でもあろうな」

感心したように、早水藤左衛門もうなづいてみせた。

つまり高松塚古墳の壁画が今月まで鮮明に伝わってきたのも、この時の柳沢弥太郎吉保の尽力による賜物で、大正元年に従三位の追贈があったのも、これらの功によってである。が、それは現在での話である。

当時の赤穂の江戸屋敷の若侍たちにかかっては、

（十八歳で小姓、二十三歳で小納戸役、二十八歳で従五位下出羽守に任官、三十一歳で大名となって御側用人、三十七歳で川越七万二千三十石と加増されて老中格、四十一歳で左少将に任官し大老格、四十七歳の時には、生国であるという由縁から、従来は徳川一門の外は封ぜられる前例もなかった甲府城主となり、領地預地共では二十四万石の大出世……）

といった江戸開府以来の異例の立身をとげた弥太郎吉保が、よく噂される訳などなかった。

中小姓役の大高源吾、武林唯七、貝賀弥左らも、やっかみではないが、

「当代まれな出世人ゆえ、相当に悪い事もしてござろう。まあ歴代の御陵修理なども、いうなれば罪滅ぼしという処であろうか」などと話し合った。そして、早水藤左衛門のごときは、

「あの柳沢というのは君側の奸物、御公儀の御政道を誤るものである」

とまで極言する仕末だった。菅野三平のような若いのにかかると、

「中野に大きな犬屋敷をこしらえ野良犬をどんどん集めて、大公儀おんみずからがお飼いなされるは仁慈の思召しによってかも知れぬが、近在の者は犬の遠吠えでろくに夜も眠られぬ由。ありゃいかん、天下の大悪法という他はないな」と目くじらをたてた。

といって元禄八年五日に犬小屋御支配なる御役向きまでが出来て、十一日から中野にできた大きな犬屋敷へ、江戸中の野良犬が集められたのは、なにも、

（将軍綱吉がいぬ年生まれだから）といったこじつけからではない。

大化の改新のとき、藤原鎌足らの部族つまり仏教をもって入ってきた連中によって、追われた蘇我一族の氏人（うじびと）の末裔が各地に散らばった。はっきりと漢字で、

「鞍作り」と〈日本書紀〉にも記載されている彼らだから、騎馬民族の子孫として山で獣をとる狩人や木こりになったが、里へ下って馬追いになったり馬借とよばれる馬子にもなった。

が、戦乱時代に入ると馬にのれる彼らは武者になって、おおいに武名をあげるのもいたが、商工に身を転じ鎧や馬具作りの皮革業を営なむ者もでてきた。

それゆえ大阪合戦後は、かつては侍だったものが牢人し皮はぎ皮作りともなった。なにしろレザーやビニールのなかった当時ゆえ、やがて皮革は袴や足袋などに用いられ繁昌した。

そこで、将軍綱吉の生母於玉が帰依していた知足院（のち護持院）の隆光が、眼をつけ転宗させようとし宗門取締りの寺社奉行を一度に何人もおかせたが効果がなかった。

藤原氏に追われた先祖の怨念が、（西方浄土嫌い）にこりかたまって居たから、寺社奉行の三人立て四人立てをして、いくら転宗を求めても応ずる者はなかった。そこでやむなく。

「生類憐れみの令」が出されて、生きものを哀れめ、殺すな、皮をはぐなと発令された。そして昔と違って山へ入って獣をとるより、手近かの野良犬が対象にされて、六尺棒で、

「犬も歩けば棒に当る」の歌留多のように撲殺されていた当時のことゆえ、

「捕獲され皮をとられぬようにせよ」というので犬小屋も各地に作ったのである。

中野に大きな隔離収容施設が出来たのもその為であるが、赤穂の家来でそこまで知って居る者は、すくないからして勝手なことを言い合って居たのである。

しかし後西帝第六皇子で今は上野寛永寺の五世の法灯をついで居られる大明院公弁法親王は、「これは困ったことである」と世を案じ、しきりと胸を痛められていた。

この親王の御生母の六条局定子は仏光寺家の出であったが、表向き梅小路大納言の娘となっていた。

そして、この大納言の実の娘が伊達騒動のあった寛文四年十二月に、将軍綱吉へ縁づいてきた鷹司関白の信姫について東下りして、梅小路の局として大奥で勢力をふるっていた。そこで、「ぜひとも将軍家との御対面の取りなしを……」と親王は彼女を通してかねて求めていた。

「よろしゅうございます」引き受けた梅小路は折あらばと待っている内に、

「わしと詩歌の応酬をなせるような者が、はたして居るであろうか」

学問自慢の綱吉が大奥へきて、つい口にしたことがある。すると、それに対して、すばやく、

「恐れながら東叡山に居りまする」と申し出たのが梅小路の局だった。そこで、

「ほう、わしと詩歌をきそえる程の学僧におわすのか」と感心した綱吉が、

「それでは」と、料紙に筆墨をもってこさせて、それに一首書きつけて渡すと、梅小路はかしこ

まって受け取り、

「では、これを上野の宮様へ……」と夜の内に、公弁法親王の許へ使者をたてた。

親王もかねて心頼みにしていたところゆえ、

「……そうか」と使いをまたせ、直ぐさま返歌をしたためて持たせた。

だから朝になって、綱吉が大奥を出ようと御鈴廊下までさし掛ると、梅小路の局から、

「恐れながら……」と、前夜の返歌が、すぐさま差し出されたのである。

親王が先の後西帝の忘れ形身で、前四代将軍家綱のために押しこめにあわれ、憤死なされたのは綱吉もよく知っていた。

それだけに、まさかといった表情で受け取ってみると、まぎれもないまじめな返歌だった。

てっきり怨念を抱いて居るものばかりと思っていた親王が自分のために、夜中に直ちに一首したためて届けてきたという事が、綱吉にすこぶる満足感を与えたのだろう。

「……寛永寺へまいるぞ」と二日ばかり間をおいて綱吉はいいだした。

そして上野へゆくと本堂で参拝のあと、公弁法親王に持参の経書を講義して聞かせた。和歌だけでなく漢籍にも教養のあるところを、おおいにひけらかしたかったのであろう。

親王は将軍綱吉に逢ったら、庶民の迷惑になっている各地の犬小屋のことを諫める気でいたの

だが、なにしろ座につくやいなや、しかめっつらしい顔をして、いきなり、

「孝は百行の始めにして……」もったいぶって切り出されては、二の句もつげなかった。

なにしろ生類憐れみの令が、将軍の生母於玉の方の願いで出されているのを、よく知っているだけに親王は言葉を封じられてしまったのである。が綱吉は、

「宮さまも亡き後西帝の冥福を願われ孝の道を守られるがよい」と、後に江戸の名物となった中堂、吉祥閣、法華堂、常行堂などの工事寄進を、その場できりだした。

後ろめたさがあっての申し出であろうとは考えたが、仕方なく親王も心よく礼をのべた。

しかしである。それくらいことで、公弁法親王としては、お気持ちがおさまる訳はない。

「いくら今になって建物など寄進して貰うたとて、亡き後西帝の御憎念が、それで消え去る事はあるまいに……」と無念がる親王へ、訪れてきた梅小路の局は意見するがごとく、

「慈眼大師さまを開祖として、準后公海さまが二世となられた東叡山寛永寺の、五世の御身分を、まずまずお考えなされましょう」と口にした。しかしそういわれても、

「そりや、将軍家の参詣が多くなり供物も増え、諸堂の寄進をうけるは寺として有難いことには相違ないが……」

やはり親王としては、それだけでは満たされぬ想いを、伯母の立場になる梅小路に訴えて、

かきくどいたのである。

しかし将軍生母於玉の方と同国人ゆえ帰依が厚いといわれ、そのため普通ではなれもしない、「大僧正」の位まで任ぜられた護持院隆光の勢力が、次第に大奥を覆いつくしそうなのを何んとかして防ごうとしていた梅小路は、甥の親王を叱るごとくに、きっとして、

「いけませぬ。ここで弱気になられては、せっかく東下りなされてきた甲斐もないではありませぬか」声を荒々しくしてたしなめてきた。

そして、自分が伴ってきた公家の娘らが、如何に綱吉の寵をうけるのに、必死もつしであるかをもっけ加えて詳しく話してから、酸っぱい顔をするのにもかまわず、厚化粧の白壁のような顔を硬らせっぱなしで、

「宮さまも京のため此処は気ばって下されませ。なんとしても将軍家を、自家薬籠中のものごとくに致さねば、京はまたまた迫害され不安のどん底に御所や堂上方へ落ち入りまするえ」

と励ましをきつくいった。

つまり家光の頃は三百万石程度だった将軍家が、次々と外様大名を取り潰して所領を増やし、今では五百万石を越しているのに、京の御所は相変らずの僅か三万石きりである。

とてもこれでは敵わぬものの謀叛人扱いされた後西帝のような憂目が、また見舞ってこぬように、なんとかして京を守る楯の役目を、この江戸でして欲しいというのである。

もちろんその為には寛永寺をもりたてて、大奥へ伸びてきている護持院の勢力を、親王の努力で何んとかして食い止めて貰わねばと、やっきになってかきくどくのであった。

だから親王としても、もっともな話であると、やむを得ず点頭はしたものの暗い翳りを額にみせた。女人ならば身体の秘所で相手を押える手段もあろうが……と親王としては思い悩んで難かしい表情をみせたのである。

が、この上野寛永寺の根本中堂の建立開始にあたって、千載一遇の機会とばかり眼をぱちぱちさせている者もあった。紀州有田の別所から出てきた文左衛門とよぶ男だった。

（噂にききやあ将軍さまは、寛永寺の中堂は浅草寺にも劣らぬ規模にし、用材は極上のものを金に糸目をつけず建立せいとの仰せじゃそうな……紀州から運んできた蜜柑は、やすく仲買人に相模で買い叩かれてしまったが、残った銭で何とか材木を片っ端から買い占めて、これで目にものみせるぞ、儲けをせにゃならんぞな）とすっかり意気ごんで、有田別所から一緒に、ぼろ船にのせられてやってきた者らを集めると、

「生れ在所の有田湯浅は俗にいう橋のない川の向こう地。よって人外とか界外といわれて百姓衆から、石打ちされたり棒をもって追っかけられて、わしらは人にあって人にあらずと、獣なみの扱いをされ差別されてきた……それゆえ常人は命惜しさに恐がって乗りこまぬ船に、死なしても

よいやっと無理やりに入れられた……ところが、われらの守護神白山さまの御加護のせいで、鬼のような船主や、いつも丸太をふり廻して、わしらをぶん殴り通しだった大船頭が、ふいに襲ってきた竜巻で跡形もなく持ってゆかれていなくなった。もちろん吾らの仲間の権や松も、やはり突風に吹きとばされ海中へ消えていなくったし、その後も暴風に叩かれ時化の大雨でいつ沈むかと帆ももぎとられて漂流。こりゃみな、おっ死ぬべえと思って諦めていたのが相模の沖に、沈むのだけは免がれて辿りつけたのは、みなもよく知っての通り……」

と、まず鹿つめらしい顔でいって聞かせてから、さておもむろに一同を見渡し、

「また湯浅千軒のあの土地へ戻って、百姓衆に見つかったら叩き殺されても泣き寝入りといった暮しに戻るのも厭やだと、こうして江戸に踏み止まっているが、いつまで蜜柑を売った銭が残っとるわけやない……そこで考えたのだが、みなにぜひとも力を貸してほしいんじゃ」

と、いってきかせたところ、文太とよぶ船中から文左エ門とうまの合ったのが、

「へえ、どうせあの暴風雨で叩きのめされ、そのまま海の藻屑になるものと覚悟をつけてきたわれらゆえ……万死に一生をえて相模の浜に辿りつけたときに、これからは、おまえさまをわれらの親方ときめたのだし、何事であれ御指図通りにやりやしょう……」と一同を代表するがごとくに、意見を口にした。

「そうか……ではいうが、近かく上野寛永寺で将軍さまお声がかりの大工事が始るという。とな

りゃ上のやることは下もみな見習うというから、町の者もみな普請をやるようになるじゃろとわしは想う、となると湯浅あたりでは誰もが山へ入って拾ってくれば済む雑木さえ一束何十文も、銭をとられる生馬の目を抜く江戸のこと……残りの銭をここで分けるによって、各地へ飛んで山木の買い出しにかかってほしい。もちろん白山さま氏子に山者はきまっている。だから同信心の仲間内ゆえ代銀は後払いとして、銭に換ってから支払いということに話をつけるのだ、えらい仕事とは想うが紀伊へ戻ることを考えれば、それ位は我慢してやってくれ。向こうなら木の実をとってくだいて雑炊にしても飢えをしのげるが、お江戸では薪だけでなく口へ入れられる物も、みな銭を出さんことにはならん土地柄だ。在所へ戻るのが厭やだったら、ここ一番おおいに頑張ってほしいもんだ……」と、判りやすく一同へいいわたした。

そこで蜜柑船にのせられ半死半生で、文左衛門と共に辛うじて助かった連中も合点して、

「お江戸で暮してゆくには銭がいる……そのためにや銭儲けするしか仕方ないのは、こりや当たり前の話じゃわ」

「湯浅にいた頃のことを想えば……野宿して旅するぐらいは訳もないこと。それじゃあ、てんでに手分けして山の木を後払いの話をつけて、わけて貰いに出かけやしょう」となった。

「……そうかい。済まねえが、おれたちが江戸で生きて行けるかどうかの瀬戸際だ。頼まあ…」

文左衛門は一人一人の手を確かりと、握りしめたいような口のきき方で頭を下げた。

が、それに一同が、かしこまってうなづくのをみてとると、声を落してからが、
「いくら人間万事金の世の中とはいえ、お江戸じゃ金さえ有りや誰も彼も同じように生きてゆけるのに……湯浅じゃあどうだった。俺たちや建武の昔に楠木正成公に一味した湯浅入道の一族の子孫だというので、常人とは違う扱いを足利時代にされたのが今も続き、人間にあらずと非人とされているのは、みなもよくわきまえていよう……」と告げた。そして、
「もしも材木を集め……それが高値に売れて馬鹿儲けできたら、それを元手にし、こんな間違いっ放しの世間の、世直しも金の力でやれないことではないと想うんだ」ともいった。
「……なにしろ収賄ばやりの昨今だってことは、このお江戸へでてきて見てはいないがよく耳にはしています。うんとこ儲かったら、ご老中に袖の下を使っても、各地にある湯浅のような千軒とよばれる先住民たちの閉じこめ場所の解放もできやしょう」文太もいった。
が、てんでに旅費を預かり、用意された旅支度をその場で始めだした者たちの中には、
「金さえ儲かったら鉄砲の玉薬に、長崎渡りの硝石を秘かに買い集めて世直しの戦も出来ますぜ」と、張りきったことをいいだすのもいた。

光圀は黄門ではない

さて、赤穂の家来どもが、とじこめの水戸光圀の肩をもつように柳沢のことを悪しざまにいうのにはやはりそれなりの訳があった。それは……まだ光圀が江戸にまだいた頃の事ではあるが、

「……赤穂の浅野であるな」と、千代田城で声をかけられたのに、

「これは御老公さまには、御気嫌うるわしく……」

と内匠頭は、中腰に身を屈め、通りすぎようとしていたところゆえ、あわてて立ち止り深々と一礼した。

帝鑑の間づめ五万三千石の身分では、御三家の水戸光圀は、いうなれば主筋にも当る格式である。だから自分の顔を覚えられていて、声をかけられたのに感激してしまい、思わずにっこりしてしまった。すると、

「わが水戸屋敷においても従来は三州塩を入れていたが、今年より赤穂塩に代え国許でも邦河湊へ、赤穂御崎より廻漕させている。亡き御祖父長直が苦労なされ丹精されて、開発されたやにきくが……てんで風味も三州塩とは比べものにならず、まこと結構である」

微笑をみせて水戸光圀も顎髭をしごきつつにこにこしてみせた。そして、

「そもそも公儀が長直を常州笠間から、正保二年に赤穂へ移したのは、権現さまご開発の下総の行徳塩田が芳しくなく、三州吉良の昔からの物も、にがりが多くて軍用に向かず、よって赤穂の苅谷塩田に目をつけられ、その増産を命ぜられてのことと聞き及ぶが、祖父の後をつぎ長友、そして其方と三代あいついで、とうとう日本一の塩作りに成功したとは、御奉公専一の賜物であるな。まことにめでたいことじゃのう」と告げられた。

「はぁッ、お賞めを頂き……まことに恐悦至極」内匠頭が歓ぶと、

「水戸の小梅など進ぜよう程に、まあひとつ屋敷へ茶など喫しに来るがよい」

云い残すと水戸光圀は、さっさと大廓下を渡っていった。それゆえ鉄砲州の屋敷へ戻ると、

「水戸さまより過分なお言葉を、本日お城で思いがけなくも頂いた。よってお城の行器所へ納入と同じの、できるだけ上製の精選品を小石川へ、お届け申すがよいぞ」

江戸詰め家老の安井彦右衛門にいいつけた。が、内室の阿久利はそれを耳にすると内匠頭へ、

「いくら将軍家台所へ納めるのと同じ上塩を差し上げなさるならば、安井などをつかわさず御自身で伺いなされませ。御三家の水戸さまは、ずっと御定府の江戸勤めゆえ、話し相手ほしさに声をかけられ誘われたのでござりましょう」と、諫めるようにもたしなめた。

「うん、そうか。そない申せば水戸さまは、そない心づもりであらせられたやも知れん。しかるべく任官ならせられるべき御身分なのに、ご当代綱吉公を五代将軍に迎えられるのへ、酒井忠清

さまらと反対されたのが祟って、まだ無位無官のままであらせられる……でのう」

内匠頭も光圀の人恋しいみたいな懐っこい微笑を、瞼にそのとき思い浮かべ、阿久利に向かってうなづいてみせた。さて、講談や大衆小説の類では、光圀はあっさりと、

「水戸黄門漫遊記」の主人公にされている。しかし前にも述べたが実際は違う。

無理やりに元禄三年十月十四日付けで、隠居願いを出すことをしいられるまでは、嘘みたいな話だが中納言どころか家門に定まっている権中納言にもされていなかった。

十二月に入って追い立てられるように、小石川屋敷から水戸へ戻って、初めて故人の追贈位のごとく、それと引き換えみたいに先代なみの「権中納言」にされたにすぎない。黄門とよばれるかどうかは判らぬが中納言には、本当は死ぬまでなっていない。

そして初めは水戸城三の丸に軟禁されていたが、後にはそれもかなわず、公儀の意向か追従か重役どもは常陸太田の窪地に、小屋を作りそこへ、閉じこめて番人をつけていた。

なにしろ光圀の後をついだのは高松よりの兄の子ゆえ、重臣も四国からついてきた者らに代り、かつての光圀の側近は遠ざけられ、御役御免にされていたゆえ、なんともならなかった。

「西山隠士」と号して光圀は、憤りを詩作にまぎらし託したりした。

が、それは後の話であって内匠頭が訪れてゆくと水戸光圀は嬉しそうに、

「よお来てくれた。ただ口で伝えただけゆえ、家来でもよこされるかと　……」と喜んだ。

「いや実はてまえも、自分でお邪魔するのは押しかけがましいかと気がねしましたが、妻の阿久利が、ぜひせっかくのお言葉ゆえと……たって申しますゆえ、それで……」

包み隠しせずに正直にのべたところ、破顔一笑。光圀も違い棚の素行の版本をおろし、

「室は三次城浅野長治どの御息女で、山鹿素行をひいきされ歴史好きの御尊父が選ばれたとか、……さぞ親譲りで……」とひろげてみせた。だから、照れたように

「これは御明察、女だてらに阿久利めは、てまえ素読に読み聞かせまする」内匠頭は答えた。

「山鹿素行は御先代が認められ千石と破格な招へいをされたのだが、のちやめて戻ってきたものの〈聖教要録〉をだし、官学の朱子学を攻撃したお咎めをこうむり、そこで改めて、播州赤穂に配流された者。四年後にお許しがで戻ってきた後は当屋敷へも〈中朝事実〉の講義にきたことがある。これがそのときの……朱を入れてくれた刊本じゃが」

「左様にござりまするか。実は、てまえの処でも、ちょうどこれを阿久利めがひもとき、教えてくれよう親切か、まあ二月おきぐらいに付き合わされて居りまする」

「そりゃ難儀なことだ……が、武芸自慢の鶴姫さまを貰いうけ、可哀そうに頭へ瘤をこさえて殿中へ出仕した紀州の綱教よりは増しじゃろ」光圀は、からからひからびた声で笑った。

吉良上野介の養女として紀州へ嫁入った鶴姫の噂はきいていたので内匠頭も顔を赤らめ、

「いや、てまえの阿久利は無器用なたちで、遊芸の道にはうとく親の血をひく学問好きだけのこ

とにござります」

あわてておのが妻を庇うように口にするのへ、光圀はうなづき、

「よい、よい……そうした妻女をもつがよいのだ。それに引き換え己が娘として紀州へ嫁にやり代りに米沢上杉家から、嫁を迎えている高家の吉良上野介というは、化粧料の名目で上杉家より年に六千石の補助をうけている。己が所領の四千二百石を上廻っているから、ありゃ、さぞかし妻女に頭が上らず大変じゃろ」にやっと唇の端をもち上げた。

が、このときの内匠頭に吉良家への気兼ねがあった、というのには、又それなりの訳がある。北条政子は、実朝、頼家と殺してゆき、頼朝の血脈が絶えたとき、もはや北条の家には不用の長物なりと、頼朝が旗上げに用いた白旗を、あっさり惜し気もなく甥の義氏に与えた。

この子孫が三河に住みつき十八代目が、今の吉良上野のせいであるといえよう。

本当の処は頼朝の血脈は菜嫡み御前に生ませた一子が、鎌倉から後の江戸へ逃げ、その源頼兼の子孫が今日の三越本店あたりに住まっていて、室町弾左エ門を代々にわたって名のった。

が、家康入府の際には、川向こうの新地へ移され非人頭にされてしまった。

が江戸開府後、殆んど武士は、流行みたいに系図屋に己れの祖先を、

「姓は源氏」と由来を作らせていたので、非人頭の弾左エ門よりは白旗や鬚切丸を伝える吉良家の方が良いものだから、みな祖家を吉良と崇め、公儀も高家として別格扱いにしていた。

それゆえ台命とはいえ、足利時代の軍用塩だった三河饗庭七郷塩を駆逐する形としてしまっている浅野内匠頭としては、どうも肩身の狭い思いだったのである。

だから光圀は、それを慰めるように小姓に酒を進めさせ、

「塩作りを云いつかって御祖父が赤穂へ移られるまでは、わが常陸の笠間に居られたのじゃ。まあ云うなれば当家とは親類みたいなものじゃよ。くつろがれえ」と、何でも相談にくるがよい、いつでも力になろうとまで口にした。

それゆえ内匠頭も、阿久利にすすめられて自分で来てよかったとほっとして、盃をうけると、

「有難とうござる……」すっかり百年の知己を得たように、

「頂きまする」と、朱杯を目七分に捧げ呑みほし、すすめられるまま何杯もすごした。

そして、名残り惜しそうに廊下まで見送る光圀に別れをつげ、心づくしの水戸の小梅の樽を貰いうけて小石川から鉄砲州へ戻ってくると、阿久利に向かい、

「やはり其方にいわれ行ってよかった……ご老公より下へもおかぬおもてなしを受けたぞ」

嬉しそうに告げたところ、阿久利もいそいそして出迎えて、

「そりゃ良ろしゅうございましたな」と微笑したものである。

が二日程おいて飛鳥山から、つむじ風が強く吹きつのって屋敷前の柳の大木を揺さぶるのが、

「うるさいのう……」居間まで聴えてきて、内匠頭がしかめつらをしていると、

「水戸さまは御当代さま将軍家を初め、御老中衆にも好かれては居られぬ御方……そこへおよばれとはいえ行きすぎるは如何かと、江戸勤めの者が申し居りまするゆえ、私としましたことが心配でなりませぬ」と、阿久利が側へきて詫び、声を低くめにそっと訴えにきた。

「又してもうるさい……安井彦右衛門か」と内匠頭が眉にしわをよせると、

「いえ江戸家老なれば、殿へじかに申し上げまする」と答えた。

「では身分が低き家門の者なのか」とふたたび聞けば、

「はい、二百石拝領の富森助右衛門、高田郡兵衛、それに赤垣源蔵の面々にてござりまする」

「ほう江戸詰めでは血気にはやる面々じゃな」年寄りの者が御家大事と心配し、阿久利を通して諫めるなら判るが、家中のなぜに若い連中がと顔をしかめると、

「水戸さまは京より宮さまを仕え将軍さまとなし、己れが天下の副将軍となって兵馬の大権を握らんとした野心のかたまりのような方。うっかり殿が近かづかれ一味与党とみられては、塩のことで吉良、上杉、紀伊さまに睨まれている当家にとっては禍いのもと、と案じおりまする」

阿久利も心配そうな表情をしてみせたので、内匠頭もそうかと眼をとじた。

といって隠居前の水戸光圀が、己が公武合体案が破れ、相談役というより互いに力を合せていた酒井忠清を、閉門放逐の形で失ってしまった穴埋めにと若い浅野内匠頭に目をつけ、

「わしの仲間にしたら、さぞかし良かろう」と誘ったのでもない。光圀はずっと、
「われこそは、まぎれもない権現さまの直系、つまり神君家康公の御孫としては、はっきりした血の流れを受けつぐ唯一の者である」といった自負をもっていた。
それゆえ何も魂胆をもってのことでもなかったが、かねてより光圀は、
（おのれより年上の三姫を上杉家より貰いうけ、その縁故で京へおもむき銭をまいて、欲深かな公卿どもを手なづけてからが、前帝を追い落して閉じこめにしたり、千家の向こうをはって新しい裏千家までこしらえた権謀術策のかたまりみたいな不快なやつである）
と吉良のことを思っていたから、塩のことで吉良とはいがみ合いの恰好の浅野内匠頭へ、力をつけてやり慰めるぐらいのつもりで声をかけただけである。それゆえ、
「何も他意があって招いたのではない……まこと、良き塩を送ってよこしてくれたゆえ、梅の漬物も改めて国許から返礼に邦珂湊から送荷させてある……なのにどうしてその後は、あの浅野内匠頭は、わしの許へ尋ねて来ないのであるか」と、しきりに光圀は考えこんだ。
もちろん浅野の鉄砲州屋敷の在府の家来どもが、寄ってたかって奥方の阿久利へ、
「すぎたことは仕方ありませぬが、今後は、お見合せあってしかるべし」
と諫言したことなど知る由もないから、しきりに光圀は首を傾げていた。なにしろ世間では、（水戸光圀は自己の野望のために、京の有栖川宮をかつぎ出し、已れが天下の副将軍たらんと志

したのだ）と取り沙汰されていて、これは故三田村鳶魚の考証随筆本の、『芝、上野、浅草』の中や、他の著にもそっくりそのままでている。宮さまに面倒な武家支配など出来よう筈はないから、すべては光圀の思いの儘にできるからの意企だろうと書かれてある。

またアメリカで大統領がやめれば、代って副大統領が昇進し大統領になるように、やがて水戸が取って代って、天下を取らんとする悪心によると酷評もされている。が、『公武合体説』は、なにも幕末の十四代徳川家茂のときに、和宮降嫁として初めて実現したものでもない。北条政子でさえ、承久元年（一二一九）六月には、左大臣藤原道家の子の二歳の頼経を迎えて、源の実朝を死なせたあとの征夷大将軍にたてている。

それゆえ光圀としては、三代将軍家光が上洛したときに、中院卿を入れ後水尾帝が山城一国二十余万石をお求めになったのに、承知の旨を奉答しておきながら、その儘で放置。ために後水尾帝は憤られたまい、討幕の密勅まで出されたと噂されるのを憂えたからして、

「なんとか京と円満に手を結ぶしか、徳川の世を長く続けさせる途はないのである」

と光圀は判断したからして、徳川創業の立て役者酒井浄賢改め忠次の孫の酒井忠清と、

「如何であろうか……」と、何度も話しあって有栖川宮を迎えようとしたのである。

「わしには一片の私心もない、みな権現さまが樹立された徳川の世を、いついつまでも続けたかったのが悲願であったのである。なのに、さもわしの野心のごとく云いふらすは、あの憎っくき

柳沢めらの企てというしかなかろう。阿部豊後守のごときは、いくら話してきかせても……判り申したと返事はするが、なんの手もよお打つとらん、みな已れの保身にのみ窮々としている有様……まこと歔かわしいきわみである」

と、しきりに慨歎するしかなかった。

もちろん跡目をつがせるのが実子ならば、光圀とて一人で息まくことはなく、

「わしは神君家康公直系の孫、そなたは曾孫である。どんな事があっても御遺志をつぎ徳川の世を末永く続けるよう守らねばならぬのだ」と、いって聞かせることもできたろう。

だが自分の意志とはなっているが、その実は、幕閣の扱いで、異母兄の俾を世つぎにさせられ死なれると、その弟をとされていては、如何ともしがたかった。だからして光圀としては、

「あの島原の戦のことを台閣が政治発表として、松平伊豆などに委せてしまわず、あれが後水尾院の出されたまうた院宣による討幕運動だったと、明白に天下に公表しておけば、こんなことにはならなかったのだ」と、遙か昔のことを今となっては後悔しきってもみた。

囚人駕籠

「水戸は貧乏で、そのため徳川の云いなりにずっとなっていた」

と、故三田村鳶魚は説明し、幕末の藤田東湖も、

「水戸家は御三家の一つとはいえ紀伊や尾張に比べれば、その禄高が半分にも達しないのに、格式その他は同等であるから、その負担は義公（光圀）さまの頃より甚だ苦しく、その後はどうしても、すこしでも国費を軽かしめんとして、公儀のいいなりになるようになってきた。なにしろ水戸納豆に梅干がとれるくらいで、産物とも何もなく地味はよからず収穫はすくなくて、実収は表高の七割あるかなしかであったからである」と、それを裏書きしている。

光圀が綱吉に忌まれて押しこめ隠居にあった後、旧家臣一同が冷めたかったのも、不忠ではなく、あれ以上ひどく江戸に睨まれて、何か公事の割り当てでも意地悪くされようものなら、水戸侍はとても生きてゆけなかったからだと弁解じみたことをいっているのである。

薩人肝付七之進の「見聞記」の中にも、これは露骨にかかれていて、

「水戸は産物なく国は甚だ貧し、よって扶持もまともには給されざるためか、馬や鎧などを備える士は稀れにしかない。なれど士風勇敢にして、質朴をむねとしている」と断じられている。

つまり、麦飯に干鰯の焼いたのがあれば、最高の御馳走としていたくらいの水戸ゆえ、高松から入ってきた綱条やその周囲の者も、専横をきわめたというのではなく、徳川本家の鼻息をうかがって小心翼々として心配していたのが本当のところであろう。

だから光圀時代の水戸の町奉行の望月五頭左をやめさせたり、水道を田町に敷いた平賀勘右衛門まで御役御免にし、できるだけ公儀に睨まれぬよう、あくせくしていたのである。

それなのに隠居させ竹矢来の中へとじこめてあったが光圀が、自分で出かけてではないが、湊川の街道すじの馬頭観音の横に、いくら小さなものとはいえ墓をたてたと伝わってきた時には、

「……これは、とんでもないことである如何すべきであろうか」老臣はすっかり色を失った。

「なんぞ公儀より云って来られんと、ええがのう……」と、みな額を集めて心配しきっていた。

すると、その矢先である。城中から呼び出しがあって指定の日時に重役が出頭すると、

「前権中納言お召しこれあり」と光圀の呼び出しを命ぜられたのである。

すわと顔色を変えた水戸の重臣は、戻ってくるなり周章狼狽、

「さだめし楠公の碑のことで、お咎めなのであろう」と将軍家の意向を恐れ、罪人なみに綱代籠に漆塗りのいちび編みをかぶせたのを太田村へやり、何事ならんと顔色を変える光圀へ、

「まあ何事も仰せられんと……まことはご無礼ではござりまするが、これにおのり下さいませ」

迎えにいった侍どもは地面に額をすりつけ、伏し拝まんばかりにして頼みこんだ。

「そうか……わしが、これにのらんと困ると申すのか。それに、たとえどんな駕であれ、これにさえのれば竹矢来の外へ出られるというのであるならば……」

と、元禄四年春から足かけ四年間というもの蟄居させられ、外へは一歩も出られなかった光圀としては、

「よし、よし」と、まるで子供のように、にこにこして網のかかった駕籠の中へ入った。

そこで出迎えにきた侍どもは、ほっとしたが、気難かしい上に我尽者の老公のことゆえ途中でもしも気が変られては大変であると、水戸城へもよらず、そのまま、まっすぐに水戸街道を陽の明るい内に掃部宿へでて千住へつくと、そこから江戸へ護送。小石川の上屋敷をはばかって目白の中屋敷へまっすぐに送りこんだ。

将軍綱吉が隠居した光圀を、このとき強引によんだのには訳があった。というのは徳川の血につながる一族を、千代田城大広敷へ集めたから光圀も、のけ者にはできなかったのである。

そしてその日、つまり元禄七年四月二十六日。

「隠居されてより陽やけされ、いたく元気そうであるな」

四年ぶりにみる相手へ皮肉まじりに声をかけ綱吉は、ひとつ咳ばらいをしてから、

「本日かく血縁の嫡庶流を一堂に集めたは、余の儀ではない。徳川の家も五代となると祖宗のこ

とが判らんようになるらしい。わが徳川家は建武の昔その名をはせた上州新田郡の新田義貞の血をひく。足利氏の世となって世良田の庄に隠れ住む内に新田一族が、世良田、徳川と分かれ今日に及ぶぐらいは、皆もよく存じよう」とまず云ってのけた。

そして光圀を睨みつけるようにしながら、綱吉は難かしい顔をして、

「よって当家にあっては武人の亀鑑は、新田義貞公とさだめ、民間の武者絵や武者人形もそれに限られている。なのに論語読みの論語知らずというか、水戸はそれをわきまえず常州に近い上州へ義貞公の建碑するならまだしも、遙か西国に名も余り知られぬ土豪の墓を、ほしい儘にたてたという。まことに徳川の祖をないがしろになす、けしからぬ振舞いであって嘆かわしい。よって此処に隠居の身であるが呼びだしたは、忠孝聖賢の途を改めて反省させんと考えたからである」

と告げた。徳川時代には楠木正成が軽視され、明治になると、それが逆になって新田義貞の値打ちが下り、宮城前の銅像も楠木正成だけなのは、新田は徳川の祖先であると薩長側に睨まれたのが原因である。つまり徳川家が政治的配慮で表向きは、

「旧姓は三河松平」とするのは、足利氏がやはり、「源」を本姓に借用したのと同じでまやかしであるらしい。それが証拠に御一新の際に薩長政権が、

「徳川家はその祖宗の地へ戻るべし」と命ぜられたとき。三河でなく駿河へ徳川家はやられた。だから静岡市の華陽院文書の家康直筆も、「われ浜松にて義軍をあぐ」と出ているのである。

日本の歴史は真実を伝えるよりも、その時々の体制の都合のよいように、歴史家によって書き直されてしまっている。だから、水戸光圀の実際と通説がまったく違うように、みんな調べ直すと、どれもこれもすべて変である。さて、そのとき光圀に向かって、

「用意の書見台はこれに……」と、この正月に川越城主になったばかりの柳沢美濃守が、琉球渡来の論語本をのせた台を指さした。そこで仕方なくかしこまり、光圀は、

「はぁッ……」と無理じいを承知で、綱吉に一礼し、おもむろに書見台に向かった。しかし、

「しいのたまわく……」と音読を初める代りに、光圀は落着きはらって、

「ご当代さまは学識深き御方、今さら聞きあきてあらせる論語でもござりますまい。よって建武の昔に話を戻しまするが、確かに新田義貞公はわが徳川の祖、この老人も敬うています。しかし新田公の寄騎にて身分は低きものとはいえ、楠木正成の死後その子正行、正儀から戦国時代の楠木正憲道三に到るまで、七生報国どころか十四生報国までしてござる。なのに正親町帝のときに、ようやく逆徒の汚名だけは銭十貫文の上納で取り消されたものの一般には名も知られず、それを憐れんで光圀が、小さな石墓を供養にたてたが何故に悪うござる……」

どうせこうなっては俎上の鯉、あんな竹矢来の中へ閉じこめておかれるよりは、ここでバッサリやられても、もう惜しくもない生命であると覚悟をつけてきたのか、あくまでいってのけた。いわれてみれば、その通りである。眉をしかめ綱吉は不快がって、席をたってしまった。

せっかく満席の中で光圀をやりこめようとした学問自慢の綱吉の目論見が、あっさりはずれたから、立腹したのである。

が、歴史書の類にかかると、この件も、さも、もっともらしく、

「西山に隠居してから五年目（一年違う）に出府して藤井紋太夫の謀叛を未前に防ぐために手討ちにせんと出府そのまま江戸に滞在していると、将軍綱吉から対面希望の台命があった」

という。つまりその頃、

「水戸光圀は発狂し、気ぶれになったそうな」とする風説が江戸市中に流れていたからである。

よって、光圀は、三月登城して将軍に拝謁した。そのとき、綱吉から『大学』の講釈を望まれて講義をしたが、態度も議論もまことに堂々たるもので、居並ぶ将軍側近の侍臣たちも襟を正して聞き入ったと伝えられている。光圀は、その後しばらく江戸に滞在した、としている。

これならば、まだ大森金五郎編の「三省堂日本歴史年表」の、元禄七年四月二十六日の条に、

「将軍綱吉はその家門庶流などをみな召して論語を講じてきかせ、水戸光圀に命じ強いて経書を講ぜしむ」の方が、まだ真相を強請とおぼろげながらでも伝えているだけでも信頼性がある。

さて、このためか取りこわしと内定した湊川の石碑は小さな墓石ゆえ助かったが、しっぺ返しのように、また罪人扱いで網かぶせ駕で戻されたその後の光圀への風当りは、ますます激しくな

ったといわれる。

気ばらしの木こり仕事さえ儘にならぬようになったので、やむなく、のちに〈大日本史〉の名で残る歴史に没頭しかけた。

現代では、水戸光圀が朱舜水をまねき、在職中の明歴三年から編さんに着手とされている。

しかし、「歴史に本当に取りくむというのは、それによって名声や収入を得ようとする徒輩の仕事ではない。現実の世の中でいれられず突き落された者が、敗北感の中で唇をかみしめ、なんとか立ち直ろうと血みどろになって、必死になって真実を追及しようとする復讐みたいなもの。またいうなれば歴史の真の解明とは、現実逃避の、ひとつの途であるよりも、ひとによっては自殺志向の変型ともいえるものである……」

と英国の歴史家アイザノア・バーリンも、はっきり論じているくらいのものである。

本当の歴史好きとか、探史考証というのは時流にのれたり立身する人のやることではない。まして歴史をくい物にして、それで儲けようといった徒輩とは、まったく無縁のものであるという。だが——日本ではどうも違うようだ。が、私の立場では当てはまり本当であるらしい。

話が難しくなったが、これまでのように学問好きの光圀が、二十五万石の権力で、大日本史の編さんに掛ったという見方より、太田村へちっ居させられてから、老いの眼に涙を浮かべつつ口惜しまぎれに取組んだとみなす方が正しかろう。真の歴史解明はそうしたものである。

元禄十三年冬

「……ご、ご老公さま」と、呼ばってくる声。どうも寝ている縁の下からしいので光圀は、「はて……」と耳をすました。が近頃の光圀はすっかり身体をそこねていた。なにしろ小石川の屋敷から水戸城三の丸へ閉じこめられ、まるで座敷牢なみの扱いをされたのに立腹。「何処ぞ、広々としたところへ……移りたい」と洩したところ、それに国許家老どもが、「たまには山仕事などなされますのも……」と口を揃えていってきた。

いくら自分は幕閣に睨まれ閉門同様な押しこめ隠居にされ、今では高松より迎え入れた綱条が当主とはいえ、かつて召し使ってきた家老共の言葉である。それゆえ、「さようか、よかろうのう……」と光圀は信用し、のり気になって移ってきたのである。

が、今にして想えば、どうも罠だったような気がするのである。

なにしろ西山の麓で空は青かったが、太田の庄は村ともいえぬ人家もない荒地だった。これまで耕やされていた土地があれば、掘り返して種まきするのだから、ずぶの素人でもやればできぬこともない。

ところが放りっぱなしの雑木が生い茂った未開の土地は、木の根株を掘り起し、埋まった岩石

をもくだいて除かねばならない。今まで土に馴れぬ光圀には容易ならぬことだった。

それに手伝いに土に馴れた百姓の若者でも廻されてくるのなら、まだ救いがあった、しかし、

「太田は梅林で知られた土地……と、ご自身で指図されたのでござれば……」

国許家老大瀬九郎太は、さも風流のために自発的に光圀が、太田へ移ったような口のきき方をし、百姓の倅どころか若侍もよこさず、廻してきたのは城からの女二人きりだったのである。

が、それでも光圀は、負けず嫌いな性分だから、「なにくそッ」と馴れぬ開墾を始めだした。

梅林はあるが実はとれても、それだけで米なしでは、握り飯も作れぬから、なんとか耕やそうとしたのであるが、石を掘り起したり雑木を根から引き抜くだけで、すっかりへこたれてしまった。が、それで国家老大瀬九郎太に泣言をいうような真似は、これまでの光圀の衿持(きょうじ)が許さなかった。それゆえ、

「米作りが無理ならば……」とヒエをすこしずつ植えさせた。女たち二人も必死に手伝ったから、三年目からは、すこしだが飯米もとれだした。その代り、強壮を誇っていた光圀だったが、

「腰がやむ……もんでくれ」とか、「肩が痛くて首が廻らぬ」洩らすようになってしまった。

眼や歯の衰えは前からだったが、身体を酷使しだしてからは、めっきり四肢だけでなく脊柱までに、がたがきてしまったようである。だからして、むかむかしては、

「……将軍綱吉や側近に睨まれ隠居処分になったわしが、いつ迄も元気で長生きしていては都合

が悪い。といって、かつて主君とよんだ者へ毒をかったり刃も向けられぬ。それゆえ、じわじわと巧く死んでしまうよう……太田の在が梅花の里だなどと、うまくわしをそそのかしおった上、馴れぬ耕作などさせおったは、手を下さずにじわじわ殺そうとの企てなりしか」

と想うようになっていた。がそれでもその内に光圀は、

「……これも天命か」と、すべて諦めるような心境にも到達していた。

とはいえ夜中に床下から、いきなり声をかけてこられたのには驚かされた。そこで、

(刺客をさし向けてきたのか……なかなか開墾の力仕事でへばりかけても死なぬので、業を煮やして誰かを忍びこませ、わが命を狙わんとするのか)きっとして手さぐりで打ち刀の紐をひきよせた。ところが床下の相手は、忍びやかではあるが、

「……ご老公さま。てまえは、かつて御側近かく奉公しました佐々木の弟参次郎と申す者」

はっきりと名前を告げてきた。それゆえ光圀も、記憶の糸をたぐってみて、

「そうであったか……兄は柳沢めに討たれ、不憫であったよのう」うめくごとくに洩した。

「はい……有難きお言葉を賜わり冥途の兄も、さぞかし喜んで居りましょう」礼をのべ、

「実はてまえ、去る九月六日に柳沢めが、上野寛永寺中堂建立の儀式に参列すると聞き、仇を討たんとおもむきましたが近かよれず、やむなく……」うわずった声をひびかせてきた。

「火を放った——というのであろうが」ずばり光圀は口にしてのけた。水戸の西山の麓に閉じこ

められていても、江戸の大半を灰にした勅額火事が、放火だろうとは睨んでいたのである。

それゆえ床下の参次郎も、はっとさせられたのか、

「……うへえッ」と狭い床下で地面へ顔をすりつけるよう頭を下げた。が光圀の声は続けて、

「あの放火は何人で組んで行なったのであるか」と訊いてきた。そこで、びっくりして、

「……と、仰せられるまするは」不審そうに聞いてきた。光圀は床に口をつけんばかりにして、

「たった一ケ所の付け火だけで、あれだけ瞬たく間に四方に飛び火し大火になるものか。唐国の言葉にも、水は方円の器に従い火は風向きによるというが、いくら風が烈しかったにしても四方八方から一斉に焔がめらめら上ったと申すではないか」と告げ、

「……ここの番人共の知り合いが当日、向こうにいあわせていたが、火の手の上り方があまりに一遍だったので、犬殺し禁止の生類憐れみの令で困っている製革業者が、手分けして怨念ばらしに付け火したらしいと噂しおったのを耳にしたのだ」低く声を落した。

「えッ……さようにござりまするのか……」参次郎は縁の下でうめいた。そう云われれば、上野の山で宮さまの身代りに牡丹をとりに山頂までゆき、煙を透かして眺め廻したとき、

「……まだ上野の山が燃えているというのに、どうして四方八方まで燃え広がっているのか」

自分でも変に想った事を思いだした。そこでかしこまったまま、

「……いったい私の他に何者らが、火をつけたのでござりましょうか」あべこべに聞き返した。

すると光圀はしゃがれた声をさらに低め、縁下に向かって、
「水戸者は、がさつと申すか単純でいかんな……よう考えてみい。恐らく、江戸を大火にすればさぞかし儲けのある輩の仕業であろうが――」教えるように訓した。しかしそういわれても、
「火をつけて儲かる連中とは、はて誰らであろう」どうも突差には思い出せそうになかった。
なのに光圀は、それにはお構いなしに、早口で、
「早うに此処から人目につかぬように退散せい」叱りつけるごとくに、せきたて命じてきた。
「でも……どうせ一死は覚悟の上で、かく今生のお別れに参りました身、ご懸念は無用に――」
と泣きそうな声を響かせた。すると、
「いや、いや、そういうものではない。まだ若いのじゃ、生命を粗末にするでないぞ……ここに女ご二人しか居らず、それも日中の野良仕事でのびきって死んだように寝ているが、声や姿を聞きつけられてはまずい事になる。なんせ番人どもに何かあったら知らせるよう云いつかっている女たちじゃからのう」と、気づかうよう声をかけてきた。
「はあ……だが此処まで見られずに来られたのです……また御迷惑をかけず外へは出られます」
仕方なく答えはしたものの、参次郎としては、
(どうせ死ぬならば、ご老公のお側で……)と死に場所をつかもうとして、厳重な番衆共の見張りの目をくぐって、光圀の寝ている床下まで潜りこんできたのである。それゆえこの儘ではと未

練たっぷりで立ち去りかね蹲くまっていると、思いがけなく光圀は、
「わしは江戸の公儀を恐れる老臣どもの謀略に策され、馴れぬ荒地耕しで精根をつかいはたし、もはや余命いくばくも有るまいと想う。もし羽あらば囲みから飛び出し諸国を慢遊し、天下の正不正を糺したく想うのだが、とても叶う身ではないのである。よって其方に、この光圀を慕う心があるならば、代って天下を巡り歩き何とか庶民の生きやすいよう計ってやるがよい」
とまで涙声で続けた。そこでびっくりして、
「……はッ、数ならぬ身を、それ程までに……こうて下されまするのか」堪りかねたのか、
「うおッ……」と参次郎も獣のごとく吼えた。だから、その慟哭に昼間の疲れで瞑りこけていた二人の娘も、はっとして眼をさましたらしい。
「……ご老公さま」と驚いて起きてきた。しかし縁下との話のやりとりを聞き、
「どうも番衆たちと口をきくからとて、彼らと同心し一味しているごときお話……もしも、そう思われていますのなら、そりゃお怨みに存じます」と情けなさそうに声をかけ、
「われら両名の親どもは、ご老公が殿様だった頃に眼をかけられた者……よって女ごとは申せ捨身奉公せいと云いつかり、小太刀や薙刀を仕込まれて、ここへ御奉公にきて居りまするのに」這うように側へ寄ってくると交互に訴えだした。
「うん……いらざることを口にして済まんじゃった」光圀も途方にくれたように弁解しだした。

だから縁下の参次郎も泣いてはおられず、（こりゃ大変なことになった）とあわてた。
もし女たちが起きだしたついでに火でもおこして、
「白湯でも……」ということになったら、縁下から這い出さねばならぬ。となると、不本意な別れ方を京でした好江と顔を合せ、御老公とも御同席という罰あたりな事にもなりかねない。
（これはまず利得の目的で火つけをしくさった輩を、探し出すことから始めねばなるまい）
そこで、野鼠みたいに縁下を抜けだすと、夜陰をよいことに番衆詰所の裏手へ廻った参次郎は、漆黒な水戸街道の闇の中へ吸いこまれるように姿を消した。

光圀はそのまま灯りを消させ、女たちを去らせると、じっと身体をのばしたまま眼をとじた。
そして、いま縁の下へ忍んできた参次郎とは、どんな若者であろうかと考えた。
なにしろ水戸二十五万石の家中ゆえ、小者までいればおよそ千五百に余る人数なのに、
（わしに忠義せんとする徒は……今となっては、あの召し放ちの浪人の若者ぐらいか――）
諸行無常というか唯わびしさに、やりきれなくなって、脚の爪先をのばしはしたものの、いつものようにはすぐ寝つかれもしなかった。それに近頃は、耳なりというのか、いつも何かが、かすかに聴えてくる時がある。それも夜になると三絃の爪びきの音が決まって響いてくる。
（あの頃……わしは脇差や小刀まで父頼房に取り上げられ、今のように、やはり閉じこめにあっ

ての所在なさに、三味線をひくよう覚えてしまったものだが……）とも思いだした。

前にも所在なさの日々に、矢来をはった詰所の番衆の者へ格から申し入れさせ、

「三味線を一棹さし入れてほしい」とはいわせた。しかし、いくらいっても言を左右にして、なかなか持ってはこなかった。それゆえ時たま見廻りにくる城侍に対し、

「何とかならぬか……」と、光圀は自分の口からもいってみた。無聊を紛わすために、それくらいのことは、大目にみて差し入れしてよこしても、良いではないかと詰ったのである。

ところが相手は慇懃無礼な態度で頭を低く下げはしたものの、

「大公儀に対し奉まって……閉じこめの御境遇であらせられる御隠居さまゆえ、歌舞音曲の類は如何かと……御重役衆は仰せられていなされまする」と、にべもなく応答した。

「ばかな……大げさにすぎる。たかが三味線一棹のことではないか」呆れて口にしたが、

「もしも公儀より差しまわしの者が、この辺りを徘徊し、竹矢来の中より三味の音など洩れてきましたら、まさか御老公の爪びきとは知る由もなく、よしなき女どもでも集めての放埒と……もし誤られでもしましたら、ここを預かる御城の重役衆の過怠となりまする」

と、そのまま婉曲に拒られてしまった。だから空耳といってしまえばそれまでだが、

「……ペンペン」とわびしい三味の音色が夜などはまるで近かくから聴えてくるみたいに、耳殻の中でするのである。それゆえ光圀は仕方なしに苦が笑いして、

「人の世とは無から出て無へ……とまた戻ってゆくというが、わしの生涯も、やはり閉じこめから始まって閉じこめに終るのか……ここで朽ちては土になってゆくんじゃろうか……」

とは洩しはしたものの、そう想えばますます光圀は寝つけもしなかった。

が、それは殆んどといってもよいくらい毎夜のことである。なにも参次郎が忍びこんできた所為という訳でもない。それゆえ光圀は伸ばした肢体を海老のごとく曲げながら、

「……同じ閉じこめにしても、徳亮とよばれ小石川屋敷内に押しこめのときは、厩中間どもと、宝引きの賭けをしたり賽ころいじりもできた。三味線も太棹から琉球の蛇皮線まで、何挺も揃えられていて日によって、気分によって好きなものがひけた……ところが今度は何も出来はせんし、やれもしないのだからどうにもならんではないか」と唸った。そして、

「……まるで樹からふり落された朽葉が土へ落ち、やがて腐土になってゆくのをじっと待っているみたいな心地であるな」と光圀はしみじみして吐息をついたりした。それゆえ、

「……今の儘では、早く死ぬ途しか、この竹矢来の中から世に出られる途はないな――」

ときどき光圀は洩すともなく口にするようになった。それゆえ二人の女たちは驚き、

「飛んでもないことを仰せなされまするな」と、諫めるような口のききかたをした。

「そちらのような年若さなら、明日は明後日はと何かしら心頼みも持てよう……が、わしの年齢ではそうもゆかぬ。この煩わしさや無為の日々から脱出するには死しかないのだ」

いってきかせるように口にした。また自分でも憤死というのか、しやくにさわって堪らず、（えいッ、食をたち何も口にせんと、このままで己れの始末をつけようか）とさえ考えた。

そして柳沢弥太郎や将軍綱吉それに阿部豊後守、水戸城の重役どもの顔を思い浮かべ、

「おのれ、わが怨念を悟らしてくれん」実行しようともした。が、おろおろした格たちは、

「……いけませぬ。粟飯やもっそう飯がおいやなら、とっておきの米にて粥でも作ります」

断食しようとする光圀を二人がかりで押えつけ、むりやりに食物をとらせるようにした。

「……これが男どもなら、わしの志も判ってくれて死なせてくれようものを――」と、いまいましがった光圀は、憮然たる想いで死ぬこともかなわずじまいで、

「女ごをわしに付けおったのは、やつらにここまでの続みがあったのであるか……」

と、もごもご唇をかみしめ続けていたのである。

「ここに居なさるを誰ぞと想う。先の水戸中将の君におわす天下の副将軍の黄門さまなるぞ」

「うへえッ知らぬこととはいいながら、とんだ御無礼をば仕りました、なにとぞ御勘弁の程を」

「よしそれでは……これからは代官の職務を笠にきて、か弱き民百姓に難くせをつけるなどして、無理難題の横車など押さぬことを、ここではっきり誓うのだな」

「はいはい、取りすぎました年貢や課税は、速やかに庶民へ戻してやりますゆえ……」

「左様か、ならば、これこれ助さん格さん……その悪代官めの縛めをといてやりなさい」
「許してやっても、だいじありませぬか……」
「心底より後悔しているらしいは、この黄門の眼からよくみえる。構わぬ心配せんでよいぞ」
「お言葉ゆえ今回に限りお目にみて、この縄をといてつかわすが、これからもあること、おおいに心にとめおき、庶民が困るような事は今後一切しては、あいなるまいぞ、きっと叱りおくことにする……よいな代官」
「はい、これに懲りてきっと慎しみまする。なにとぞ御勘弁の程を願わしゅう存じます」
「のう格さん……そうじらさんと、もうたいがいにし許してやんなさい。百姓衆もみんな見ているではないか」
「はあ、本来ならば横つらの二つか三つ、思いきってぶん殴って放免してやりたいところですが……では」
「まあ助さん……ご老公の仰せに従って、やむを得んから許してやることにしましょう。ご老公が天神村の百姓などと名のられたのを良いことに、われらを代官所の牢へ入れようとしおった不届き者なれど、改心すると申していますし……」
と、せっかく高手小手に縛りあげたのを解けば、ようやくほっとしたのか、
「有難とうございました……」と、改めて両手を地面につき、さすがの悪代官も余程こりたもの

とみて、おおいに改心したらしかった。

そこで如何なる成行きにあいなると、それまで固唾をのんで、じっと遠巻きにして眺めていた百姓たちも、やれやれとほっとしたらしく近か寄ってきて、

「黄門さま……おかげさまで、大助かりでござりまする」と感激してしまい、

「これで今までのような無茶な課税はなくなりましょう」すっかり喜び合った一同の者は、

「おかげさまで……」手を合せ伏し拝むようにして、子供までがあどけない口で礼をのべた。

「よし、よし、これ代官。もしもこの先、間違えても税の取り過ぎなどして、庶民に迷惑などかけようものなら、許してやれぬから江戸表まで引立てゆき、きっと窮命を申しつけるがよいか」

……といっているところで光圀は自分でも、(こりゃ、ちいと可笑しいではないか)と考えた。

(勘定奉行より任命され赴任する代官の仕事は、たとえ一粒でも余計に貢収を計るのが能史といわれるのゆえ、税はたとえ間違っても減らすことは有り得まいのう)と首をひねり。

(税の取りすぎだと勘定奉行の許へ引っ張ってゆかれたとしても、……まことに精励であると反対に、その代官めはおおいに賞められるに決っとるではないか……)

変な気がしてきた。それまでうつらうつらしていた意識が、すこしずつはっきりしだした。

「そうか……わしが若い頃に厩中間どもにおだてられ、辻斬りにでた際、町役人どもに見咎められた際、中間どもが……ここに居なさる方を、どなたさまだと思いおるか……御三家水戸さまの

御嫡男の若殿におわすぞ——と、それまで折りたたんで背中にさしていた三つ葉あおいの屋敷提灯をつきつけて見せ、恐れ入りましたと詫びさせていたものだが——さては、その頃のことが、今になって夢の中にでてくるのじゃな」と、思い当るものもあった。しかしである。

「……紀州公や尾張公ならば、それぞれ五十万石以上ゆえ、代々にわたって中納言の格式、よって紀伊黄門、尾張黄門というても差支えなかろうが、わが水戸は権現さまが扶持の高よりは地の便をと選ばれたとかで半分の二十五万石。よって父頼房の代より水戸の格式は権中納言止りと定まっている。よし黄門の異名が仮りに中納言の官名であったとしても、こりや解せぬ面妖な呼び方であるな……」とうなされ口中で呟やいてはいたが、

「……夢は身体の疲れで、まことはあべこべのものをみるという……どうも埒なきことを年寄りの愚痴で考え、思い悩むものであるな」と自嘲めいた想いにふけった。

そして、また寝つこうとしても、なかなか起きてしまってからは睡りにつけぬまま、

（このまま……梅の花でも賞でたいと何気なく云ったばかりに、こんな陋屋へ閉じこめられ死んでゆくのは無念である。もし天馬のごとく空を駈けられでもして、太田在から自由な天地へ出て行けるなら……と、あけくれ想い詰めているものだから——それが五臓六腑にひろがり飛んだ夢をみたものだ）と、うなされながら光圀は呻めきをあげた。そして、

元禄十三年も押しせまった十二月、

「まてば海路の日和とか申すが、今度はうまくゆくと死ねるかも知れんな……」

ほっとしたように光圀は思った。今でいえば風邪をこじらせた急性肺炎で、ずっと高熱が下らずだったからである。

格たちは心配して寝ずの看護だったが、光圀はひどい熱にうなされつつ、

「……ここへ閉じこめられての十年間、何時も死んでしまいたいと思いはしたが、歯が欠け舌もかめずに苦労はしてきたが、やっとこれで死んでゆけそうである」内心はほっとしていた。

さすがに水戸城から重役大瀬九郎太差し廻しの医師が、太田村へ見舞いに来ていたが、

「……もはや御齢がおとしゆえ」と、持ってきた葛根湯を温めさせたにすぎなかった。

が、なかなか病人が眼をさまさず、何度も熱くさせた薬湯を服用させる機会もないまま、

「どうも手当てのしようもありませぬな」

ぶつぶつ医師はこぼしつ寒いものだから囲炉裏端に、背を丸くし屈みこんでいるきりだった。

それゆえ当人の光圀は、医師が来ていることも知らず、ただ高い熱にうなされ続けていた。

またも取りとめもない夢に、まるで引きこまれるというより曳っ張り廻されていたのである。

「……そちゃ、藤井紋太夫ではないか――」ぽっかり闇の中に浮かび出てきた生首へ叫んだ。

そして周章てふためき光圀は泳ぐように手をふりつつ、さも云い訳するごとく、

「……其方が悪心を抱き養子綱条の代になったら、水戸二十五万石をば私せんと野心を抱き居るを、この儂が看破して能舞台で竜神の仕舞いをしおえて戻ってくると、ばっさり其方を手討になし成敗したとの風評をば、近頃面白おかしく軍談読みなどが口演にしているそうじゃが、あれはこの儂の預り知らぬ事である」と、まず判らせようと生首へ話しかけた。

「……其方は家老とは申せ僅か五百石どりの一代者で、儂が綱条の子に目付け家扶として任命し、差し向けた者である。もし悪心を抱いたにしろ孫が成人する迄には、かなりな間がありすぎる。また本物の八キロもある刀をおびては、仕舞など出来ようもないのは判りきった話である。よって能衣裳の偽刀で成敗などというが、まことにたらぬ出鱈目な話とは存じよう……」

が、いくらいっても、それでも生首はこっくりとうなづきもせぬ。

当り前の事ではあるが、高熱にうなされている光圀は、ますますもって狼狽してしまい、

「のう藤井紋太夫……其方を余が手にかけたのは、やむを得ぬそれなりの訳があったのだ」

喘えぐようにいってのけ、血みどろな生首へ手を延ばすようにして、

「そちが芝居者上りの河原者であった前身が、綱条について四国高松から出て来た側近の者らに知れてしまった。ところが公儀では当代将軍家になられてより、完門改めの寺社奉行を一人でなく四人も一度に立てて、神道派の河原者をみな仏教へ転向させようと企て居られる御時勢。よっ

て綱条の側近の高松者は将来の災いを招こうやも知れぬと、秘かに其方を追放するか又は毒でもかわんと画策……していたのじや」と、苦しげに一息いれ、

「……が、高松から来ている四国者に勝手な真似をさせ、其方の処置を委せてしまっては、わしが実子でない綱条に跡目を譲ったのち、これまでの水戸者が迷惑をしようと考えたので、河原者の分際を隠して奉公しくさったとは憎っくき奴め、余がみずから手討してくれん……と成敗したのは紋太夫よ……そちを打ち首にする前によく話し納得させた上であったろう」と喘いだ。

すると初めて宙に浮かんでいた藤井紋太夫の生首も、

（……よう弁まえております）といわんばかりに、こっくりうなづくようにしてみせた。

そこでなんとも堪えられぬ烈しい熱気と悪寒で参ってしまい、がんがん半鐘を乱打するような頭痛に悩まされつつも、きっとして光圀は、

「……紋太夫は諒承してくれたらよいけれど、まだ気になるのは湊川へ建てた石墓のこと……」

次を、づきづきする頭の中で、うなされつつも考えてみた。

世間では、有栖川幸仁親王を第五代将軍に迎えようとして、酒井忠清と組んだ光圀は、

「武家よりも公家びいき」とみられていた。それゆえ、

「鳴呼忠臣楠子之墓」を、使いの者をやって建てさせたのも、そのせいと思われ、

「公儀への面当て」のごとく取り沙汰されている。しかし徳川家康の孫に当る光圀としては、そ

うでもなかったのである。もっとも徳川家は、上州世良田の出ということになっている。

藤原氏によって追われ日光の山に入っていた彼らは、古代アラブのスメル語のニブタの名のりから転化したといわれる新田姓を名のっていた。それから、

「新田義貞」は、そこから生まれた武人だというので、徳川家では祖祟として大切にしている。

おこりやはしか除けのまじない絵の武者絵といえば、みな新田義貞である。

「足利氏の世になってから、新田一族は、世良田、徳川に苗字を変えて世を忍んできた、というから、それも仕方がないが、新田義貞ばかりたてて、よく敢闘した楠木正成やその子の正行が歴史から埋もれて、忘れられているのは哀れでないか……」

と、思う心から、小さな石墓をたてさせたにすぎないのである。

——もちろん明治になって、何も判らぬ薩長出身者が、世直しや世情一変を掛け言葉にし、思いつきで、色々とこれまでと違うことをした際、

「徳川と戦った豊臣は、おおいに認めてやらねばならぬ。よって家康につぶされた秀吉の豊国神社を賑々しく復興さすべし」とか、

「これまでは徳川家の先祖として新田義貞が、浮世絵や凧の武者絵をも占めているが、すべて御一新の世である。誰ぞ他の者に変更するが良しかろう」となったときに、

「ならば水戸義公（光圀）推せんの楠木正成は如何であろう、新田義貞の代用に……」

と、それまでの義貞一辺倒がすっかり変って、俄に楠木正成が取って換ったことなど、今や、己が生命の灯を消そうとしている光圀に判ろう筈はなく、将来の大予言など出来なかった。

さて、十二月六日の夜に、水戸光圀他界の知らせが、太田の詰め番所から入ったので、それまで公儀との板挟みの恰好で取扱いに弱っていた水戸の国許家老らをほっとさせた。

急使をうけた小石川後楽園の水戸屋敷でも、当主綱条側近として四国高松から来た者たちを、

「めでとうござりまするな。これからは他へ何んの遠慮気兼もなくなり、われらの天下なり」

と歓ばせたし、知らせをうけた柳沢弥太郎美濃守も、すぐさま翌日には、

「おかみ……これで今後は西と手を結んで弓ひかんとする輩も、もう出はしませぬでしょう」

将軍綱吉へ祝言をのべた。しかし柳営で唯の一人だけ、水戸光圀の死をきき悼む者がいた。

この六月、また参覲交代で出府してくるなり呼び出されて、

「不敵にも大老を狙う浪士がいるとかの風評が昨今、これあるによって……」と、六月十六日付けをもって、従来の奉書火消し番から変えられ柳沢のために、

「桜田門見張り御番」の役目をいいつかっていた浅野内匠頭である。ときに三十四歳だった。

元禄泰平記

全四巻

八切止夫10年ごしのライフワークで、大石内蔵介はまだ連載中ゆえ全巻揃いは秋になりますが、

上製各 1,480

柳沢吉保

水戸光圀

浅野内匠頭

大石内蔵介

明治十二年の黙阿弥の芝居で九代目団十郎が大当りをとり柳沢弥太郎吉保は有名になったが、実際のところは何も知られていない。今日まで高松の壁画が見られるのも柳沢が保存した為だが、本書は実録とか南部史料と伝わっている物まで十年の余の歳月をかけ調べに調べあげ吉保の幼少時代から、大名として水戸家との対立まで面白く息もつかせぬ！

黄門とは、中納言の唐名というが、尾張や紀伊は五十万石以上ゆえそうだが水戸は半分で、藩祖頼房から違い権中納言止まりゆえ黄門ではない。本物の光圀は寛永十九年の浅草寺境内の辻斬りが露見、父頼房に脇差や短刀まで取り上げられ三味線ばかりひいていた。が、この反骨精神はやがて綱吉や柳沢と対立…では黄門漫遊とは何かと史実で光圀の実像を！

元禄とは冷害の飢餓とインフレと暗黒な弾圧な時代だった。世直しを志す紀伊国屋文左一派と当時のキッシンジャー柳沢弥太郎吉保との苛酷な争いに、体制側吉良上野介に睨まれ巻きこまれるのは吉良おうば塩を駆逐した赤穂塩の浅野内匠頭。大正十二年関東大震災の時のごとく元禄十一年の大火からは茶湯千家弾圧に裏千家と被差別の世に変ってゆく。

反乱罪であり、内乱の罪に問われる武装突入の覚悟をきめた内蔵介は、十二月十四日討入りはラッキーにも一回で済んだが初から一回で成功すると思う訳はない。二段構え三段構えはしていなければ嘘である。儒教流行のため忠臣にされ義士にもされたが真実はそんなものではなかったのである。十年にわたって連載してきた元禄泰平記を初めて刊行！

〈本当の歴史を知るためには必読の戦国解明叢書〉

八切止夫の戦国意外史

—普及版B6・256頁— —上製本四六版330頁まで—

① 戦国悪党伝
（応仁の乱から京でうごめく難民の中から生まれた怪雄の道三殺しは信長か八百枚七八〇円）

② 乱世鉄仮面（まむしの道三）
（楠木正成の子孫正憲入道を初め、死をも怖れぬ群雄どもの知られざる戦国裏面史八八〇円）

③ 狂乱転戦記（光秀の槍は朱かった）
（明智光秀の朱槍をもち才蔵は生涯13回転職し天正年間の合戦のすべてに出動した八八〇円）

④ 明智光秀
（徳川時代の史観を打破し光秀の六月二日以降をとく、憎しみをこめて振り返れ。八八〇円）

⑤ 乱世心得銭儲け太閤記
（ねずみ講の元祖の近衛関白から秀吉までの乱世の金ぐりの史実考証を明白にとく八八〇円）

⑥ 織田信長誕生
（戦国武将の発生を織田信長の生涯に解明し織田一族から信長誕生の秘密をとく。八八〇円）

⑦ 異説、織田信長（織田信長殺人事件）
（尾張三郡から美濃伊勢近江と天下とりする迄の信長の実証を確定史料によって一七九〇円）

⑧ 戦国英雄伝（道三の子が光秀）
（本能寺の変の翌年には「天正十一年裁可状」がでて神道派が全滅の信長殺人事件七九〇円）

⑨ 若き日の明智光秀
（信長殺しに仕立てられたのは儒教全盛時代に道三の子が明智光秀と親の仇討ちに七九〇円）

⑩ 信長殺し光秀ではない
（信長殺しの資金源は京のニナ川財閥だったと新事実をとき真実を明かす書下し六四〇円）

⑪ 真書太閤記
（不朽の名作ここに装を新たにして二十六万冊目が門外不出の証拠写真を入れて。六九〇円）

⑫ 戦国悪党伝
（正親帝を廃立し取って代ろうとする秀吉の野心をくじく淀君の妹らの衝撃の真相六四〇円）

天皇への時代

〈実説楠木正成〉



明治になって脚光をあびた楠公が今日では悪党扱いされるのは何故かいう……樟神の氏子の総代だった切山大根畑氏の若者と庶民が、別所出身の窮乏を救わんと殻物安売りまでした帝と交流にあり方を初めて史実でのものの明らかにする大長篇。

上製箱入　一四〇〇円

グリーン黙示録

ポルトガルのスピノラ革命政権樹立の前夜、アフリカ有色人革命派やアラブゲリラにまきこまれた日本人ゴルファーの殺人事件……。「バァーゴルフ」創刊号以来連載九〇〇枚の八切止夫の珍しい推理長篇……。写真二〇枚入

三二〇頁　￥九八〇

元禄泰平記　〈水戸光圀〉　著者　八切止夫

1974年　11月25日　印刷

1974年　12月15日　第一刷　　発行者　矢留的

印刷　日本製版KK　　製本　日製バインダリー

発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町2—20
日本シェルター（株）内　日本シェル出版

☎　664・5040　668・1974　666・9912

振替　東京　112231　〒103